

海道西遺跡発掘調査報告書 1

一分譲住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一

2022

越谷市教育委員会

海道西遺跡発掘調査報告書 1

一分譲住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一

2022

越谷市教育委員会



海道西遺跡出土遺物 集合写真

序

埼玉県越谷市は、埼玉県東南部、東京都心から25km圏内に位置しており、市域の中央に元荒川、西に綾瀬川、東に古利根川が流れ、新方川や葛西用水、八条用水など多くの河川や用水が流れています。水の景観が本市の大きな特長となっています。

このたび、分譲住宅建設工事に先立ち、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査を実施したところ、遺跡の存在が明らかとなり、関係者からの多大なる理解と協力を得ながら、越谷市教育委員会で発掘調査を実施することができました。

発見された海道西遺跡は元荒川左岸の河畔砂丘上に立地する、平安時代から近世にかけての遺跡です。市内には5箇所の中川水系の河畔砂丘が知られており、そのうち南端の大相模河畔砂丘は県内における南限となっています。

今回の発掘調査は市内の河畔砂丘上の遺跡としては初めての調査事例となり、考古学的な成果だけでなく、河畔砂丘がいつ頃に形成されたのかなど、地質学的な成果にも寄与できる調査成果となったと考えられます。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護および普及・啓発の資料として、また、学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

結びに、発掘調査から本書の刊行にあたり特段のご理解とご協力を賜りました新旧土地所有者様、地域の多くの方々、関係者の皆様に対し、深く感謝申し上げます。

令和4年12月

越谷市教育委員会
教育長 吉田 茂

例　　言

- 1 本書は、埼玉県越谷市大字大林に所在する「海道西遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳における県遺跡番号と調査・整理時の略号は以下のとおりである。
海道西遺跡（No.78-017）、略号 KDN
- 3 本調査は、分譲住宅新築工事に伴う事前記録保存のための発掘調査を目的として、文化財保護法第99条に基づき越谷市教育委員会が調査主体者となり、菅原雄大を調査担当者として、株式会社中野技術から調査支援を受けて実施した。
- 4 発掘調査は、旧土地所有者、株式会社中央住宅、越谷市教育委員会、株式会社中野技術の4者で取り交わした協定に基づいて実施した。
- 5 発掘作業から発掘調査報告書作成・刊行に係る費用は旧土地所有者が負担した。
- 6 発掘作業、整理等作業、報告書作成・刊行は11に記した組織により実施した。
発掘作業は令和4年4月11日から令和4年5月13日まで実施した。
整理等作業、報告書作成・刊行は、令和4年5月13日から令和4年12月28日まで実施した。
- 7 本書は菅原雄大が監修し、編集は下岡孝明が担当した。執筆は第I・II章を菅原雄大、第III章を下岡孝明・小林陽子、第IV章を菅原雄大・下岡孝明・根本 靖が行った。
- 8 本書に係る記録類及び出土遺物等は、越谷市教育委員会が保管している。
- 9 本報告書については、発掘調査成果の周知と活用又は学術研究、教育等を目的とする場合は、越谷市教育委員会の承諾なく無償で複製して利用できる。
- 10 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。記して感謝申し上げる。
(敬称略、五十音順)
足立久男 梅原秀人 小川政之 鬼塚知典 中野達也 平社定夫 NPO法人越谷市郷土研究会
春日部市教育委員会
- 11 発掘調査組織は下記のとおりである。

調査主体者 越谷市教育委員会

(1) 発掘作業

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	菅原 雄大
教育総務部長	鈴木 功	生涯学習課文化財担当主任	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	生涯学習課文化財担当主事	村田 琴音
生涯学習課副課長	山田健太朗	越谷市市史専門委員	鈴木 健弥
生涯学習課文化財担当主幹（統括）	橋本 充史	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課文化財担当主幹	福田 博	越谷市市史専門委員	安井 陽子

(2) 整理等作業及び報告書作成・刊行

教育長	吉田 茂	生涯学習課文化財担当主幹	菅原 雄大
教育総務部長	鈴木 功	生涯学習課文化財担当主任	栗原 利峰
生涯学習課長	木村 和明	生涯学習課文化財担当主事	村田 琴音
生涯学習課副課長	山田健太朗	越谷市市史専門委員	鈴木 健弥
生涯学習課文化財担当主幹（統括）	橋本 充史	越谷市市史専門委員	鬼塚 千花
生涯学習課文化財担当主幹	福田 博	越谷市市史専門委員	安井 陽子

調査支援組織 株式会社中野技術

(1) 発掘作業

主任技術者	下岡 孝明	作業員	久保田創大
調査員	下岡 孝明		佐々木純一
測量員	小林 由典		佐藤 海琉
測量員	高橋 貴子		閑口 則男
作業員	植村 直美		千葉 真人
	臼井 大輔		福泉 藍
	荻原 和彦		藤澤 明弘
	辛島美樹雄		松田 伸行
	川口 砂織		宮澤 洋美
	北原 和一		米島 妙子

(2) 整理等作業及び報告書作成・刊行

主任技術者	下岡 孝明	作業員	石橋 佳奈
調査員	下岡 孝明		井上麻美子
	根本 靖		臼井 孝
調査補助員	小林 陽子		内田 恵子
調査補助員	佐貫 健		加藤 洋子
調査補助員	高橋 貴子		久保田創大
作業員	青木 利恵		鈴木 彩乃
	明石千とせ		山本 圭子
	石川あゆみ		

凡　例

- 1 本報告書におけるX・Yの座標値は、世界測地系（新測地系）である。
- 2 各挿図に記した方位は、全て座標北を指す。
- 3 調査で使用した大グリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10m×10mの範囲とし、この中を2m×2mの25小グリッドに細分した。
- 4 大グリッドの名称は、北西を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C・・・）、西から東方向に数字（1・2・3・・・）を付し、アルファベットと数字を組み合わせて呼称した。大グリッドは、A1グリッド北西隅の座標をX = -9750.000 m、Y = -6000.000 mとした。
- 5 小グリッドの名称は北西側を1とし、東に向かって1～5、2段目は6～10、以下同様にして続き、5段目で21～25とした。
- 6 遺構挿図版中の水準数値は海拔標高（単位m）を表す。
- 7 本文中に掲載した遺構及び実測図の縮尺は図毎に明記している。
- 8 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。なお、遺構一覧表の計測値はm単位とし、（）は残存値を示す。
S I…住居跡 S K…土坑 S D…溝 P…小穴（ピット）
- 9 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
 - ・遺物計測値は大きさをcm、重量をg単位とした。
 - ・計測値の〔〕は残存値を、（）は推定値を示す。
- 10 土層観察と遺物における色調の判定は、X-rite社製マンセルソイルを使用すると共に、『新版標準土色帖』2008年版（小山正忠・竹原秀雄編著 日本国研事業株式会社）を併用した。
- 11 「主軸」は、カマドを伴う住居跡はカマドが存在する壁面に直交する軸を、その他は長軸を主軸とみなした。「主軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E、N-10°-W）
- 12 遺構図版中の網掛け部分は以下を示す。

■…焼土範囲 ■…粘土範囲 ■…炭範囲

- 13 遺構挿図中のドットは遺物出土位置を示しており、番号は掲載番号と一致する。
- 14 土層注記中の「軽石」とは色調が白色～灰白色を呈し、極細粒砂となるものである。
- 15 遺物実測図中の網掛け部分は以下を示す。

■…煤 ■…灰釉・綠釉・鉄釉 ■…黒色処理

目 次

巻頭写真

序

例言

凡例

目次（挿図目次・挿表目次・写真図版目次）

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査の経過	2
II	遺跡の立地と環境	3
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	4
III	調査の方法と成果	7
1.	調査の概要	7
2.	基本層序	7
3.	遺構	8
(1)	竪穴住居跡	8
(2)	土坑	9
(3)	溝	10
(4)	畝状遺構	10
(5)	ピット	13
4.	遺物	40
IV	総括	67
1.	住居跡出土遺物の産地組成と地域交流	67
2.	調査区出土土師器について	68
3.	大林河畔砂丘の形成年代について	70

写真図版（遺構・遺物）

挿 図 目 次

第1図 越谷市の位置	2	第32図 S K34 遺構実測図	35
第2図 埼玉県の地形	3	第33図 S D01 遺構実測図	36
第3図 越谷市の地形	5	第34図 S K05~S K10 遺構実測図	37
第4図 調査位置図	6	第35図 S K16~S K33 遺構実測図	37
第5図 調査区位置図	6	第36図 P 01~P 05 遺構実測図	38
第6図 グリッド配置図	7	第37図 S K01出土遺物（1）	43
第7図 調査区全体図（1面）	14	第38図 S K01出土遺物（2）	44
第8図 調査区全体図（2面）	15	第39図 S K01出土遺物（3）	45
第9図 調査区全体図（1区1面）	16	第40図 S I 02出土遺物（1）	46
第10図 調査区全体図（2区1面）	17	第41図 S I 02出土遺物（2）	47
第11図 調査区全体図（1区2面）	18	第42図 S I 02出土遺物（3）	48
第12図 調査区全体図（2区2面）	19	第43図 S I 02出土遺物（4）	49
第13図 包含層遺物出土位置図	20	第44図 S I 02出土遺物（5）	50
第14図 トレンチ・壁面土層断面（1）	21	第45図 S K02出土遺物	51
第15図 トレンチ・壁面土層断面（2）	22	第46図 S K03出土遺物（1）	52
第16図 トレンチ・壁面土層断面（3）	23	第47図 S K03出土遺物（2）	53
第17図 トレンチ・壁面土層断面（4）	24	第48図 S K04出土遺物	53
第18図 S K01 遺構実測図（1）	25	第49図 S K11出土遺物	54
第19図 S K01 遺構実測図（2）	26	第50図 S K12出土遺物	54
第20図 S K01 遺構実測図（3）	27	第51図 S K34出土遺物（1）	54
第21図 S I 02 遺構実測図（1）	28	第52図 S K34出土遺物（2）	55
第22図 S I 02 遺構実測図（2）	29	第53図 S K34出土遺物（3）	56
第23図 S I 02 遺構実測図（3）	30	第54図 S D01出土遺物	56
第24図 S K02 遺構実測図	31	第55図 P 03出土遺物	57
第25図 S K03 遺構実測図（1）	31	第56図 包含層出土遺物	57
第26図 S K03 遺構実測図（2）	32	第57図 歓状遺構出土遺物	58
第27図 S K04 遺構実測図（1）	32	第58図 遺構外出土遺物	58
第28図 S K04 遺構実測図（2）	33	第59図 河畔砂丘の分布及び周辺地形図	69
第29図 S K11・S K12・S K15 遺構実測図	33	第60図 東国須恵器生産窯跡分布図	70
第30図 S K13 遺構実測図	34	第61図 河畔砂丘及び河道砂と d-d' 断面の関係	71
第31図 S K14 遺構実測図	34	第62図 大林河畔砂丘形成と 遺構構築の関係	71

挿表目次

第1表	市内遺跡一覧	5	第8表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	64
第2表	遺構一覧表	39	第9表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	65
第3表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	59	第10表	遺物觀察表（土製品等）	66
第4表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	60	第11表	遺物觀察表（石製品）	66
第5表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	61	第12表	遺物觀察表（金属製品）	66
第6表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	62	第13表	遺物觀察表（錢貨）	66
第7表	遺物觀察表（土器・陶磁器等）	63			

写真図版目次

写真図版1

写真1 調査区全景（合成写真）

写真図版2

写真2 1区東西トレンチ 土層断面①（南から）

写真3 1区東西トレンチ 土層断面②（南東から）

写真4 1区南北トレンチ 土層断面①（西から）

写真5 1区南北トレンチ 土層断面②（西から）

写真6 1区南壁 土層断面①（北から）

写真7 1区南壁 土層断面②（北から）

写真8 1区東壁 土層断面（西から）

写真9 2区南壁 土層断面①（北から）

写真図版3

写真10 2区南壁 土層断面②（北から）

写真11 SK01 カマド土層断面（北東から）

写真12 SK01 遺物出土状況（北から）

写真13 SK01 遺物（2）出土状況（北から）

写真14 SK01 遺物（16）出土状況（南から）

写真15 SI02 土層断面①（東から）

写真16 SI02 土層断面②（東から）

写真17 SI02 遺物（36）出土状況（東から）

写真図版4

写真18 SI02 遺物出土・完掘状況（東から）

写真19 SI02カマド 土層断面（南から）

写真20 2区北壁・SI02カマド 土層断面（南から）

写真21 SI02カマド 遺物出土状況（南から）

写真22 SI02 挖方土層断面・炭範囲（東から）

写真23 SK03 土層断面・完掘状況（北西から）

写真24 SK04 炭化物断ち割り断面（北西から）

写真25 SK04 土層断面（北から）

写真図版5

写真26 SK04 張り出し部土層断面（北から）

写真27 SK04 炭化物出土状況（東から）

写真28 SK04 完掘状況（東から）

写真29 SK13 土層断面・完掘状況（東から）

写真30 SK14 土層断面（北から）

写真31 SD01 土層断面（南から）

写真32 P01・P02 土層断面（南から）

写真33 P05 土層断面（北から）

写真図版6

S K01出土遺物（1）

写真図版7

S K01出土遺物（2）

写真図版8

S K01出土遺物（3）・S I02出土遺物（1）

写真図版9

S I02出土遺物（2）

写真図版10

S I02出土遺物（3）

写真図版11

S I02出土遺物（4）・S K02出土遺物・S K03出土遺物（1）

写真図版12

S K03出土遺物（2）

写真図版13

S K03出土遺物（3）・SK04・SK11・SK12出土遺物・SK34出土遺物（1）

写真図版14

S K34出土遺物（2）・SD01出土遺物（1）

写真図版15

SD01出土遺物（2）・P03・包含層・鉢状遺構、遺構外出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

越谷市（第1図）大字大林に所在する海道西遺跡は、奈良平安時代の土師器や須恵器、近世陶磁器の表面採集をきっかけとして平成18年に発見され、埼玉県教育委員会及び越谷市教育委員会では埋蔵文化財包蔵地として周知を行い、保護を図ってきた。

令和2年1月27日、本書で報告する範囲において住宅建設を見据えた埋蔵文化財存否照会が不動産会社より行われた。その時点で当該地は埋蔵文化財包蔵地になっていたものの、埋蔵文化財包蔵地に隣接する土地であることから、照会者に対して試掘調査の実施について協力を求めたところ、関係者の理解と協力が得られたため、令和2年2月20日に教育委員会で試掘調査を実施することになった。

当該地には西側住宅地に供給する現用の水道管や、かつて当該地に建てられていた家屋へ配水する管の存在があらかじめ図面から分かっていたため、管を避けながらの部分的な試掘調査となった。

試掘調査の結果、地表面下約65cm下に厚さ10cmの遺物包含層が存在し、平安時代の遺構・遺物が存在することが判明した。また、当該地は砂で構成されていることも判明した。

遺跡の存在が判明したため、越谷市教育委員会教育長名で令和2年2月28日付け越教生第988号にて埼玉県埋蔵文化財包蔵地調査カード（変更増補）を埼玉県教育委員会教育長に提出し、本書で報告する範囲を含めるように埋蔵文化財包蔵地の範囲を拡大した。

範囲拡大を受けて改めて関係者と協議を行い、開発行為と埋蔵文化財保護の調整を進めたが、分譲住宅建設の計画に変更はなく、また、住宅建設部分については柱状改良工事が必須であり、それにより埋蔵文化財が破壊されることも判明した。

令和4年3月17日付けで、原因者となった株式会社中央住宅から、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、越谷市教育委員会教育長名で同月18日付け越教生第822号により埼玉県教育委員会教育長へ進達した。これを受けた埼玉県教育委員会教育長から令和4年3月24日付け教文資第5-2146号で工事着手前に発掘調査を実施するよう指示通知がされた。住宅が新築される範囲以外の外構等部分については、振削面と埋蔵文化財との間に30cm以上の保護層を有し、遺跡が保護されるため、発掘調査の対象外とされた。

調査は越谷市教育委員会が主体となって実施することとなるため、文化財保護法第99条の規定に基づく発掘調査通知は、越谷市教育委員会教育長名にて令和4年4月8日付け越教生第2号により埼玉県教育委員会教育長へ提出した。

なお、前述のとおり調査原因是分譲住宅建設であり、旧土地所有者と新土地所有者である株式会社中央住宅の土地売買契約において、発掘調査に係る費用は旧土地所有者が負担することとされていた。越谷市教育委員会としては突発的な発掘調査であり、市として発掘調査等に係る契約等を実施していくは分譲住宅建設スケジュールに間に合わせるのは困難であったことなどから、民間調査組織と旧土地所有者が発掘調査実施に関する契約を締結し、越谷市教育委員会が監督・管理することとなった。このような調査体制で発掘調査を行うためには平成21年6月1日付け教生文第1145号の指針に基づき、事前に埼玉県教育委員会と越谷市教育委員会が事前協議を行う必要があることから、令和4年3月29日に事前協議を実施し、本件に関しては民間調査組織の導入に関してはやむを得ないこととされた。

よって、旧土地所有者・株式会社中央住宅（原因者）・越谷市・株式会社中野技術（民間調査組織）の4者で令和4年4月8日付け発掘調査実施に関する協定書を締結している。

ほか、発掘作業終了後における法的手続きの概要は以下のとおりである。

埋蔵物発見届

届出者：越谷市教育委員会教育長

届出先：越谷警察署長

届出年月日：令和4年5月17日

埋蔵物の文化財認定通知

通知者：越谷市教育委員会教育長

通知先：越谷警察署長

通知年月日・文書番号：令和4年5月17日付け越教生第157-1号

埋蔵文化財保管証提出

提出者：越谷市教育委員会教育長

提出先：埼玉県教育委員会教育長

提出年月日・文書番号：令和4年5月17日付け越教生第157-2号

2. 発掘調査の経過

海道西遺跡は越谷市大字大林に所在する。今回の調査地点は、試掘調査により確認された溝及び小穴の調査を実施することとし、令和4(2022)年4月11日～5月13日に発掘調査を実施した。発掘調査は、まず準備作業として柵設置、機材搬入、基準点測量及び調査区の位置出しを行った後、バックホウにより表土除去を行った。当初、表土除去は排土置き場を確保するため南側の調査区（1区）から開始し、1区の終了後に北側の調査区（2区）を開始する予定であったが、調査区域内に排土を置ききる目処がついたため、4月25日より2区の掘削を開始している。表土を剥いだ後、世界測地系に基づき10mの大グリッド及び2mの小グリッドを設定し、遺物包含層出土遺物の記録・取り上げ、遺構確認、写真撮影を行い、遺構の掘り下げを開始した。遺構は、埋土の状態を観察するために半截またはベルトを残して床面まで掘り下げ、写真撮影及び遺構断面図の作成を行った。主要出土遺物は写真撮影後にレベリングを行い取り上げた。特殊な出土状況がうかがえたものやカマド内出土遺物については写真撮影をしてオルソ図を作成している。遺構は完掘後、平面図をトータルステーションと電子平板を用いて記録したのち再度精査し、写真撮影を行った。なお本調査地は砂質であり、遺構の掘り下げ後の状態を長時間保つことが困難であると考えられたため、掘削後すぐに記録を行うよう努めた。1区・2区ともに最終埋戻しを5月13日に実施し、同日越谷市教育委員会、株式会社中野技術の立ち合いのもと調査区の引き渡しが行われ、現地作業のすべてを完了した。



第1図 越谷市の位置

II 遺跡の立地と環境

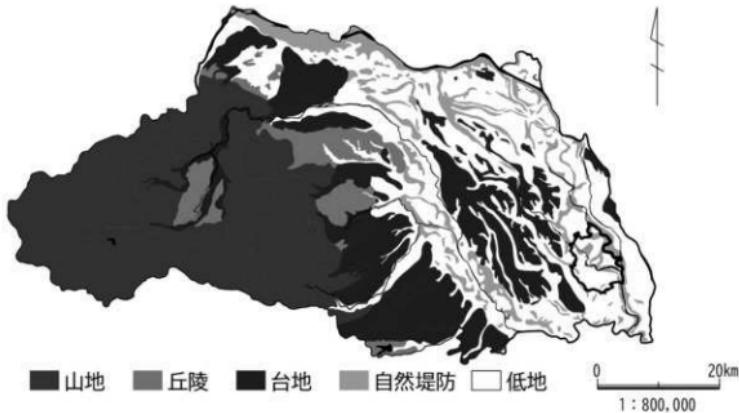
1. 地理的環境

海道西遺跡は埼玉県東部に広く発達する中川低地のなかに位置している。中川低地は埼玉県西南部に分布する荒川低地と川口市南部で合流し、東京の下町低地に続いている。市域は元荒川・古利根川・綾瀬川の顕著な曲流によって地形が形成され、その流域に沿って自然堤防の微高地が発達していることから、市域の土地形成にはこれらの河川が大きな役割をはたしていたことがうかがえる。

現在までに元荒川の曲流部分については直線化がなされているが、元荒川・古利根川の流路については比較的一定していたと考えられ、現在の流路に沿ったかたちで自然堤防が発達している。これに比べて綾瀬川の流路は自然堤防が分散しており、乱流して流路を変えていたことがうかがえる。

越谷市域の標高は北部で6m前後、南部で4m前後を示し、平均傾斜1,000分の0.4程度の非常にゆるい傾斜をしている。前述のとおり市域は自然堤防と後背低湿地との微地形が顕著であり、高度差1m前後のゆるい起伏が見られるにすぎない。かつては自然堤防の微高地に住宅が集まり集落がつくられ、後背低湿地が水田として耕作されるという、地形に合わせた土地利用がなされていたが、現代では低湿地にも住宅が建てられ、土地利用の様子が急激に変化している。

市域で現在までに発見されている遺跡は全て自然堤防上に立地しているが、海道西遺跡は自然堤防上のうち、河畔砂丘に立地するという特徴をもつ。ここでいう河畔砂丘とは、榛名山や浅間山の火山灰等に由来する大量の砂が、寒冷期の強い季節風により、利根川の旧河道沿いに吹き溜められて形成された内陸の砂丘である。平安時代から室町時代にかけて形成されたと考えられており、羽生市から越谷市にかけての中川低地に点々と分布している。越谷市内では袋山河畔砂丘・大林河畔砂丘・北越谷河畔砂丘・東越谷河畔砂丘・大相模河畔砂丘が知られており、海道西遺跡は大林河畔砂丘地に立地している。遺跡の東側約50mには一般県道大野島越谷線が後背湿地又は自然堤防の縁辺部を通っているが、その標高が約4.1mであるのに対し、調査区地表面の標高は約5.2mを測り、調査区の県道に対する比高差は約1.1mの高地となっている。



第2図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

越谷市域で現在のところ最古の遺跡は古墳時代前期の増林中妻遺跡である。増林中妻遺跡は表面採集により当該期の遺跡が存在するのではないかと言わっていたところ、平成 29 年度に実施した試掘調査により竪穴住居跡 1 軒、溝 7 条、ピット 1 基が確認され、当該期の低地の遺跡として貴重な発見例となつた。

古墳時代後期では見田方遺跡が知られている。見田方遺跡は昭和 41 年、昭和 42 年の 2 回にわたって発掘調査が行われており、竪穴住居が検出され、土器、土鍤、紡錘車などが出土した。本遺跡もほとんど遺跡が無いとされていた中川低地における代表的な遺跡として評価されている。

その他、分布調査の成果として、草加・八潮遺跡確認調査団による昭和 56 年発行の『中川低地遺跡確認調査報告書』によれば、越谷市増林地内で縄文時代の遺物が、越谷市東越谷地内で弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物が、越谷市大成町地内で古墳時代中期から後期の遺物がそれぞれ表面採集されているとの報告がされている。

また、令和 3 年度に発掘調査が行われた越谷警察署前遺跡においても、原位置はとどめていないものの、弥生時代後期～古墳時代前期の土器細片が出土している。これらの成果を評価すれば、市域において弥生時代終末期から古墳時代にかけての遺跡が他にも複数存在する可能性は十分にあるといえる。

古代についてみれば、遺跡としては今回報告する海道西遺跡以外に市域には 7 遺跡が存在している(第 1 表)。このうち、発掘調査事例があるのは大道遺跡と越谷警察署前遺跡である。大道遺跡は 9 世紀後半から 10 世紀前半～中葉頃の遺跡であり、遺構として竪穴住居・土師器焼成坑・土坑・溝などが確認されており、武藏型甕や新治・南比企・上総・東海・猿投産及び下総や三和産と思われる須恵器が出土している。越谷警察署前遺跡では 9 世紀後半頃の土坑 1 基が確認され、武藏型甕や東金子産と思われる須恵器が出土している。

遺跡以外に目を向けると、海道西遺跡より北西に直線距離で約 3 km、元荒川を挟んだ対岸には野島山浄山寺が立地している。浄山寺は寺伝によると、下野国都賀郡の豪族壬生氏の出であるとされる慈覚大師円仁が貞觀 2 年(860)に開基したとされている。円仁は最澄に師事し、武藏・上野両国での布教に功労があったとされ、関東には円仁が開山・再興したと伝わる寺が多数存在している。

從来、浄山寺の本尊「木造地蔵菩薩立像」は、年 2 回の開帳日以外は秘仏とされ、詳しい調査を受けてこなかったが、平成 23 年の東日本大震災で両足が破損したため、像の解体修理を行ったところ、平安時代初期にあたる 9 世紀に作られた、関東でも屈指の非常に古い像であること、慶長 5 年(1600)に彩色補修をされたことなどが判明し、平成 28 年 8 月に国指定重要文化財となった。仏像の年代が寺伝の開基年代及び大道遺跡における平安時代の主体的な時期とも符合するため、周辺の歴史を考える上で示唆に富む発見であるといえる。

中世になると、市域の遺跡は 3 遺跡に減少する。ただし、市域に約 130 基存在している板碑の分布等から河川の自然堤防上に集落が展開していた状況が推測され、実際には未発見の遺跡が多数存在するものと考えられる。海道西遺跡から直線距離約 1 km 南南西地点にも、元荒川の川底から板碑が引き揚げられている。

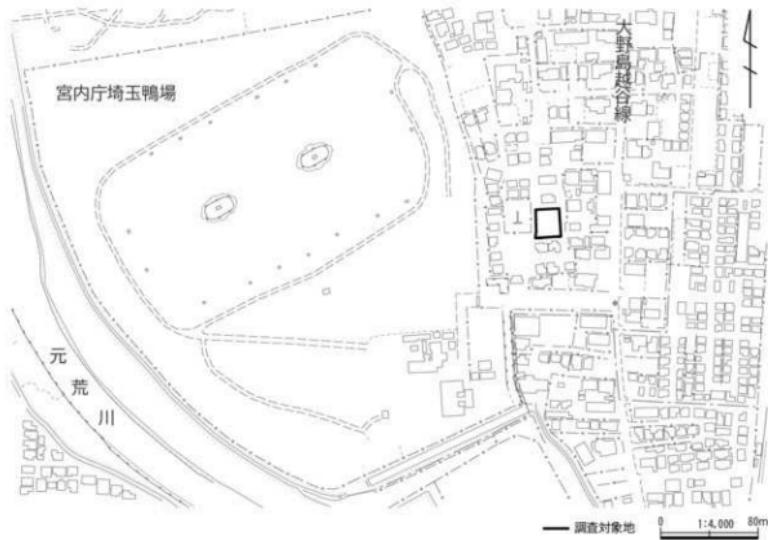
江戸時代では『新編武藏風土記稿』によれば大林村の家数は 31 であり、遺跡の北側に所在する大林寺を「禅宗臨濟派、下總国葛飾郡山王村東正寺門徒、本尊釈迦」、調査区の西側に隣接する墓地は東福院跡(東福寺とする史料もあり)であるが、「真義真言宗、大房村淨光寺(註：現北越谷)門徒、本尊不動」としている。なお『大林尼寺旧記並規定』によれば、大林寺ははじめ五霞村天王山東昌寺大震和尚の隠居寺として享保 5 年(1720)にとりたてられた庵室で、大林庵と称されたが、その後寺院の經營上尼僧が住職し尼寺と称された。享保 5 年以前に何がしかの庵があったことを思わせる記述があるが詳細は不明である。



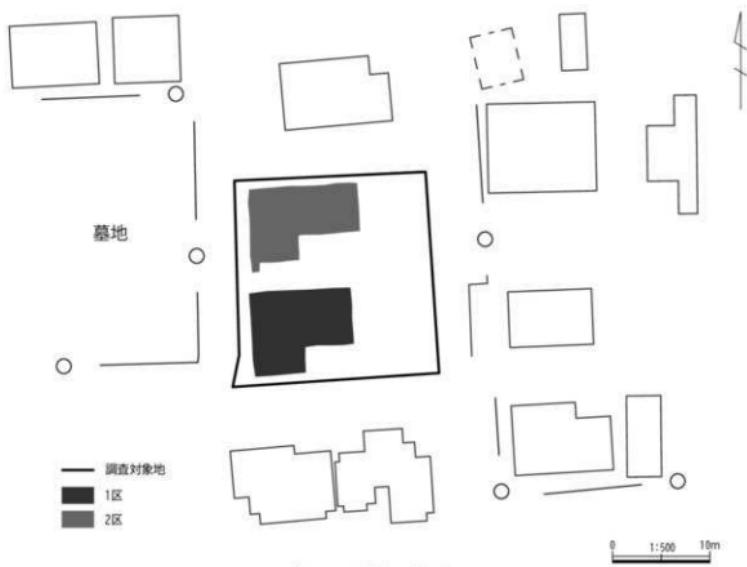
第3図 越谷市の地形

第1表 市内遺跡一覧

番号	県道跡番号	遺跡名	時期
1	78-001	見田方遺跡	古墳後期
2	78-002	西口遺跡	奈良・平安・江戸
3	78-003	一高遺跡	室町・戦国・江戸
4	78-004	大相模次郎能高鰐跡	不詳
5	78-005	会田出羽屋敷	江戸
6		穴番	—
7	78-007	清淨院開山塚	鎌倉
8	78-008	越ヶ谷御殿跡	南北朝・室町・戦国・江戸
9	78-009	No.9遺跡	奈良・平安
10	78-010	蒲生の一里塚	江戸
11	78-011	大道第1遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝 室町・戦国・江戸
12	78-012	大道第2遺跡	奈良・平安・鎌倉・南北朝 室町・戦国・江戸
13	78-013	No.13遺跡	奈良・平安
14	78-014	No.14遺跡	奈良・平安
15	78-015	No.15遺跡	奈良・平安
16	78-016	越谷蟹原署前遺跡	奈良・平安・江戸
17	78-017	海道西遺跡	奈良・平安・江戸
18	78-018	増林下前遺跡	江戸
19	78-019	東方西口遺跡	室町・戦国・江戸
20	78-020	増林中裏遺跡	古墳前期
21	78-021	大沢宿籠鈍屋跡	江戸



第4図 調査位置図



第5図 調査区位置図

III 調査の方法と成果

1. 調査の概要

海道西遺跡は大林河畔砂丘上に位置する遺跡である。地山、遺構埋土共に砂であり、色調も明確な差が認められず検出は困難を極めたものの、本調査区からは竪穴住居跡2軒、火葬土坑1基、土坑32基、溝1条、小穴5基が検出された。主な遺構としては平安時代のものと考えられる竪穴住居跡2軒や、時期を確定しえないが中世の所産と考えられる火葬土坑、近世以降の畝間と思われる土坑24基の検出があげられる。遺物については、平安時代の須恵器・土師器を中心として、近世の陶磁器類や金属製品等が出土している。また、先に述べた火葬土坑からは多量の炭化物と少量の骨片が出土している。

2. 基本層序

本調査区の基本層序は以下のとおりである。

表土・盛土層（厚さ約65~70cm）

遺物包含層（厚さ約10cm）

7.5YR3/2黒褐色砂

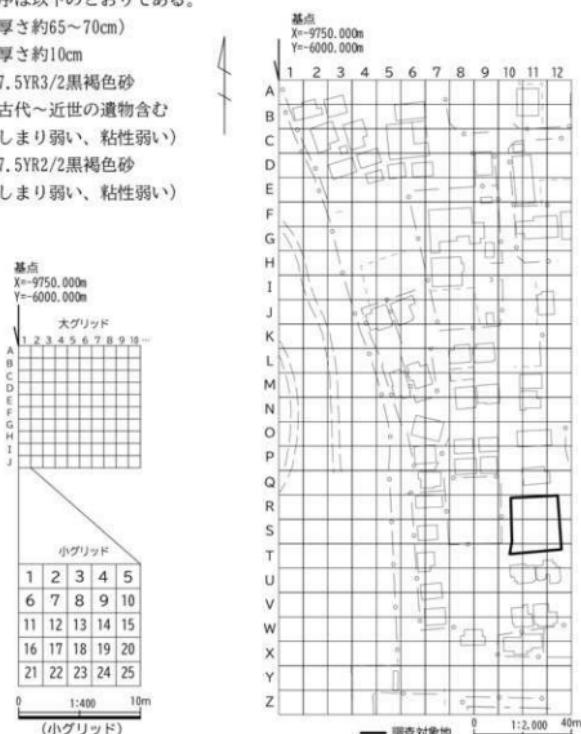
古代～近世の遺物含む

しまり弱い、粘性弱い)

地山

(7.5YR2/2黒褐色砂

しまり弱い、粘性弱い)



第6図 グリッド配置図

3. 遺構

今回の調査では、遺構確認時に溝や歛間等のプランが検出され、掘削を進めたところ下層より住居跡や土坑等が検出された。歛間や住居跡・土坑の出土遺物には明確な時期差を示す資料が少なく、面としての明確な差異を求めるることは困難であったが、遺構の検出状況や切り合い関係等から、歛間や溝等の検出面を1面、住居跡や土坑等の検出面を2面としている。

(1) 穴穴住居跡

S K 01 (第18～20図)

S10-20・25、S11-16～18・21～23、T10-5、T11-1～3グリッドにまたがって位置する。SK02・03・04・05・06・10・11、SD01、P03・05に切られる。遺構北東側の一部が本遺跡特有の検出の困難さから判然としないが、平面形から推察するにSD01まで延び、全体として不整形な隅丸方形を呈すると考えられる。検出当初は土坑であると考え掘削を進めていたが、遺構北部にカマドと思われる焼土が確認され、また底面付近から硬化面が一部検出されたことから、最終的に住居跡とした。なお、記録等の混乱を避けるため、遺構名は検出当初につけたSK01を使用している。主軸方位はN-18°-Wである。確認できる規模は長軸5.31m、短軸4.35m、深さ0.65mを測り、壁は緩やかに立ち上がる。床面は南側がやや低くなっている。床面には住居中央部東側に硬化面が検出されたが、壁周溝や柱穴は確認されていない。

カマドは北壁の中央に設けられ、SK11により北東部の一部を削平されている。確認できる規模は全長1.61m、幅0.69m、深さ0.46mである。燃焼部が壁の外に突出していると思われる。焼土が全体的に散在し、埋土中からも焼土、炭化物が検出されたが、明確な煙道や火床部は確認できない。

遺物は、須恵器、土師器、磁器、陶器、鉄製品、炭化物が出土している。住居跡の帰属時期は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭であると思われる。

S I 02 (第21～23図)

R11-12-16～18-21～23グリッドにまたがって位置する。遺構北西部に攪乱を受け、SK02に切られ、SK14を切る。平面形状は隅丸方形を呈する。SK01とは異なり、検出は比較的明瞭であったため、規模や内部構造は正確に確認できていると考えている。主軸方位はN-2°-Wである。規模は長軸4.35m、短軸4.13m、深さ0.23mを測り、壁は底面付近で丸みを帯びて垂直に上方へと延びる。床面は概ね平坦であるが、東側がわずかに低くなっている。

カマドは北壁の中央からやや東側に設けられ、攪乱により上層部が削平されている。確認できる規模は全長1.34m、幅0.61m、深さ0.29mである。燃焼部が壁の外側に突出している。明確な煙道は確認されていないが、住居北側の調査区壁面に炭化物及び焼土を含む層の堆積が確認できるため、煙道が調査区北壁まで延びていた可能性がある。カマドの埋土からは焼土、炭化物が観察されるものの、火床部は判然としない。

床面には住居中央部東側の広範囲に広がる硬化面が確認できる。また、住居中央部及びカマド南部に焼土及び炭化物の薄層が確認できる。壁周溝や柱穴は確認されていない。床面からの掘方の深さは0.04mを測る。

遺物は、須恵器、土師器、磁器、陶器、土器（焙烙、支脚）、石製品、礫が出土している。住居跡の帰属時期は、出土遺物から9世紀後半～10世紀初頭であると思われる。

(2) 土坑

SK 02 (第24図)

R11-12～14・16～25、S11-12～14・17～19・22～24、T11-3～4グリッドにまたがって位置する。1・2区に渡って確認される遺構で、表土下の最上面より掘り込まれている近世の土坑又は本調査区のもともとの地形が東側に向かって下がっていると思われ。それを水平にするための整地面の可能性がある。1区東西トレーンチの土層断面確認の際に検出された。平面形状は不整形であり、確認できる規模は、1区で長軸5.16m、短軸5.07m、深さ0.85m、2区で長軸7.22m、短軸4.80m、深さ0.66mを測る。断面形状は西側に向かって緩やかに立ち上がる皿型を呈すると思われる。遺物は、須恵器、土師器、磁器、陶器、土製品（泥面子）が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物や切り合い等から近世以降であると思われる。

SK 03 (第25～26図)

T11-1～2・6～7グリッドにまたがって位置する。SK01を切り、SD01、P03に切られる。平面形状は隅丸方形を呈し、遺構の南側および東側が調査範囲外へと延びる。古代に比定される遺物が埋土内上層～中層にかけて多数出土しているが、カマドや柱穴といった住居に伴う附属施設が検出されなかつたため土坑としている。確認できる規模は長軸3.05m、短軸2.20m、深さ0.66mを測る。断面形状は逆台形状を呈し、底面には凹凸が確認できる。遺物は、須恵器、土師器、磁器、陶器、土器（焙烙）、土製品（土錐）、炭化物が出土している。遺構の帰属時期は出土遺物より9世紀後半であると思われるが、SK01を切るため、10世紀初頭まで下る可能性がある。

SK 04 (第27～28図)

S11-23、T11-2～3グリッドにまたがって位置し、遺構南側の一部が調査区外へと延びる。SK01を切る。平面形状は、主軸をN-11°-Eとする隅丸長方形の主体部と、その西側に直行する溝状の掘り込みを持ち、全体として平面形状はT字形となる。溝状の掘り込みはSK01検出段階の掘り下げで失われてしまったが、b-b'断面から推測するとこれ以上あまり延長しないと思われる。確認できる規模は、主体部で長軸0.90m、短軸0.68m、深さ0.40m、溝で長軸0.80m、短軸0.30m、深さ0.18mを測る。断面形状は主体部が壺型、溝がV字型を呈する。底部は主体部の方が20cmほど深く掘り込まれている。埋土中から多量の炭化物と、少量ながら骨片が出土した。炭化物の一部は主体部の縁に添うように形を保った状態で検出されている。骨片は埋土中～上層付近よりまとまって出土しているが、保存状態は良いとは言えない。また細片がほとんどであるため、火葬後に拾い上げられた主要骨の残余分が検出されたものと考えられる。その他の遺物は、須恵器、土師器が出土しているが、いずれも流れ込みによるものと考えられる。遺構の帰属時期は、形状等から15世紀～16世紀頃であると思われる。

SK 11 (第29図)

S11-11～12・16～18グリッドにまたがって位置する。SK01を切り、SK02・05・06・07・08に切られる。平面形状は隅丸長方形を呈し、遺構北側が調査区外へと延び、東側はSK02に切られる。主軸方位はN-85°-Eである。確認できる規模は長軸2.93m、短軸1.25m、深さ0.21mを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は、須恵器、土師器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から9世紀代であると思われる。

SK 12 (第29図)

S11-18～19・23～24グリッドにまたがって位置する。トレーンチ以南ではSK02に削平されており確

認できない。SK15 を切る。平面形状は隅丸方形を呈し、遺構東側が調査区外へと延びる。主軸方位は N - 4° - W である。確認できる規模は長軸 2.20 m、短軸 1.72 m、深さ 0.23 m を測る。断面形状はレンズ状を呈する。遺物は、須恵器、土師器、磁器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から 9 世紀代であると思われる。

SK 13 (第 30 図)

S10-19 グリッドに位置する。SD01 に切られる。平面形状は溝状か。遺構西側が調査区外へと延びる。主軸方位は N - 80° - E である。確認できる規模は長軸 0.65 m、短軸 0.45 m、深さ 0.17 m を測る。断面形状はレンズ状を呈する。遺物は出土していない。

SK 14 (第 31 図)

R10-20・25、R11-16・21 グリッドにまたがって位置する。遺構北側に搅乱を受け、S102 に切られる。平面形状は橢円形を呈する。主軸方位は N - 30° - E である。確認できる規模は長軸 1.07 m、短軸 0.82 m、深さ 0.75 m を測る。断面形状は方形で、遺構底面隅は丸みを帯びる。遺物は、須恵器、土師器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から 9 世紀代であると思われる。

SK 15 (第 29 図)

S11-13 ~ 14・18 ~ 19 グリッドにまたがって位置する。SK12 に切られる。平面形状は不整形を呈し、遺構北側と東側が調査区外へと延びる。主軸方位は N - 87° - E である。確認できる規模は長軸 1.48 m、短軸 0.82 m、深さ 0.20 m を測る。断面形状はレンズ状を呈する。遺物は出土していない。

SK 34 (第 32 図)

R10-20・25、R11-12 ~ 25、S11-1 グリッドにまたがって位置する。2 区の大部分に渡り存在すると考えられる土坑で、2 区南壁土層断面で SK02 の下層より検出された。平面形状は不整形を呈する。確認できる規模は長軸 8.33 m、短軸 4.61 m、深さ 0.45 m を測る。遺物は、須恵器、土師器、土器（焰烙）、礫が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から 9 世紀後半と思われる。

(3) 溝

SD 01 (第 33 図)

R10-14・19・24、S10-4 ~ 5・9 ~ 10・14 ~ 15・19 ~ 20・25、T10-5・10、T11-6 グリッドにまたがって位置する。SK01・03・13、P04 を切る。1・2 区西側を南北に延びる溝で、南端は調査区の外へと延びる。主軸方向は N - 8° - W である。確認できる規模は長軸 16.15 m、短軸 1.32 m、深さ 0.76 m を測る。断面形状は箱築研状を呈する。遺物は、須恵器、土師器、磁器、陶器、銅製品（キセル）、礫（緑泥片岩）が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から 18 世紀後半であると思われる。

(4) 歓状遺構

SK 05 (第 34 図)

S10-20、S11-16 ~ 18 グリッドにまたがって位置する。調査区内で 1 回の分断が確認できる。SK01・11 を切る。平面形状は溝状を呈する。SK05 ~ SK10 一連で歓として構成されると考えられ、SK02 を切るため比較的新しいと思われる。確認できる規模は分断を含めて計測すると長軸 4.54 m、短軸 0.25 m、深さ 0.29 m を測る。遺物は、須恵器が出土している。

S K 06 (第34図)

S10-20、S11-16～18グリッドにまたがって位置する。SK11を切る。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は長軸4.65m、短軸0.45m、深さ0.31mを測る。遺物は、土師器が出土している。

S K 07 (第34図)

S10-20、S11-12・16～17グリッドにまたがって位置する。SK11を切る。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は長軸4.60m、短軸0.38m、深さ0.22mを測る。遺物は、土師器が出土している。

S K 08 (第34図)

S10-15・20、S11-11～12・16～17グリッドにまたがって位置する。SK11を切る。平面形状は溝状を呈し、遺構東側が調査区外へと延びる。確認できる規模は長軸4.50m、短軸0.48m、深さ0.26mを測る。遺物は、須恵器、土師器、磁器が出土している。

S K 09 (第34図)

S10-15、S11-11グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈し、遺構の大部分が調査区外へと延びる。確認できる規模は長軸1.80m、短軸0.34m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

S K 10 (第34図)

S10-20・25、S11-16～18グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は長軸4.50m、短軸0.35m、深さ0.25mを測る。遺物は、土師器が出土している。

S K 16 (第35図)

R11-22～23グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。SK16～SK33一連で歛として構成されると考えられ、SK02を切るため比較的新しいと思われる。遺構の規模は長軸2.20m、短軸0.25m、深さ0.17mを測る。遺物は出土していない。

S K 17 (第35図)

R11-22～23グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸2.40m、短軸0.38m、深さ0.16mを測る。遺物は出土していない。

S K 18 (第35図)

R11-16～18・21～22グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸3.65m、短軸0.32m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

S K 19 (第35図)

R11-16～18グリッドにまたがって位置する。調査区内で2回の分断が確認できる。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は分断を含めて計測すると長軸3.95m、短軸0.50m、深さ0.20mを測る。遺物は出土していない。

S K 20 (第35図)

R11-16～17グリッドにまたがって位置する。調査区内で1回の分断が確認できる。遺構西側に搅乱を受ける。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は分断を含めて計測すると長軸2.97m、短軸0.53m、深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。

S K 21 (第35図)

R11-12・17グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸0.72m、短軸0.25m、深さ0.08mを測る。遺物は出土していない。

S K 22 (第35図)

R11-12～13グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸1.40m、短軸0.32m、深さ0.12mを測る。遺物は出土していない。

S K 23 (第35図)

R11-12～13グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈し、遺構北側が調査区外へと延びる。確認できる規模は長軸1.30m、短軸0.38m、深さ0.24mを測る。遺物は出土していない。

S K 24 (第35図)

S10-10グリッドに位置する。SD01に切られる。平面形状は溝状を呈し、遺構南側が調査区外へと延びる。確認できる規模は長軸1.10m、短軸0.10m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

S K 25 (第35図)

S10-5・10、S11-1・6グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸1.47m、短軸0.40m、深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。

S K 26 (第35図)

S10-5、S11-1グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸2.78m、短軸0.35m、深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。

S K 27 (第35図)

S10-5、S11-1グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸1.94m、短軸0.41m、深さ0.13mを測る。遺物は出土していない。

S K 28 (第35図)

S10-5、S11-1グリッドにまたがって位置する。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸2.12m、短軸0.52m、深さ0.07mを測る。遺物は出土していない。

S K 29 (第35図)

R10-25、R11-21、S10-5、S11-1グリッドにまたがって位置する。遺構北側に搅乱を受ける。平面形状は溝状を呈し、遺構東側が調査区外に延びる。確認できる規模は長軸2.45m、短軸0.40m、深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。

S K 30 (第35図)

R10-25、R11-21グリッドにまたがって位置する。遺構南側に搅乱を受ける。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は長軸2.72m、短軸0.52m、深さ0.13mを測る。遺物は出土していない。

S K 31 (第35図)

R10-25、R11-21グリッドにまたがって位置する。SK32を切る。平面形状は溝状を呈する。遺構の規

模は長軸 1.45 m、短軸 0.47 m、深さ 0.16 m を測る。遺物は出土していない。

S K 32 (第 35 図)

R10-20・25、R11-16・21 グリッドにまたがって位置する。SK31 に切られる。平面形状は溝状を呈する。遺構の規模は長軸 2.53 m、短軸 0.37 m、深さ 0.18 m を測る。遺物は出土していない。

S K 33 (第 35 図)

R10-20 グリッドに位置する。遺構北東側に搅乱を受ける。平面形状は溝状を呈する。確認できる規模は長軸 0.75 m、短軸 0.37 m、深さ 0.19 m を測る。遺物は出土していない。

(5) ピット

P 01 (第 36 図)

S10-25、S11-21 グリッドにまたがって位置する。平面形状は円形を呈する。遺構の規模は長軸 0.28 m、短軸 0.25 m、深さ 0.12 m を測る。遺物は出土していない。

P 02 (第 36 図)

S11-21 グリッドに位置する。平面形状は橢円形を呈する。遺構の規模は長軸 0.30 m、短軸 0.18 m、深さ 0.12 m を測る。遺物は出土していない。

P 03 (第 36 図)

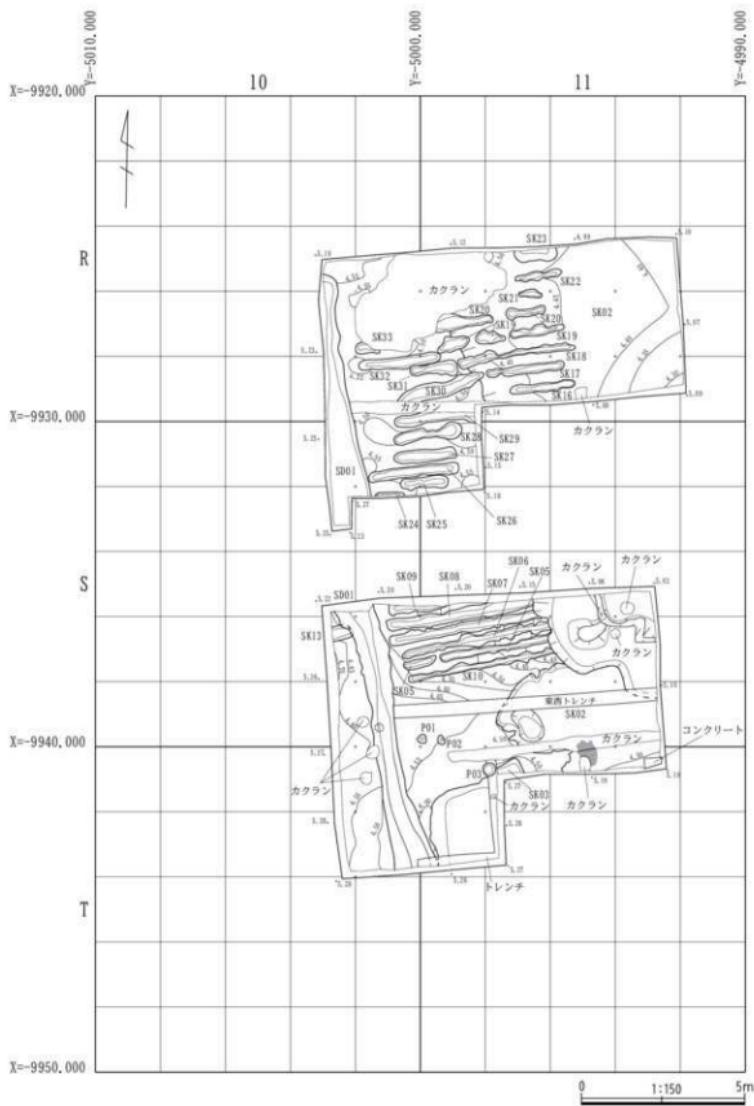
T11-1～2 グリッドにまたがって位置する。SK01・03 を切る。平面形状は円形を呈する。遺構の規模は長軸 0.42 m、短軸 0.38 m、深さ 0.74 m を測る。遺物は、須恵器、土師器、陶器が出土している。埋土中からプラスチック片が検出されたため、全体ないし一部分に搅乱を受けている可能性がある。

P 04 (第 36 図)

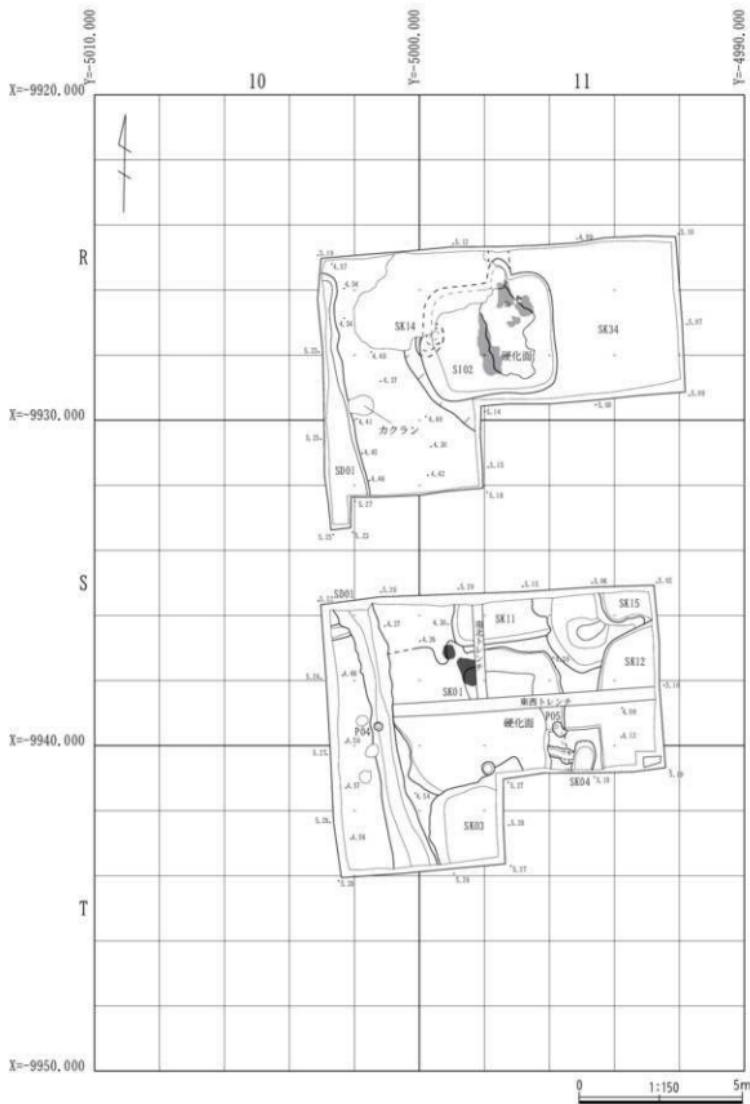
S10-25 グリッドに位置する。SD01 に切られる。平面形状は円形を呈する。遺構の規模は長軸 0.27 m、短軸 0.25 m、深さ 0.11 m を測る。遺物は出土していない。

P 05 (第 36 図)

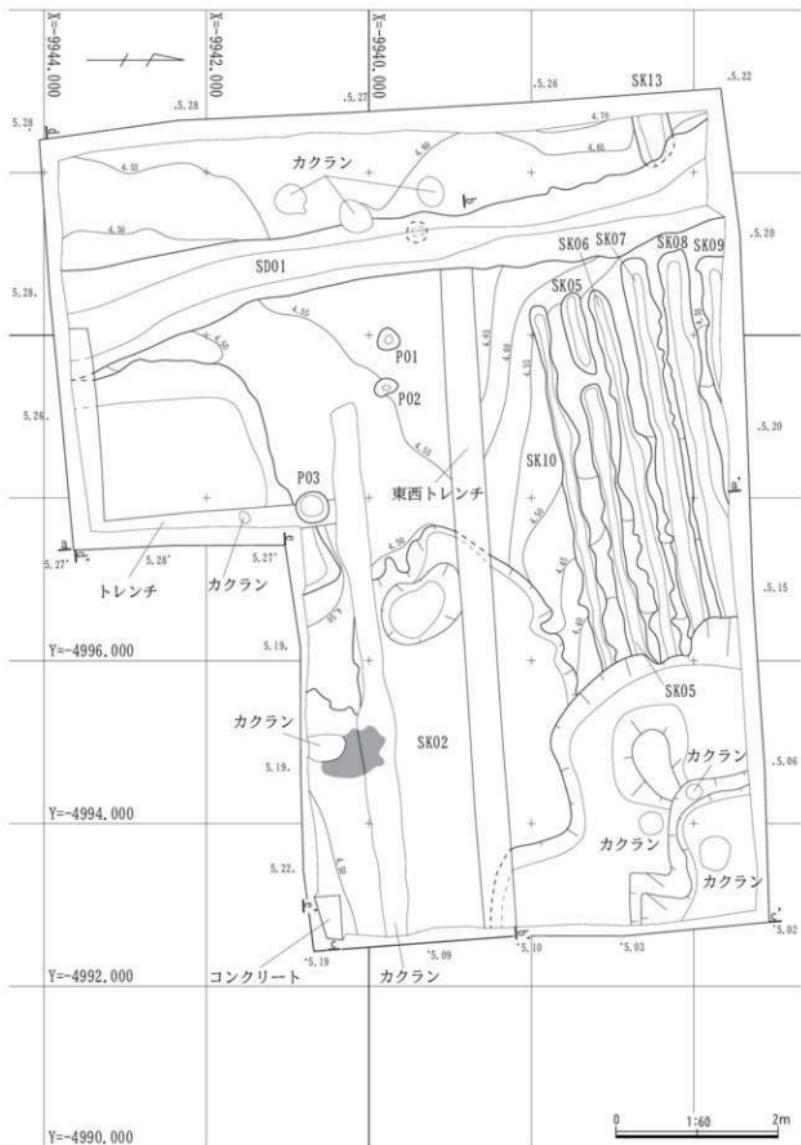
S11-23 グリッドに位置する。SK01 を切る。平面形状は不整形を呈する。遺構の規模は長軸 0.48 m、短軸 0.33 m、深さ 0.43 m を測る。遺物は出土していない。



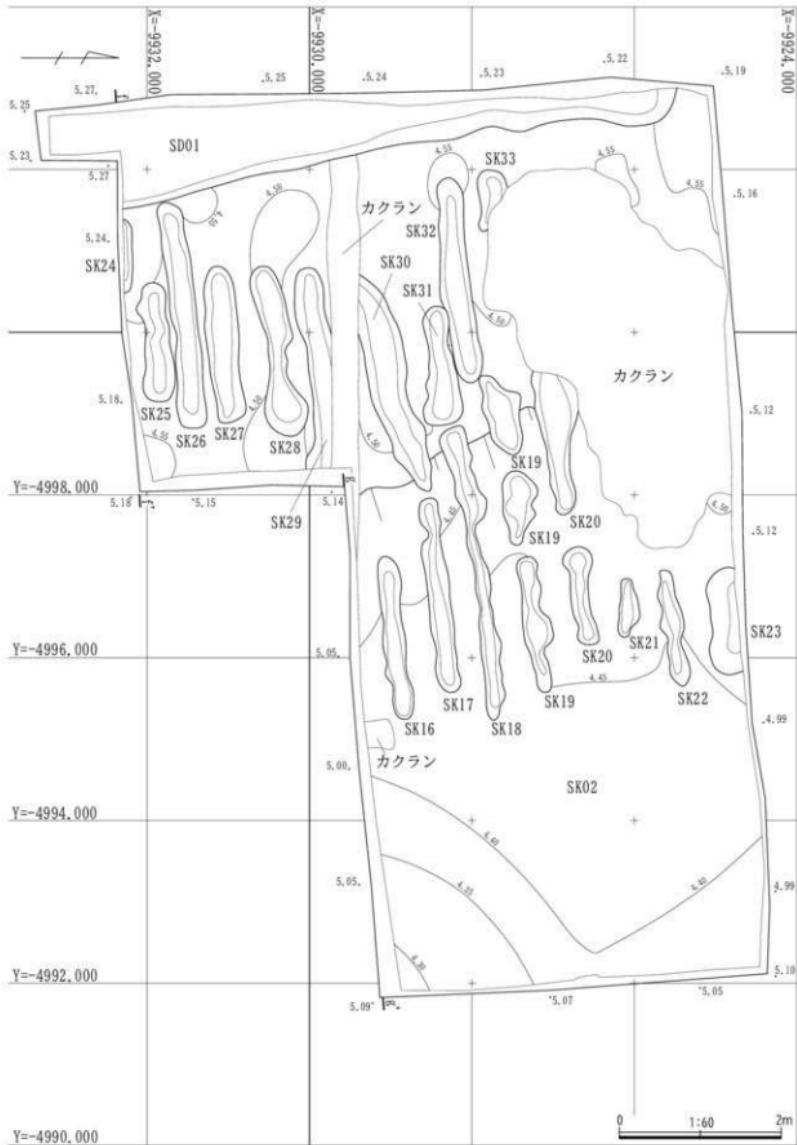
第7図 調査区全体図（1面）



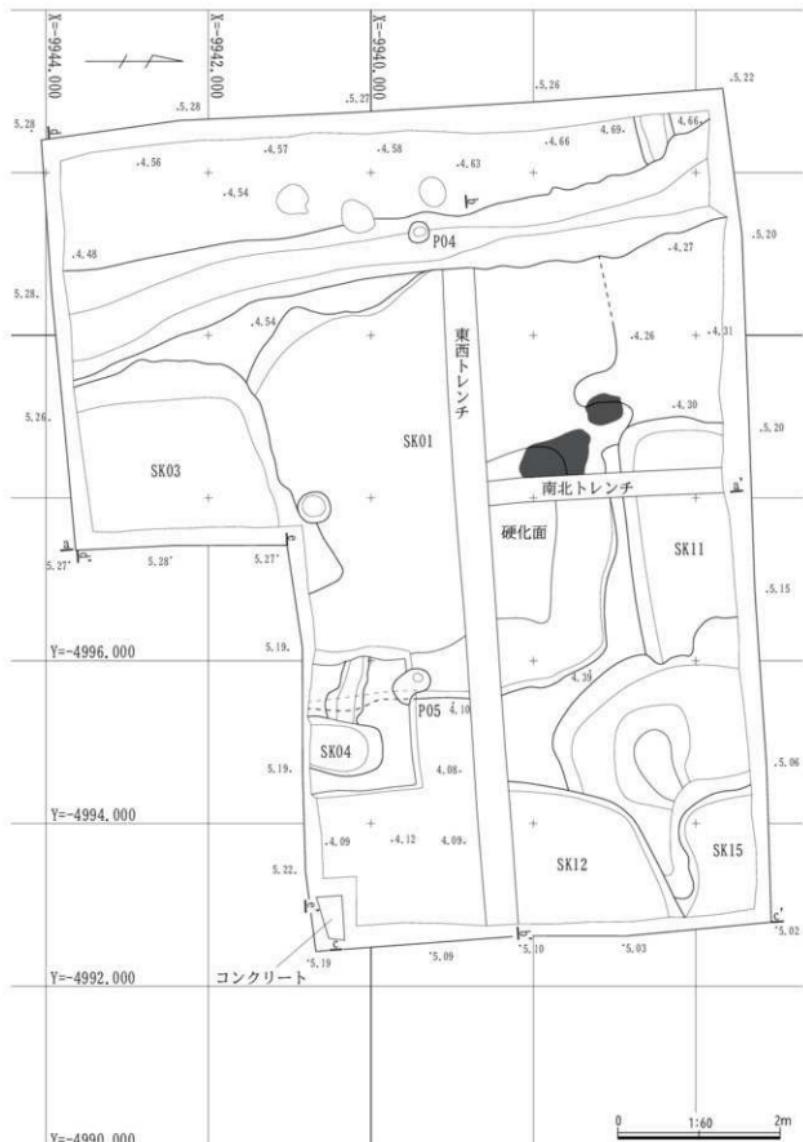
第8図 調査区全体図（2面）



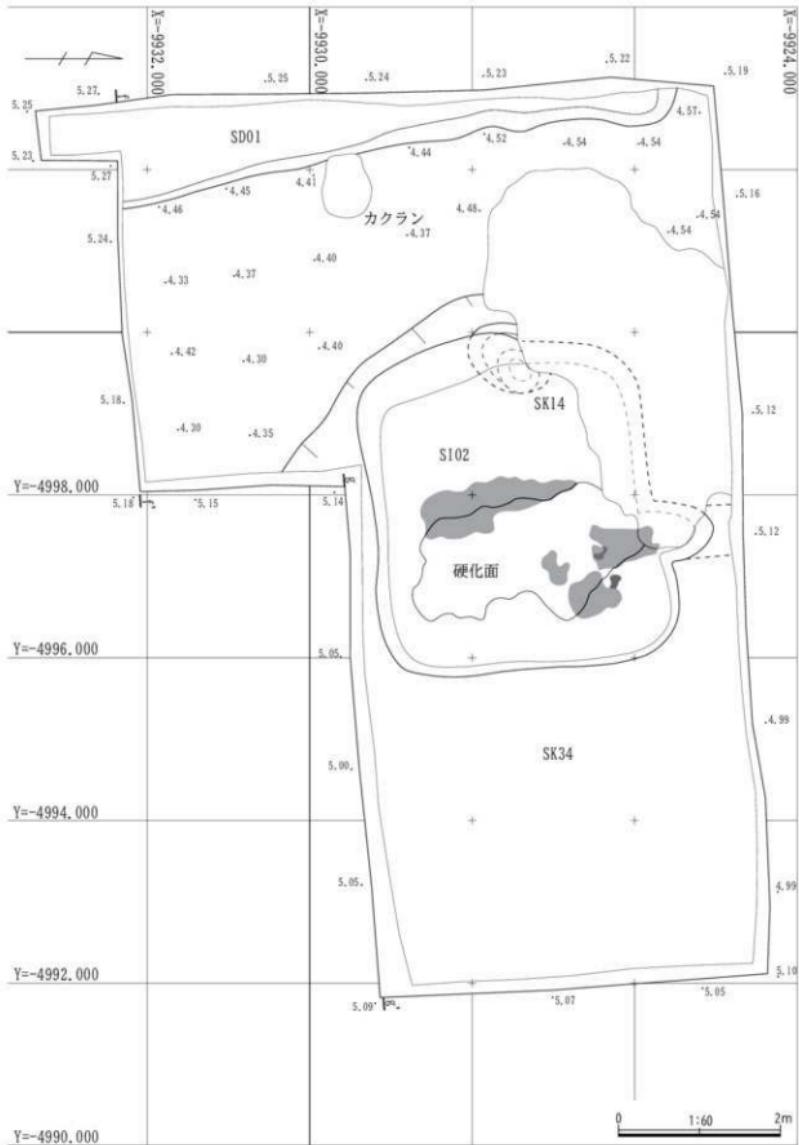
第9図 調査区全体図（1区1面）



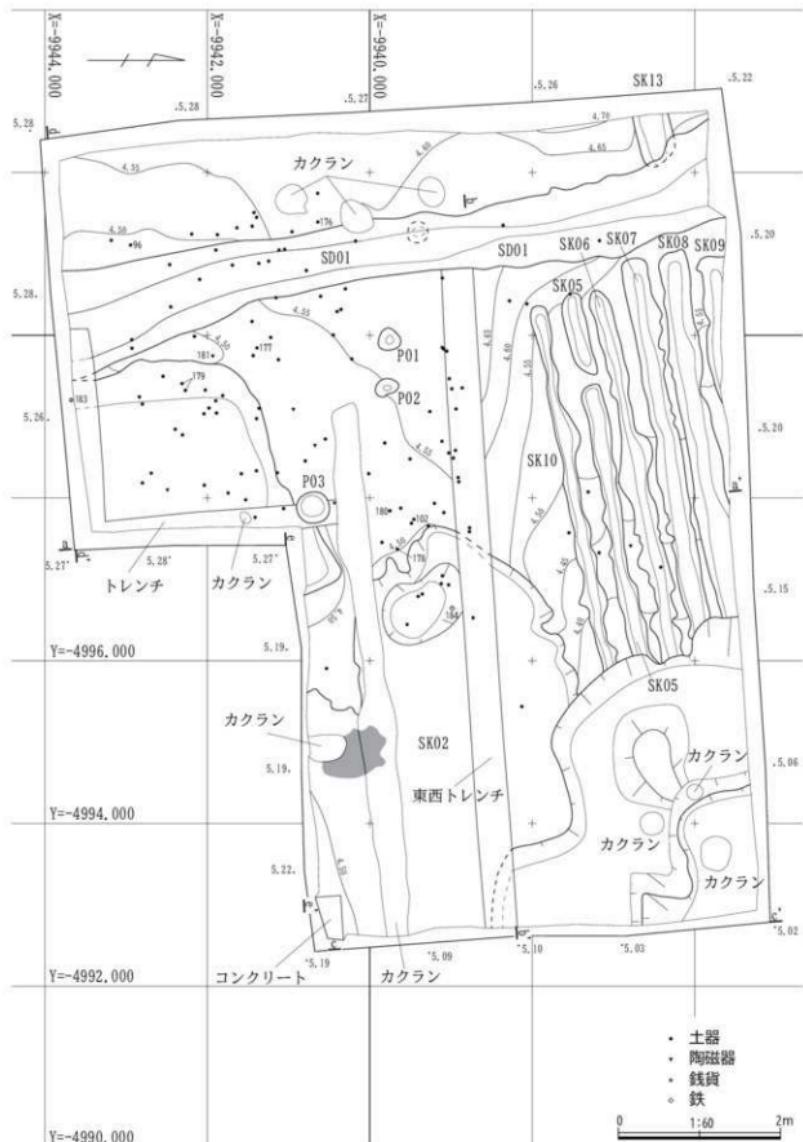
第10図 調査区全体図（2区1面）



第11図 調査区全体図（1区2面）

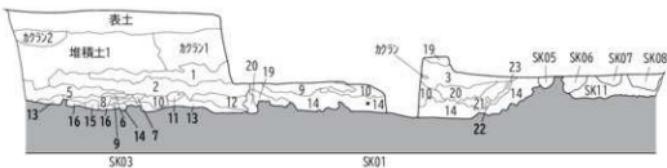


第12図 調査区全体図（2区2面）

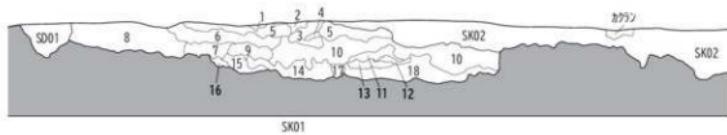


第13図 包含層遺物出土位置図

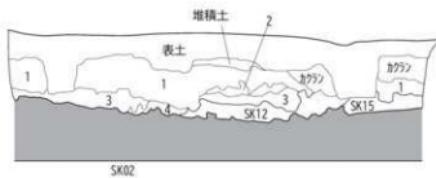
6.0m



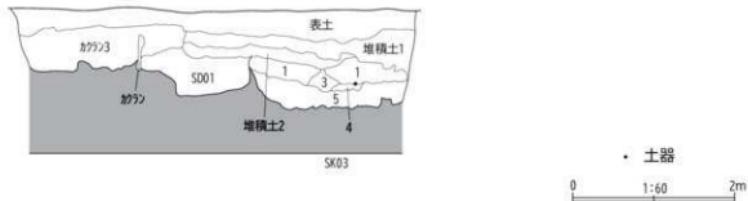
6.0m



6.0m

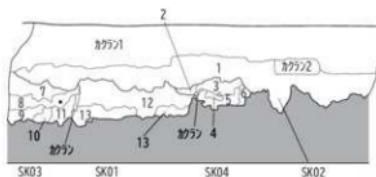


6.0m

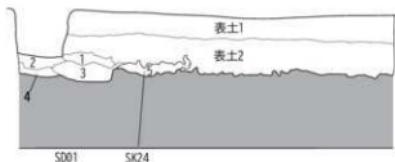


第14図 トレンチ・壁面土層断面（1）

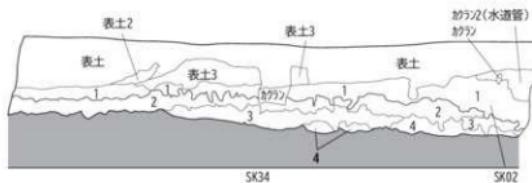
6. 0m



6. 0m



6. 0m



・ 土器

0 1:60 2m

a-a' - b-b'

SD01	7.5YR2/2 黒褐色砂	軽石含む しまり強い 粘性弱い
SK02	7.5YR3/2 黒褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い 粘性弱い
SK01		
1	7.5YR3/2 黒褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 粘性弱い
2	10YR3/2暗褐色砂	黒褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 粘性弱い
3	7.5YR2/2 黒褐色砂	黒褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 粘性弱い

第15図 トレンチ・壁面土層断面（2）

4	7.5YR2/2 黒褐色砂	黒褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 黏性弱い
5	7.5YR2/2 黒褐色砂	7.5YR7/6 棕色シルトブロック微量含む 炭化物微量含む 軽石含む
6	7.5YR3/2 黒褐色砂	しまり強い 黏性弱い
7	7.5YR2/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石含む しまり強い 黏性弱い
8	7.5YR3/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石含む しまりやや強い 黏性弱い
9	10YR2/2 黒褐色砂	炭化物をやや多く含む 軽石含む しまり強い 黏性弱い
10	7.5YR2/2 黒褐色砂	7.5YR3/2 黒褐色砂 20%含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い 黏性弱い
11	7.5YR3/1 黒褐色砂	軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
12	7.5YR3/2 黑褐色砂	褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
13	10YR5/2 深灰色シルト	黒褐色砂微量含む 軽石微量含む しまりやや強い 黏性弱い
14	7.5YR2/2 黑褐色砂	10YR5/2 深灰色シルト微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
15	7.5YR2/2 黑褐色砂	7.5YR3/2 黑褐色砂 30%含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
16	7.5YR2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
17	7.5YR3/2 黑褐色砂	7.5YR3/2 黑褐色砂 30%含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
18	7.5YR3/2 黑褐色砂	褐色シルトブロック微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
19	7.5YR2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
20	7.5YR2/2 黑褐色砂	褐色焼土粒微量含む 炭化物を多く含む 炭化物を多く含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
21	7.5YR2/2 黑褐色砂	褐色焼土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
22	7.5YR3/2 黑褐色砂	しまり弱い 黏性弱い
23	7.5YR3/2 黑褐色砂	しまり弱い 黏性弱い
SK05~08	7.5YR3/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石多く含む しまり強い 黏性弱い
SK11	7.5YR3/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石多く含む SK05~08 より暗い しまり強い 黏性弱い

a-a'・d-d'

表土	7.5YR3/2 黑褐色砂	石・ゴミ・コンクリート等含む
カクラン1	7.5YR2/2 黑褐色砂	石・ゴミ・コンクリート等含む
カクラン2	7.5YR3/2 黑褐色砂	炭多量含む 石含む
カクラン3	7.5YR2/2 黑褐色砂	
堆積土1	7.5YR2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
堆積土2	7.5YR3/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む 堆積土1よりやや明るい しまり弱い 黏性弱い

SK03

1	7.5YR2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む 上層の堆積層よりやや赤味帯びる しまり弱い 黏性弱い
2	7.5YR2/1 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
3	7.5YR2/2 黑褐色砂	軽石微量含む 1層に似るがやや暗い しまりやや強い 黏性弱い
4	7.5YR2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 1、3層よりやや赤味帯びる しまり弱い 黏性弱い
5	7.5YR2/2 黑褐色砂	褐色灰砂 30%含む 炭化物微量含む しまり強い 黏性弱い
6	7.5YR2/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
7	7.5YR3/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
8	10YR3/2 黑褐色シルト	に、5YR2/2 黑褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い 赤褐色焼土ブロック塊含む しまり弱い 黏性弱い
9	7.5YR2/2 黑褐色砂	赤褐色焼土粒微量含む しまり強い 黏性弱い
10	7.5YR2/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト微量含む しまり弱い 黏性弱い
11	7.5YR2/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト微量含む 赤褐色焼土粒微量含む 炭化物微量含む しまり弱い 黏性弱い
12	7.5YR2/2 黑褐色砂	褐色灰砂 30%含む 炭化物微量含む しまり弱い 黏性弱い
13	7.5YR3/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト 30%含む 炭化物を多く含む しまりやや強い 黏性やや強い
14	10YR4/4 黄褐色シルト	10YR4/4 黄褐色シルト 10%含む 炭化物微量含む しまりやや強い 黏性やや強い
15	7.5YR3/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色シルト 10%含む 炭化物微量含む しまりやや強い 黏性弱い
16	7.5YR3/2 黑褐色砂	黒褐色シルト 10%含む しまり強い 黏性弱い

SD01

7.5YR3/2 黑褐色砂	オーリーブ褐色砂微量含む 炭化物微量含む しまりやや強い 黏性弱い
---------------	-----------------------------------

c-c'

表土	カクランと分離できなかったため、一括で分層（カクラン含む）
堆積土	7.5YR3/2 黑褐色砂 炭化物微量含む 軽石微量含む 1cm角の礫微量含む しまり強い 黏性弱い
カクラン	7.5YR3/2 黑褐色砂 炭化物微量含む ピニール微量含む しまり弱い 黏性弱い

SK02

1	7.5YR3/2 黑褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 黏性弱い
2	7.5YR3/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む 混入物のない均一な土層 しまり強い 黏性弱い
3	7.5YR3/2 黑褐色砂	7.5YR2/2 黑褐色砂 20%含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまりやや強い 黏性弱い
4	7.5YR2/2 黑褐色砂	7.5YR3/2 黑褐色砂 20%含む しまり弱い 黏性弱い
SK12	7.5YR2/2 黑褐色砂	暗褐色砂 20%含む 炭化物微量含む しまりやや強い 黏性弱い
SK15	7.5YR2/2 黑褐色砂	に、5YR2/2 黑褐色砂微量含む 炭化物微量含む しまり弱い 黏性弱い

第16図 トレンチ・壁面土層断面（3）

e-e'

カクラン1	7.5Y R2/2 黒褐色砂	石・ゴミ・コンクリート等含む
カクラン2	7.5Y R3/2 黒褐色砂	30cm程度の纏合む しまりやや強い 粘性弱い
S K02		
1	7.5Y R3/2 黒褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い 粘性弱い
S K04		
2	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む しまり弱い 粘性弱い
3	7.5Y R3/2 黑褐色砂	に、黄褐色シルト 10%含む 炭化物やや多く含む 軽石含む しまり強い 粘性弱い
4	炭塊	
5	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物多く含む 炭塊含む しまり弱い 粘性弱い
6	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物やや多く含む しまりやや強い 粘性弱い
S K03		
7	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い
8	7.5Y R2/1 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い
9	7.5Y R2/2 黑褐色砂	褐灰色砂 30%含む 炭化物微量含む しまり弱い 粘性弱い
10	10Y R3/1 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い
11	7.5Y R2/2 黑褐色砂	明黄褐色シルト粒微量含む 炭化物微量含む しまり弱い 粘性弱い
S K01		
12	7.5Y R2/2 黑褐色砂	7.5Y R3/2 黑褐色砂 10%含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い
13	7.5Y R2/2 黑褐色砂	明黄褐色シルト粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い

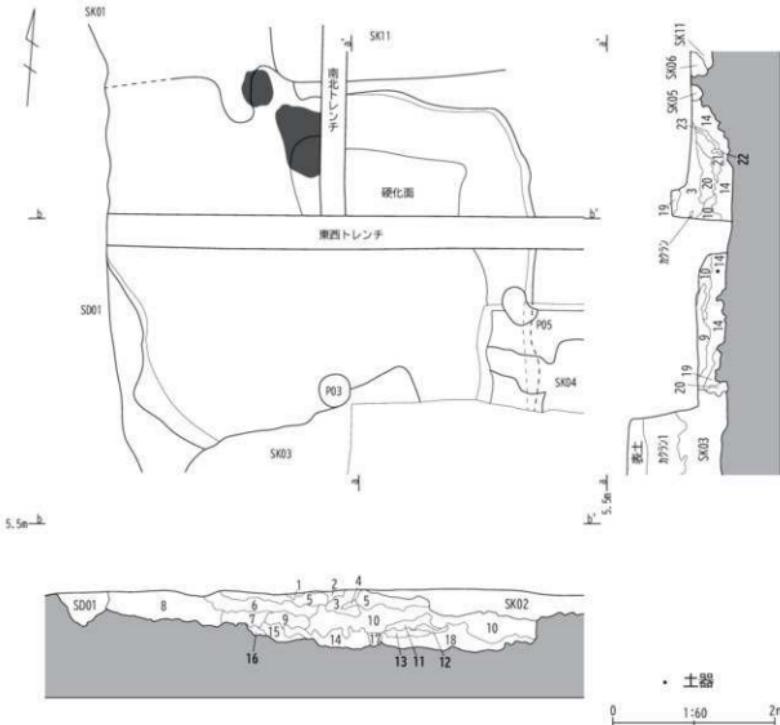
f-f'

表土1	7.5Y R2/2 黑褐色砂	1cm以下の纏合む 下層との境に明黄褐色の土粒(鹿沼土か)が散かれる しまり強い 粘性弱い
表土2	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物やや多く含む 2cm以下の軽石含む コンクリート含む しまり強い 粘性弱い
S D01		
1	7.5Y R2/2 黑褐色砂	軽石微量含む 混入物のない均一な土層 しまり弱い 粘性弱い
2	10Y R2/2 黑褐色砂	7.5Y R2/2 黑褐色砂微量含む 炭化物微量含む しまり弱い 粘性弱い
3	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む しまり弱い 粘性弱い
4	7.5Y R2/2 黑褐色砂	7.5Y R2/3 極暗赤褐色砂 40%含む しまり弱い 粘性弱い
S K24		
5	7.5Y R2/2 黑褐色砂	7.5Y R3/2 黑褐色シルト 30%含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い

g-g'

表土	7.5Y R3/2 黑褐色砂	しまり弱い 粘性弱い
表土2	7.5Y R3/2 黑褐色砂	しまり弱い 粘性弱い
表土3	7.5Y R3/2 黑褐色砂	しまり弱い 粘性弱い
カクラン	7.5Y R2/2 黑褐色砂	水道管含んでいたラインの延長上
カクラン2	7.5Y R3/2 黑褐色砂	水道管入っており、水道管理設の為の埋め戻し土
S K02		
1	7.5Y R3/2 黑褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い 粘性弱い
S K34		
2	7.5Y R2/2 黑褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む 遺物含む しまり弱い 粘性弱い に、黄褐色シルト微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む 遺物含む
3	7.5Y R2/2 黑褐色砂	しまり弱い 粘性弱い
4	10Y R3/2 黑褐色砂	7.5Y R2/2 黑褐色砂 30%含む 軽石微量含む しまり弱い 粘性弱い

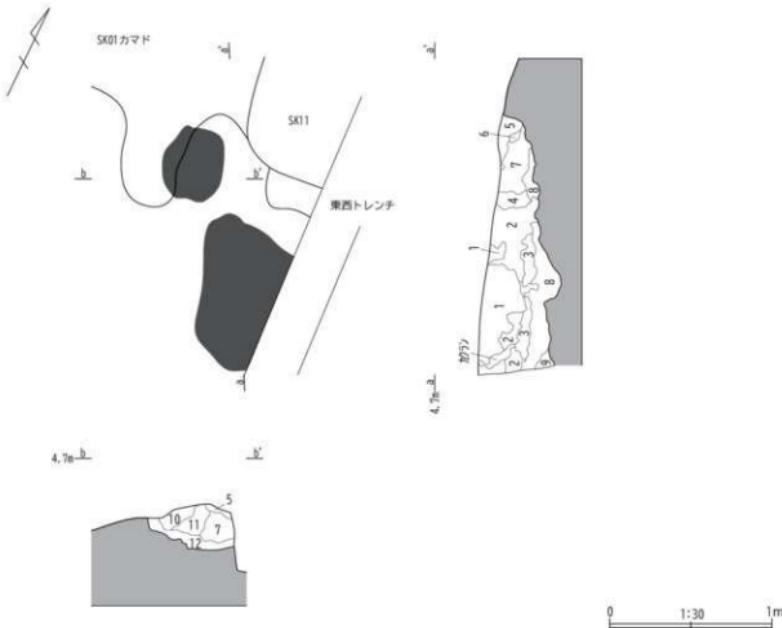
第17図 トレーナー・壁面土層断面（4）



SK01

1	7.5Y R3/2 黒褐色砂	灰黄褐色粘土微量含む 炭化物微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い、粘性弱い
2	10Y R3/3 暗褐色砂	栗褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い、粘性弱い
3	7.5Y R2/2 黒褐色砂	栗褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い、粘性弱い
4	7.5Y R2/2 黒褐色砂	栗褐色砂微量含む 軽石含む 近世の掘り込みと考えられる しまり強い、粘性弱い
5	7.5Y R2/2 黒褐色砂	7.5Y R1/6 シルトブロック微量含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い、粘性弱い
6	7.5Y R3/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石含む しまり強い、粘性弱い
7	7.5Y R2/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石含む しまり強い、粘性弱い
8	7.5Y R3/2 黒褐色砂	軽石含む しまりやや弱い 粘性弱い
9	10Y R2/2 黒褐色砂	炭化物をやや多く含む 軽石含む しまり強い、粘性弱い
10	7.5Y R2/2 黒褐色砂	7.5Y R3/3 黒褐色砂 20%含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い、粘性弱い
11	7.5Y R3/1 黒褐色砂	軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
12	7.5Y R3/2 黒褐色砂	褐色シルト粒微量含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
13	10Y R5/2 灰黄褐色シルト	黒褐色砂微量含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
14	7.5Y R2/2 黒褐色砂	10Y R5/2 灰黄褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
15	7.5Y R2/2 黒褐色砂	軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
16	7.5Y R2/2 黒褐色砂	7.5Y R2/2 黒褐色砂 30%含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
17	7.5Y R3/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
18	7.5Y R3/2 黒褐色砂	褐色シルトブロック微量含む 軽石微量含む しまり弱い、粘性弱い
19	7.5Y R2/2 黒褐色砂	炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い、粘性弱い
20	7.5Y R2/2 黒褐色砂	褐色土粒微量含む 炭化物を多く含む 岩塊含む 軽石微量含む しまり強い、粘性弱い
21	7.5Y R2/2 黒褐色砂	褐色焼土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い、粘性弱い
22	7.5Y R3/2 黒褐色砂	しまり弱い、粘性弱い
23	7.5Y R3/2 黒褐色砂	しまり弱い、粘性弱い

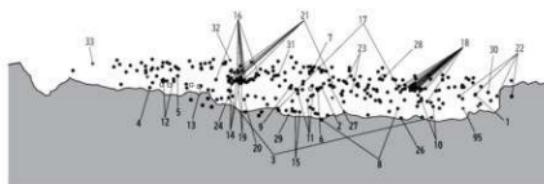
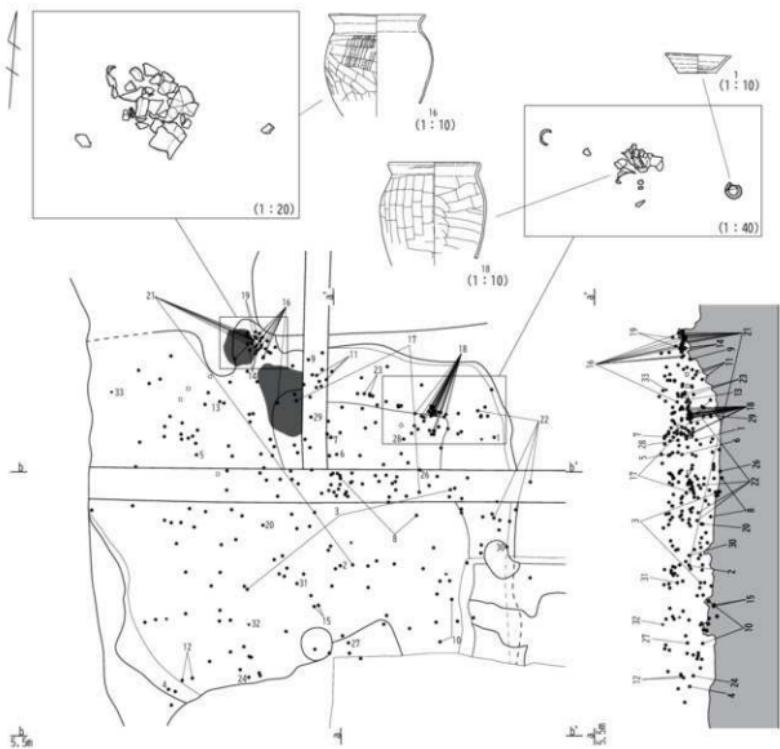
第18図 SK01 遺構実測図(1)



SK01 カマド

- | | | |
|----|------------------|---|
| 1 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 2 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | 褐色焼土粒微量含む 炭化物を多く含む 褐塊含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 3 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | にぶい黄褐色シルト塊微量含む 炭化物微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 4 | 5Y R2/3 暗褐色砂シルト | 燒土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 5 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | にぶい黄褐色砂微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 6 | 10Y R5/4/にぶい黄褐色砂 | しまり弱い 黏性弱い |
| 7 | 5Y R2/3 暗褐色砂シルト | 赤褐色焼土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 8 | 7.5Y R2/2 黑褐色砂 | 褐色燒土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 9 | 7.5Y R2/2 黑褐色砂 | 10Y R5/2 灰黃褐色シルト微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 10 | 5Y R2/3 暗褐色砂 | 赤褐色燒土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 11 | 5Y R2/1 極暗褐色砂 | 赤褐色燒土粒微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い |
| 12 | 5Y R2/3 極暗褐色砂 | しまり強い 黏性弱い |

第19図 SK01 遺構実測図（2）

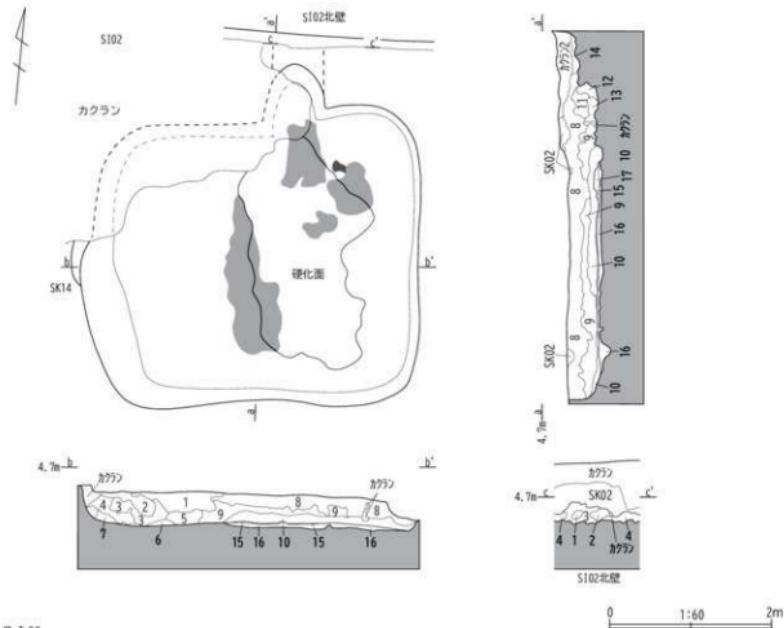


SK01遺物出土状況

- 土器
- 陶磁器
- 鉄
- 炭化物

0 1:60 2m

第20図 SK01 遺構実測図(3)

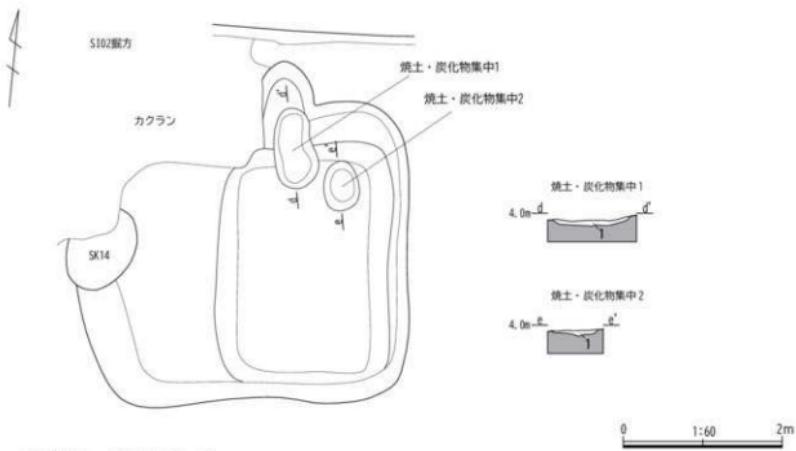
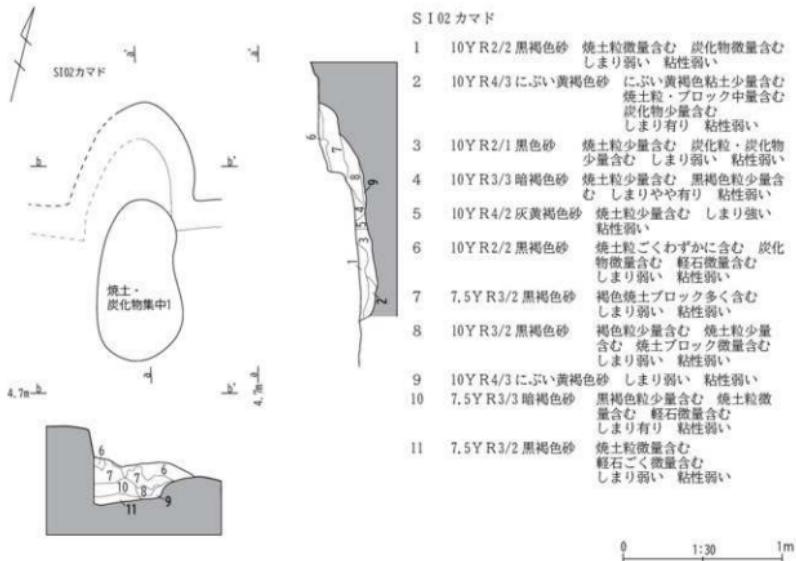


カクラン	7.5YR 2/2 黒褐色砂	コンクリート、タン等ゴミ多量に含む	しまりやや弱い	粘性弱い
カクラン	7.5YR 2/2 黑褐色砂	コンクリート、タン等ゴミ多量に含む	しまりやや弱い	粘性弱い
1	7.5YR 2/2 黑褐色砂	褐灰色砂 10%含む 炭化物微量含む	軽石微量含む	しまりやや強い
2	10Y R4/3 にぶい黄褐色砂	黒褐色シルト 30%含む	炭土微量含む	炭化物微量含む
3	7.5Y R3/2 黑褐色砂	にぶい黄褐色シルト 10%含む	炭化物微量含む	しまり弱い
4	10Y R2/1 黑褐色砂	炭化物微量含む	燒土微量含む	しまり弱い
5	7.5Y R2/2 黑褐色砂	灰黄褐色砂微量含む	燒土微量含む	しまり弱い
6	10Y R3/1 黑褐色砂	炭化物微量含む	炭化物やや多く含む	しまり弱い
7	7.5Y R2/2 黑褐色砂	混入物の少ない均一な土	しまり弱い	粘性弱い
8	10Y R2/2 黑褐色砂	視触砂 30%含む	しまり弱い	粘性弱い
9	7.5Y R1.7/1 黑色砂	燒土粒ごくわずかに含む	炭化物微量含む	軽石微量含む
10	7.5Y R2/2 黑褐色砂	燒土粒ごくわずかに含む	しまり弱い	粘性弱い
11	7.5Y R2/2 黑褐色砂	燒土粒ごくわずかに含む	床土	しまり強め
12	7.5Y R3/2 黑褐色砂	褐色焼土ブロック多く含む	住居へり	しまり弱い
13	10Y R3/3 暗褐色砂	燒土粒わずかに含む	しまり弱い	粘性弱い
14	10Y R2/3 黑褐色砂	燒土粒わずかに含む	炭化物ごくわずかに含む	自然堆積か
15	炭化物層	燒土微量含む		
16	7.5Y R2/2 黑褐色砂	褐色焼土ブロック多く含む	炭化物やや多く含む	しまりやや強い
17	7.5Y R2/2 黑褐色砂	にぶい黄褐色粘土微量含む	炭化物やや多く含む	しまり弱い

S I02 北壁

- | | | | | |
|---|------------------|----------------|-----------|---------|
| 1 | 10Y R4/3 にぶい黄褐色砂 | 灰黄褐色粒・ブロック中量含む | 燒土粒ごく微量含む | 軽石微量含む |
| 2 | 10Y R3/3 暗褐色砂 | 燒土粒微量含む | 炭化物微量含む | しまり弱い |
| 3 | 10Y R3/3 暗褐色砂 | 黒褐色砂ごく微量含む | 燒土粒微量含む | 炭化物少量含む |
| 4 | 10Y R2/3 黑褐色砂 | 2層より弱い | 燒土粒わずかに含む | 自然堆積か |

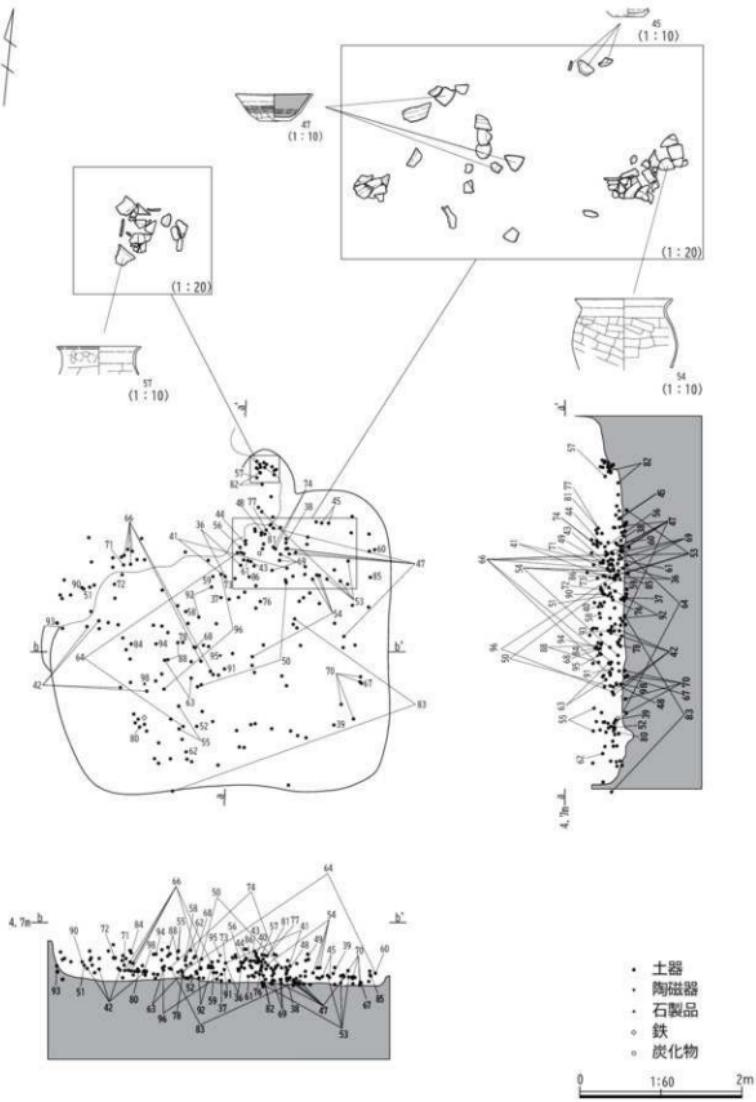
第21図 S I02 遺構実測図(1)



S I 02 焼土・炭化物集中 1・2

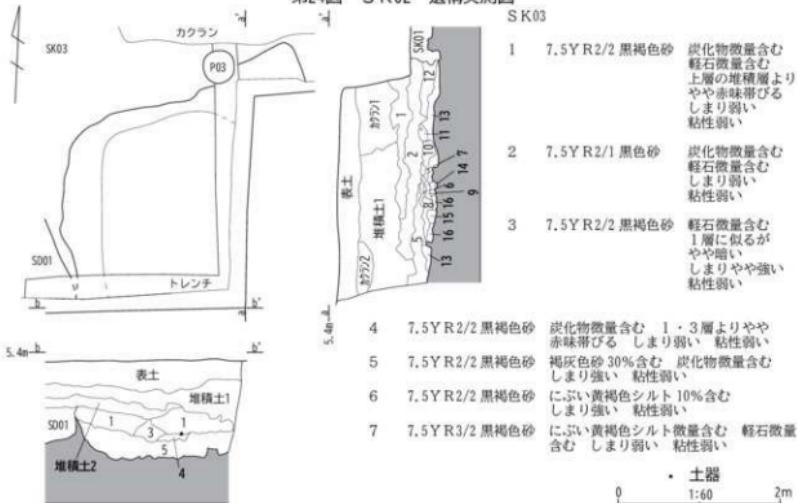
1 10YR2/2 黑褐色砂 灰黄褐色砂・ブロック少量含む 烧土粒・ブロック少量含む 炭化物少量含む
しまり弱い 黏性有り

第22図 S I 02 遺構実測図（2）

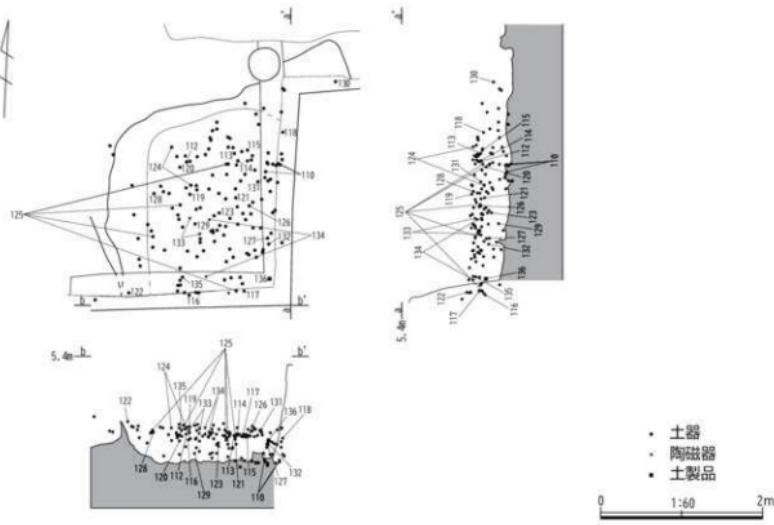




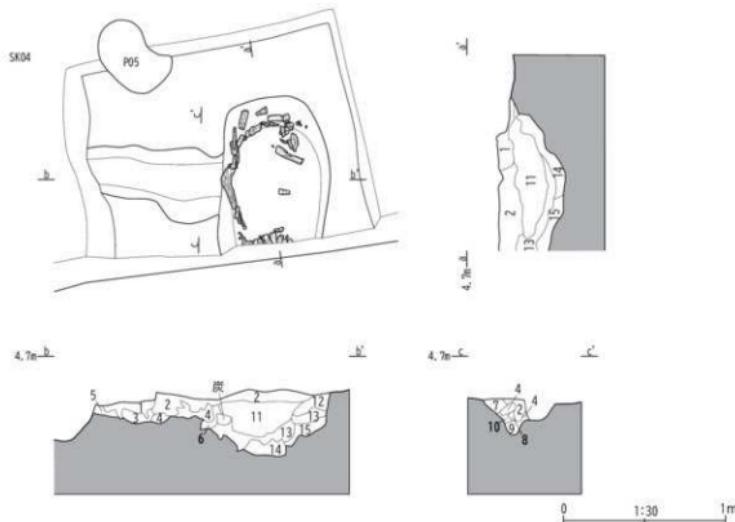
第24図 SK02 遺構実測図



第25図 SK03 遺構実測図(1)



SK03遺物出土状況
第26図 SK03 遺構実測図（2）

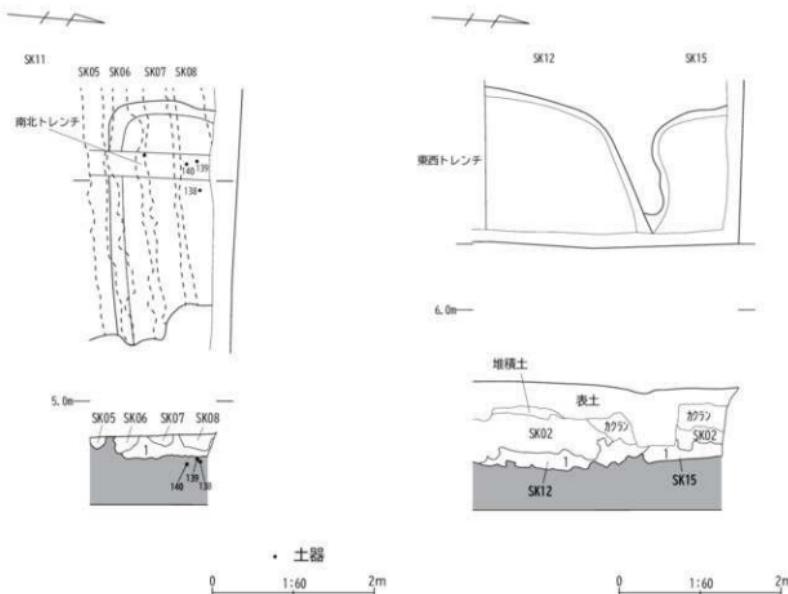


第27図 SK04 遺構実測図（1）

S K04

- 1 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 暗褐色砂 20%含む 炭化物微量含む 軽石含む しまり強い 黏性弱い
- 2 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 10%含む 炭化物や多く含む 軽石含む 3層よりやや明るい
- 3 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色砂微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い
- 4 10YR5/3にぶい黄褐色シルト 暗褐色砂 10%含む 炭化物 6層間に集中して多く含む しまりやや弱い 黏性弱い
- 5 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 微量含む 軽石微量含む 2層に似る しまり強い 黏性弱い
- 6 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 微量含む 炭化物多く含む しまり弱い 黏性弱い
- 7 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり弱い 黏性弱い
- 8 7.5YR3/2黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 微量含む しまり弱い 黏性弱い
- 9 7.5YR3/2黒褐色砂 炭化物塊含む しまり弱い 黏性弱い
- 10 7.5YR2/3黒褐色砂 にぶい黄褐色シルト 微量含む しまり強い 黏性弱い
- 11 7.5YR2/2黒褐色砂 骨片多く含む 炭化物多く含む しまり弱い 黏性弱い
- 12 7.5YR2/2黒褐色砂 炭化物微量含む しまり弱い 黏性弱い
- 13 7.5YR2/2黒褐色砂 炭化物多く含む 炭化物含む しまり弱い 黏性弱い
- 14 7.5YR2/2黒褐色砂 炭化物多く含むが、11・13層より少ない しまり弱い 黏性弱い
- 15 7.5YR2/2黒褐色砂 炭化物微量含む しまり弱い 黏性弱い

第28図 S K04 遺構実測図 (2)

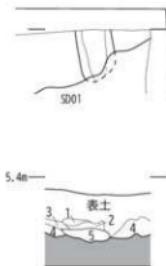


SK11
1 7.5YR3/2 黒褐色砂 炭化物微量含む
軽石多く含む
SK05～08 より暗い
しまり強い 黏性弱い

SK12
1 7.5YR2/2 黒褐色砂 暗褐色砂 20%含む
炭化物微量含む
しまりやや強
粘性弱い
SK15
1 7.5YR2/2 黒褐色砂 にぶい黄褐色砂微量含む
炭化物微量含む
しまり弱い 黏性弱い

第29図 S K11・SK12・SK15 遺構実測図

SK13



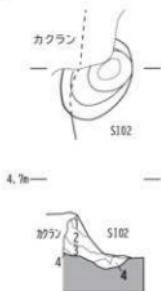
I区西壁・SK13

- | | | |
|---|----------------|--------------------------------|
| 1 | 7.5Y R3/2 黒褐色砂 | にぶい黄褐色砂微量含む しまり強い 粘性弱い |
| 2 | 7.5Y R3/2 黒褐色砂 | にぶい黄褐色砂や多く含む しまり強い 粘性弱い |
| 3 | 7.5Y R3/2 黒褐色砂 | 1層に似るが、にぶい黄褐色砂を含まない しまり強い 粘性弱い |
| 4 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | しまり強い 粘性弱い |
| 5 | 10Y R2/2 黒褐色砂 | 炭化物多く含む SK13 埋土 しまり強い 粘性弱い |

0 1:60 2m

第30図 SK13 遺構実測図

SK14

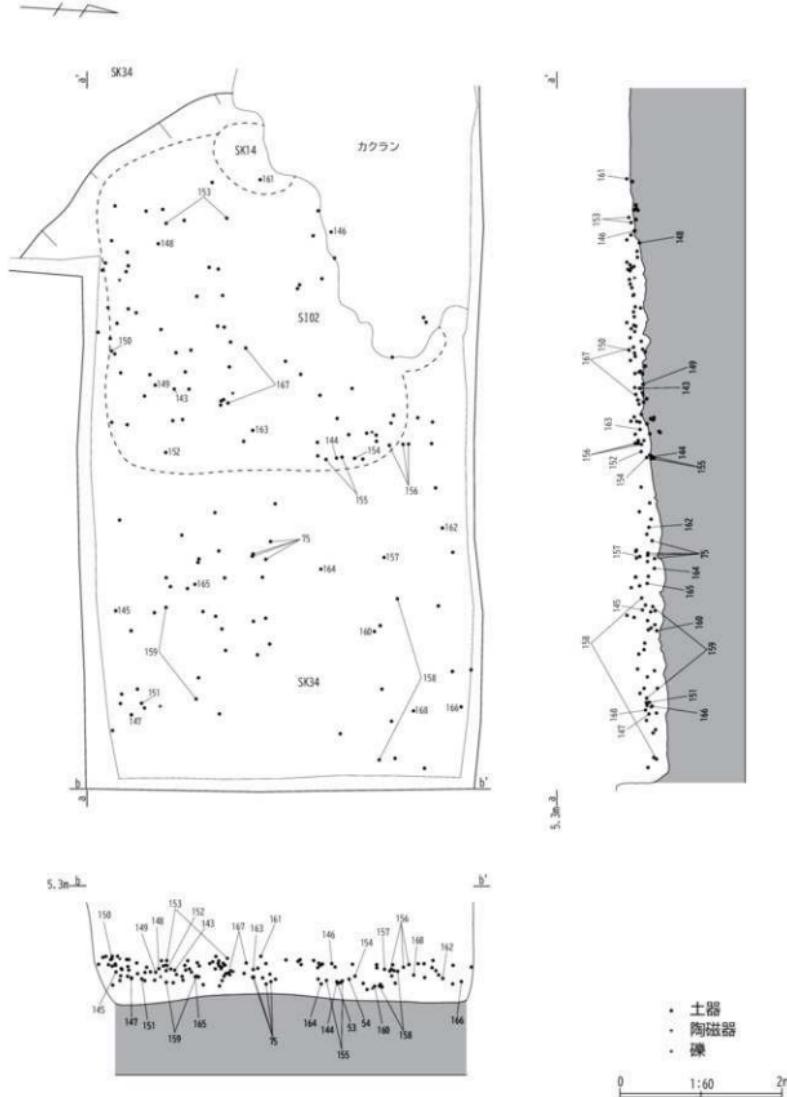


SK14

- | | | |
|---|----------------|--|
| 1 | 7.5Y R3/4 暗褐色砂 | 黒褐色粒少量含む 焼土粒中量含む
炭化物少量含む しまり有り 粘性弱い |
| 2 | 10Y R2/2 黒褐色砂 | 黒褐色粒少量含む 焼土粒微量含む
軽石少量含む しまり弱い 粘性弱い |
| 3 | 10Y R2/3 黒褐色砂 | 黒褐色粒少量含む 軽石少量含む
しまり弱い 粘性弱い |
| 4 | 7.5Y R2/2 黒褐色砂 | 暗褐色粒少量含む 軽石少量含む
しまり弱い 粘性弱い |

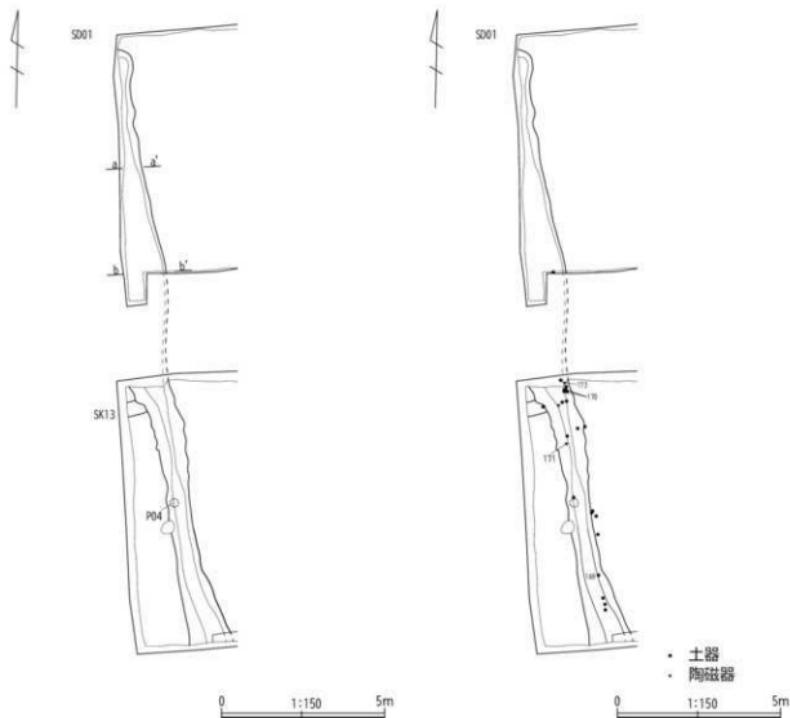
0 1:60 2m

第31図 SK14 遺構実測図

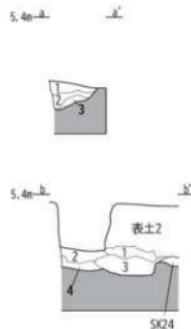


SK34遺物出土状況

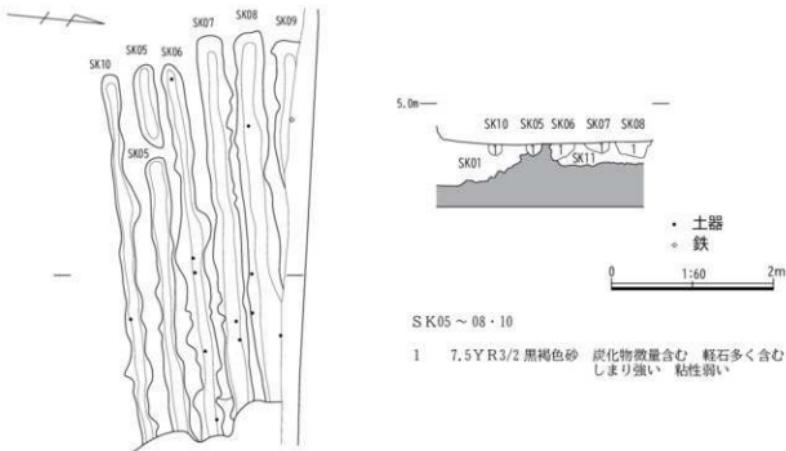
第32図 S K34 遺構実測図



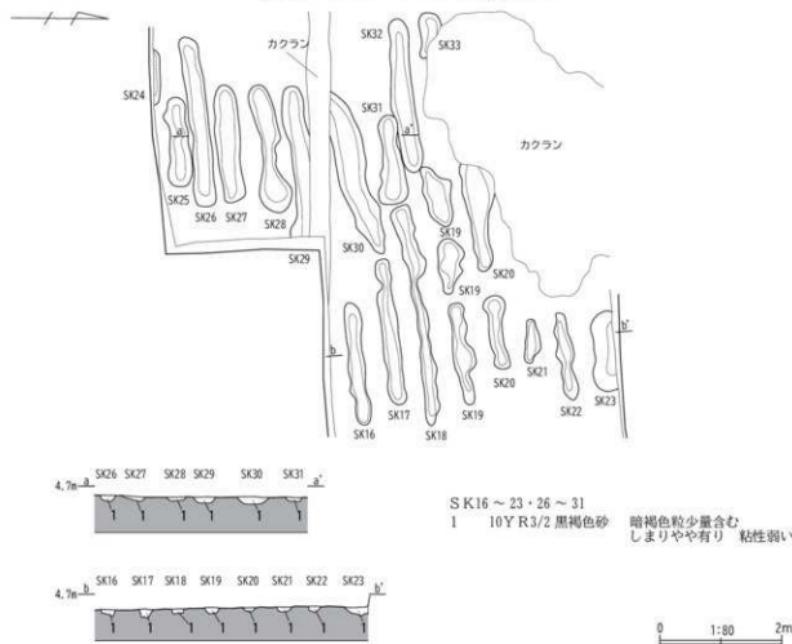
SD01遺物出土状況



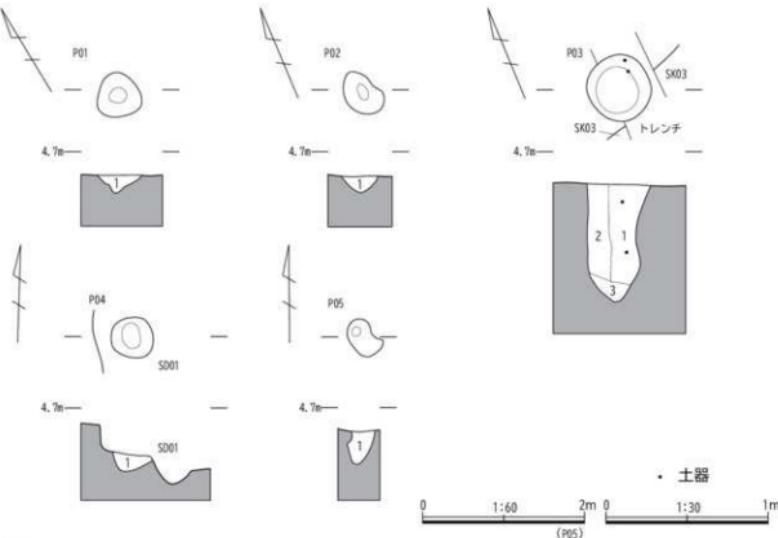
第33図 SD01 遺構実測図



第34図 S K05~SK10 遺構実測図



第35図 S K16~SK33 遺構実測図



P01

1 10YR4/2 灰黄褐色砂 しまり弱い 黏性弱い

P02

1 10YR4/2 灰黄褐色砂 しまり弱い 黏性弱い

P03

1 7.5YR4/1 灰褐色土 暗褐色粒少量含む 黑褐色粒少量含む しまり弱い 黏性弱い
2 10YR3/3 暗褐色砂 黑褐色粒少量含む しまり弱い 黏性弱い
3 7.5YR3/2 黑褐色砂 暗褐色粒少量含む 黑褐色粒少量含む しまり弱い 黏性弱い

P04

1 10YR4/2 灰黄褐色砂 しまり弱い 黏性弱い

P05

1 7.5YR2/2 黑褐色砂 極灰色砂微量含む 炭化物微量含む 軽石微量含む しまり強い 黏性弱い

・ 土器

第36図 P01～P05 遺構実測図

第2表 遺構一覧表

番号	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	平面形状	遺物	備考
SK01	S10-29・25 S11-15・18・21～23 T10-5, T11-1～3	(5, 31)	(4, 35)	0.65	不整形な隅丸方形	須恵器、土師器、磁器、陶器 鉄製品、炭化物	SK02・03・04・05・06・10・11 SD01, PD3・05に切られる
SI02	R11-12・16～18 R11-21～23	(4, 35)	(4, 13)	0.23	隅丸方形	須恵器、土師器、磁器、陶器 土器（柄焼、支脚）、石製品、織	SK02に切られ、SK14を切る
SK02	R11-12・14・16～25 S11-12・14・17～19・ 22～24, T11-3～4	1区 (5.16) 2区 (7.22)	(5, 07) (4, 80)	0.85 0.66	不整形	須恵器、土師器、磁器、陶器 土製品（瓦帽子）	1・2区に渡って確認される SK01・SI02を切る
SK03	T11-1～2・6～7	(3.05)	(2, 20)	0.66	隅丸方形	須恵器、土師器、磁器、陶器 土器（柄焼）、土製品（土器）、炭化物	SK01を切り、 土器（柄焼）、土製品（土器）、炭化物、骨片 火葬土坑。SK01を切る
SK04	S11-23, T11-2～3	(0.90)	(0.68)	0.40	T字形	須恵器、土師器、磁器、骨片	SK01・IIを切る。近世の範囲か
SK05	S10-29, S11-14～18	(4, 54)	0.25	0.29	溝状	須恵器	SK01・IIを切る。近世の範囲か
SK06	S10-29, S11-14～18	(4, 65)	0.45	0.31	溝状	土師器	SK01を切る。近世の範囲か
SK07	R10-26, S11-15・16～17	(4, 60)	0.38	0.22	溝状	土師器	SK01を切る。近世の範囲か
SK08	S10-11～12・15～17	(4, 50)	0.48	0.26	溝状	須恵器、土師器、磁器	SK01を切る。近世の範囲か
SK09	S10-15, S11-11	(1, 80)	(0.34)	0.20	溝状	なし	近世の範囲か
SK10	S10-23・25 S11-16～18	(4, 50)	0.35	0.25	溝状	土師器	近世の範囲か
SK11	S11-11～12・16～18	(2, 93)	(1.25)	0.21	隅丸長方形	須恵器、土師器	SK01を切り、SK02・05・06・07 08に切られる
SK12	S11-18～19・23～24	(2, 20)	(1.72)	0.23	隅丸方形	須恵器、土師器、磁器	SK15を切る
SK13	S10-19	(0.65)	0.45	0.17	溝状	なし	SD01に切られる
SK14	R10-20・25 R11-16・21	(1, 07)	(0.82)	0.75	椭円形	須恵器、土師器	遺構表面を搅乱に切られる SD01に切られる
SK15	S11-13～14・18～19	(1, 48)	(0.82)	0.20	不整形	なし	SK13に切られる
SK16	R11-22～23	2, 20	0.25	0.17	溝状	なし	近世の範囲か
SK17	R11-22～23	2, 40	0.38	0.16	溝状	なし	近世の範囲か
SK18	R11-16～18・21～22	3, 65	0.32	0.20	溝状	なし	近世の範囲か
SK19	R11-16～18	(3, 95)	0.50	0.20	溝状	なし	近世の範囲か
SK20	R11-16～17	2, 97	0.53	0.09	溝状	なし	近世の範囲か
SK21	R11-12・17	0, 72	0.25	0.08	溝状	なし	近世の範囲か
SK22	R11-12～13	1, 40	0.32	0.12	溝状	なし	近世の範囲か
SK23	R11-12～13	(1, 30)	(0.38)	0.24	溝状	なし	近世の範囲か
SK24	S10-10	(1, 10)	(0.10)	0.07	溝状	なし	SD01に切られる。近世の範囲か
SK25	S10-5・10 S11-7・6	1, 47	0.40	0.15	溝状	なし	近世の範囲か
SK26	S10-5, S11-1	2, 78	0.35	0.09	溝状	なし	近世の範囲か
SK27	S10-5, S11-1	1, 94	0.41	0.13	溝状	なし	近世の範囲か
SK28	S10-5, S11-1	2, 12	0.52	0.07	溝状	なし	近世の範囲か
SK29	R10-25, S11-31 S10-5, S11-1	(2, 45)	(0.40)	0.09	溝状	なし	近世の範囲か
SK30	R10-25, R11-21	(2, 72)	0.52	0.13	溝状	なし	近世の範囲か
SK31	R10-25, R11-21	1, 45	0.47	0.16	溝状	なし	SK31を切る。近世の範囲か
SK32	R10-29・25 R11-16・21	2, 53	(0.37)	0.18	溝状	なし	SK33に切られる。近世の範囲か
SK33	R10-20	(0.75)	(0.37)	0.19	溝状	なし	近世の範囲か
SK34	R10-29・25 R11-12～25, S11-1	(8, 33)	(4, 61)	0.45	不整形	須恵器、土師器、土器（柄焼） 織	SK02の下層より検出
SD01	R10-14・19・24 S10-4・13・19～10 S10-14・15・19～20・25 T10-5・6, T11-6	(16, 15)	(1, 32)	0.76	溝状	須恵器、土師器、磁器、陶器 鉄製品（ナセル） 織（縞模片器）	SK01・03・13, PD4を切る
P01	S10-25, S11-21	0, 28	0.25	0.12	円形	なし	
P02	S11-21	0, 30	0.18	0.12	椭円形	なし	
P03	T11-1～2	0, 42	0.38	0.74	円形	須恵器、土師器、陶器	SK01・03を切る。複数か
P04	S10-25	0, 27	0.25	0.11	円形	なし	SD01に切られる
P05	S11-23	0, 48	0.33	0.43	不整形	なし	SK01を切る

4. 遺物

S K 01 (第 37 ~ 39 図)

1 ~ 11 はロクロ土師器壺である。8 ~ 10 は内面にミガキと黒色処理が施される。11 はミガキが施されるが、黒色処理は認められない。1・5 ~ 7・9・11 は底部回転糸切り後無調整、2 は体部下端ヘラケズリと底部回転糸切り後周辺手持ちヘラケズリ、3・10 は体部下端ヘラケズリと底部回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ、4 は底部回転糸切り後周辺ヘラケズリ、8 は体部下端ヘラケズリと底部全面回転ヘラケズリである。12 ~ 14 はロクロ土師器高台付壺で、内面にミガキと黒色処理が施される。15 はロクロ土師器の高台付皿、16 ~ 21 は土師器甕で、16・17 は武藏型甕、18 は常縫型、19・20 は口縁部が肥厚するタイプ、21 は胸部から底部のみの個体である。22 ~ 24 は土師器台付甕で、23 は胸部に煤が厚く付着している。25 は土師器鉢である。26 ~ 28 は須恵器壺で、26 は末野產、27・28 は南比企産である。3 点とも底部回転糸切り後無調整の壺である。29・30 は須恵器甕で、29 が東金子產、30 は新治產である。31 は須恵器長頸瓶の頸部、32 は灰釉陶器壺の口縁部から体部、33 は灰釉陶器長頸瓶の頸部から肩部である。34・35 は鉄製品の釘で、34 は扁平な頭部をもつ。34・35 とも断面は方形である。

S I 02 (第 40 ~ 44 図)

36 ~ 51 はロクロ土師器壺である。48 は深身の様相をみせるため、壺の可能性もある。36・37・41・42・50・51 は底部回転糸切り後無調整、40 は体部下端手持ちヘラケズリと底部回転糸切り後全面回転ヘラケズリ、43 は底部手持ちヘラケズリ、44・45・47 は体部下端ヘラケズリと底部全面手持ちヘラケズリが施される。52 はロクロ土師器高台付壺、53 はロクロ土師器鉢である。内面が黒色処理されたものは 47 ~ 53、そのうちミガキが施されるのは 48・49・51 ~ 53 で、50 は摩滅が著しく、ミガキが施されたかは不明瞭である。54 ~ 65 は土師器甕で、武藏型 (54 ~ 59) と常縫型 (60 ~ 63) の 2 タイプが見られた。66 ~ 71 は土師器台付甕で、68 は小振りである。72・73 は土師器鉢である。74 ~ 84 は須恵器壺、85・86 は須恵器高台付壺、87 は須恵器甕、88 ~ 90 は須恵器甕である。なお、75 は S102 グリッド出土遺物と SK34 の点上げ遺物として取り上げたものが接合している。74 は末野產、75 ~ 77・80・81・83・84・88 は南比企産、82 は三和產かと見られる。85・86・90 は東金子產で、87・89 は新治產である。91 ~ 94 は須恵器の長頸瓶、91 は頸部で南比企産、92 は胸部で東金子產、93 は胸部で末野產である。94 は高台部で末野產である。95 は灰釉陶器高台付皿の胸部から底部、96 は灰釉陶器甕の胸部から底部で、内底面に連続した指頭押圧痕が見られる。97 は土製品支脚の一部、98 は石製品砥石で凝灰岩製である。穿孔がみられ、携帶用砥石と思われる。また、穿孔貝巣穴痕跡軟質泥岩が 1 点出土している。小片のため図化できなかったが、製塩に関する遺物であるため、写真図版 11 に掲載した。

S K 02 (第 45 図)

99 はロクロ土師器壺で、底部回転糸切り後無調整である。100・101 は須恵器壺の口縁部で产地不明。102 は須恵器甕で南比企産の口縁部から頸部である。103 は灰釉陶器壺で、口唇部は強く外反する。104 は灰釉陶器長頸壺、105 は綠釉陶器の皿である。106 は磁器碗で体部外面に梅樹文が描かれていると推定される。107 は陶器德利で外面に鉄釉が施される。108 は土製品泥面子で、力士を模した芥子面と見られる。109 は不明鉄製品で、長方形の薄い板状を呈する。

S K 03 (第 46 ~ 47 図)

110 ~ 117 はロクロ土師器壺である。110・114 は底部回転糸切り後周辺・体部下端ヘラケズリ、113 は底部回転糸切り後全面回転ヘラケズリと体部下端ヘラケズリ、112・117 は底部回転糸切り後無調整、115 は底部全面手持ちヘラケズリと体部下端ヘラケズリである。また、111 は体部外面に、114 は底面

に文字不明の墨書が見られる。116は黒色処理、117はミガキ・黒色処理が施される。118・119はロクロ土師器高台付皿である。119の内面には粗いミガキが施されるが、黒色処理は認められない。120～124は土師器壺で、120は武藏型、121・122は口唇部が面取り状の常縫型である。123は口縫部が折り返し状に肥厚する。124は内面にヘラの当たり痕が明瞭に残る。また、胴部破片上方に穿孔が認められる。123・124は産地不明。125～129は須恵器壺である。125・127～129は回転糸切り後無調整で、126は器面の荒れが著しく、底部の調整は不明瞭である。125・127・129は南比企産である。130は須恵器壺で南比企産。131は概の把手部分で粗いヘラケズリとナデにより成形されている。132は須恵器壺の胴～底部で、内面下部に蒸気口用に棧をわたすためのものと考えられる径約8mmの盲孔が2か所見られる。133～135は灰釉陶器の長頸壺で、133は頸部、134・135は肩から胴部である。136は土製品の土錘で、外面にヘラナデ痕が残る。

S K 04 (第48図)

137はロクロ土師器壺で、体部外面に文字不明の墨書がみられる。

S K 11 (第49図)

138はロクロ土師器の壺である。底部は回転糸切り後、周辺と体部下端にヘラケズリ調整が施される。139・140は須恵器壺で、共に底部回転糸切り後無調整の南比企産である。140は底面に文字不明のヘラ記号が認められる。

S K 12 (第50図)

141はロクロ土師器壺、底部下端に粗いヘラケズリが施される。142はロクロ土師器高台付皿である。

S K 34 (第51～53図)

143～145はロクロ土師器壺、143は体部下端ヘラケズリと底部回転糸切り後全面手持ちヘラケズリ、145は底部回転糸切り後無調整。144は内面にミガキ・黒色処理が施される。145はミガキが施されるが、黒色処理は認められない。146・147はロクロ土師器皿で、底部回転糸切り後無調整である。147は内面にミガキ・黒色処理が施される。148～151はロクロ土師器高台付皿、148・151は内面にミガキと黒色処理が施され、149は体部外面から高台にかけ文字不明の墨書が見られる。150は内面に黒色処理が施される。152は土師器台付壺、153は土師器台付壺脚部、154は土師器壺で、胴部に四角錐の把手状貼付が付く。155～161は須恵器壺である。155・157・159～161は底部回転糸切り後無調整で、156は底部回転糸切り後ヘラケズリ、158は底部回転糸切り後周辺ヘラケズリを施す。155・157～161は南比企産である。159・160は底面にヘラ記号が認められ、159はヘラ記号「×」、160は文字不明である。162は須恵器壺で南比企産、ボタン状の鉢が付く。163は須恵器鉢で、体部外面に横位のタタキ目が残る。164・165は須恵器壺である。165は南比企産で、底面は幅の広い高台状の高まりをもつ。166は須恵器長頸壺の頸部で末野産、167は東金子産の須恵器壺で、外面に自然釉が厚く垂れ掛かる。168は須恵器壺である。

S D 01 (第54図)

169は武藏型の土師器壺で、外面に横位の強いケズリが施される。170は灰釉陶器壺、171は磁器碗で、外面に梅樹文が描かれると見られる、ぐらわんか手の碗である。172は磁器香炉で、小片のため外面の染付は文様不明である。173は陶器德利で、内外面うのふ釉流し掛けである。174は煙管雁首で火皿は欠失している。

P 03 (第 55 図)

175 は陶器の徳利で、頸～肩部である。外面に鉄軸が掛かる。

包含層（第 56 図）

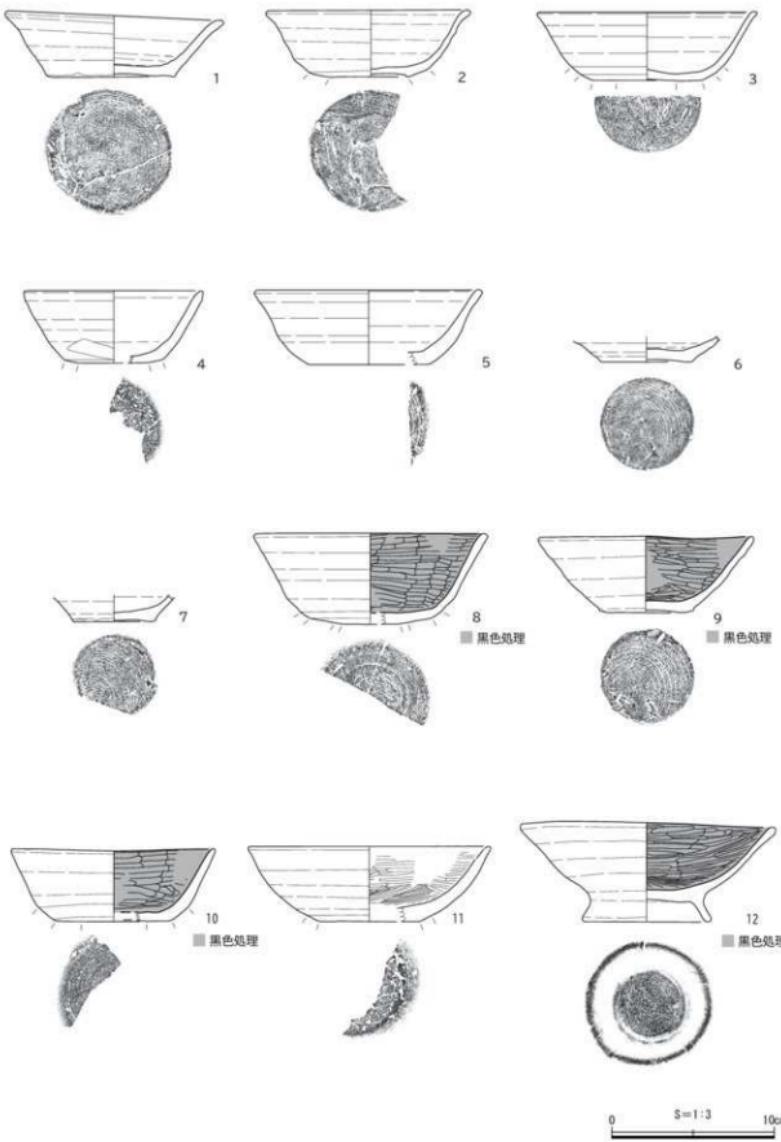
176 は須恵器坏で南比企産、体部下端ヘラケズリ。177 はロクロ土師器坏で体部外面に文字不明の墨書が見られる。178 はロクロ土師器坏のミニチュア土器である。底部は回転糸切り後無調整で、通常の大きさの土器と成形・調整方法が同じである。179・180 は須恵器坏で南比企産。共に底部回転糸切り後無調整で、180 は底面に文字不明のヘラ記号が見られる。181 は磁器碗で、外面には文様不明の染付が施され、一部に透明軸が厚く垂れ掛かる。182 は陶器壺で、耳を欠失、縁内から外面に鉄軸が掛かる。183 は北宋銭の「熙寧元宝」で 1068 年初鋳である。184・185 は鉄製品釘で、断面は方形である。186 は紡錘車の軸と見られる。

畝状遺構（第 57 図）

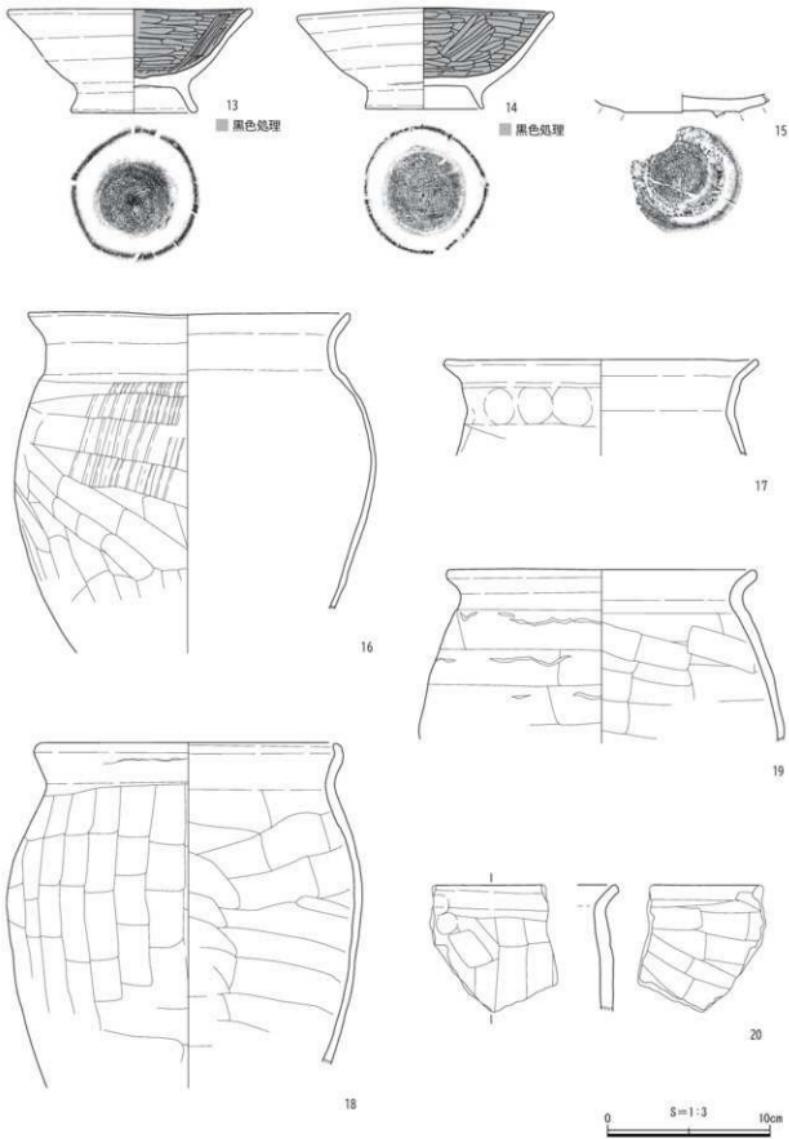
187 はロクロ土師器坏で底部回転糸切り後無調整、188 はロクロ土師器高台付坏、189 は土師器台付壺の胴下部から脚上部である。190 は須恵器塊で東金子產かと見られる。191 は須恵器坏で底部回転糸切り後無調整、南比企産である。

遺構出土遺物（第 58 図）

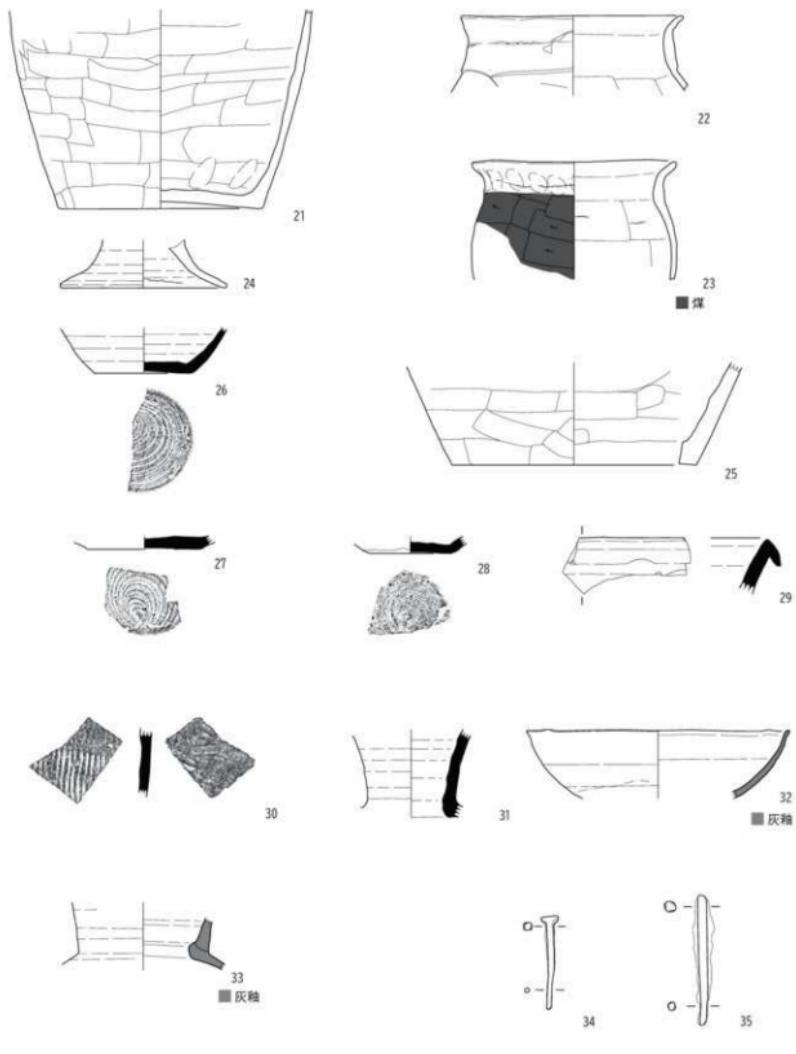
192 はロクロ土師器坏で、体部外面に文字不明の墨書が見られる。193 はロクロ土師器高台付皿、194 は土師器壺で、胎土に金雲母を多く含み、常総產と見られる。195 は南比企産の須恵器坏で、体部外面に文字不明の墨書が見られる。196 は磁器碗で、外面に不明染付、見込に染付の丸文が施文される。197 は瓦質土器で、火消壺の蓋である。198 は土器片で焰烙の底部を転用したメンコと見られる。199 は磁器碗で、外面に松樹欄干狐文、見込に双桔梗文が施文されている。



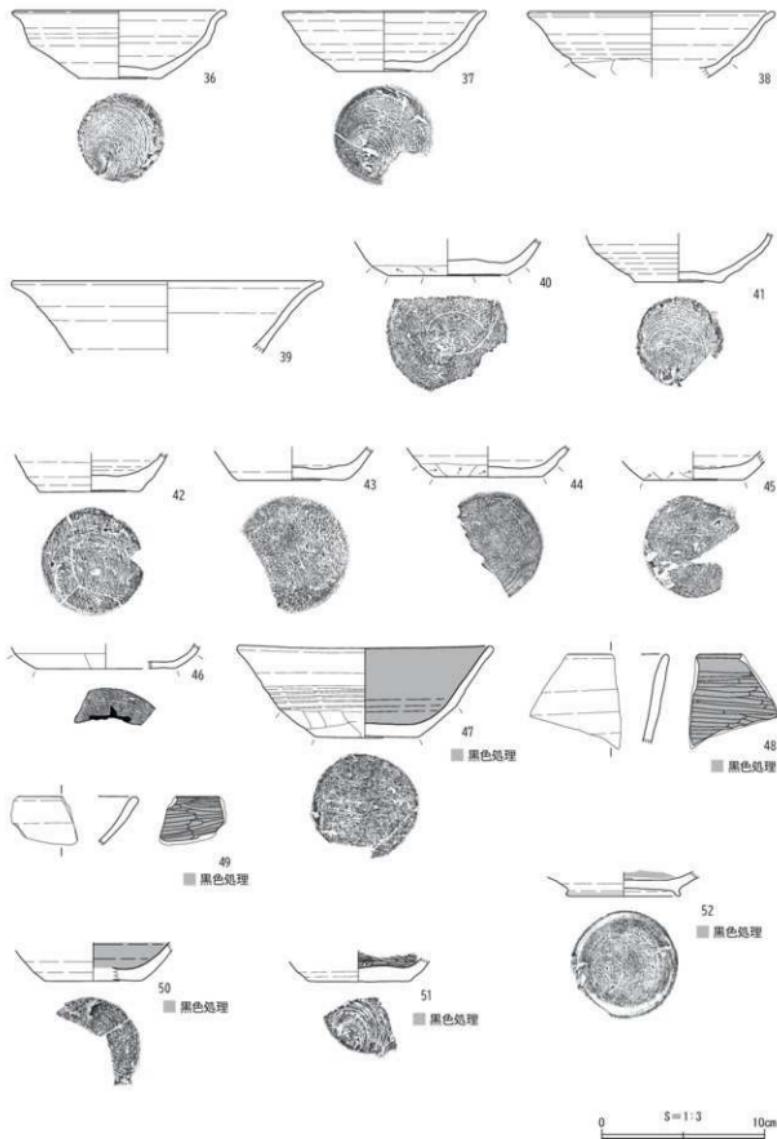
第37図 SK01出土遺物（1）



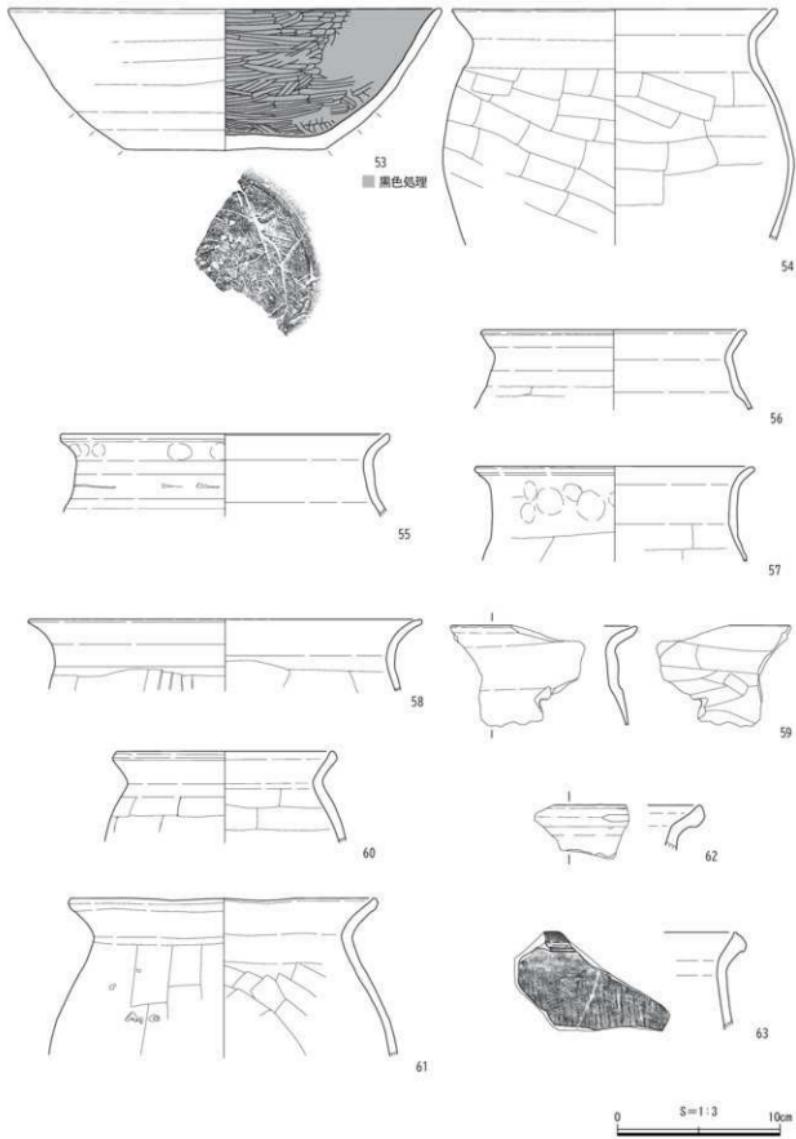
第38図 SK01出土遺物（2）



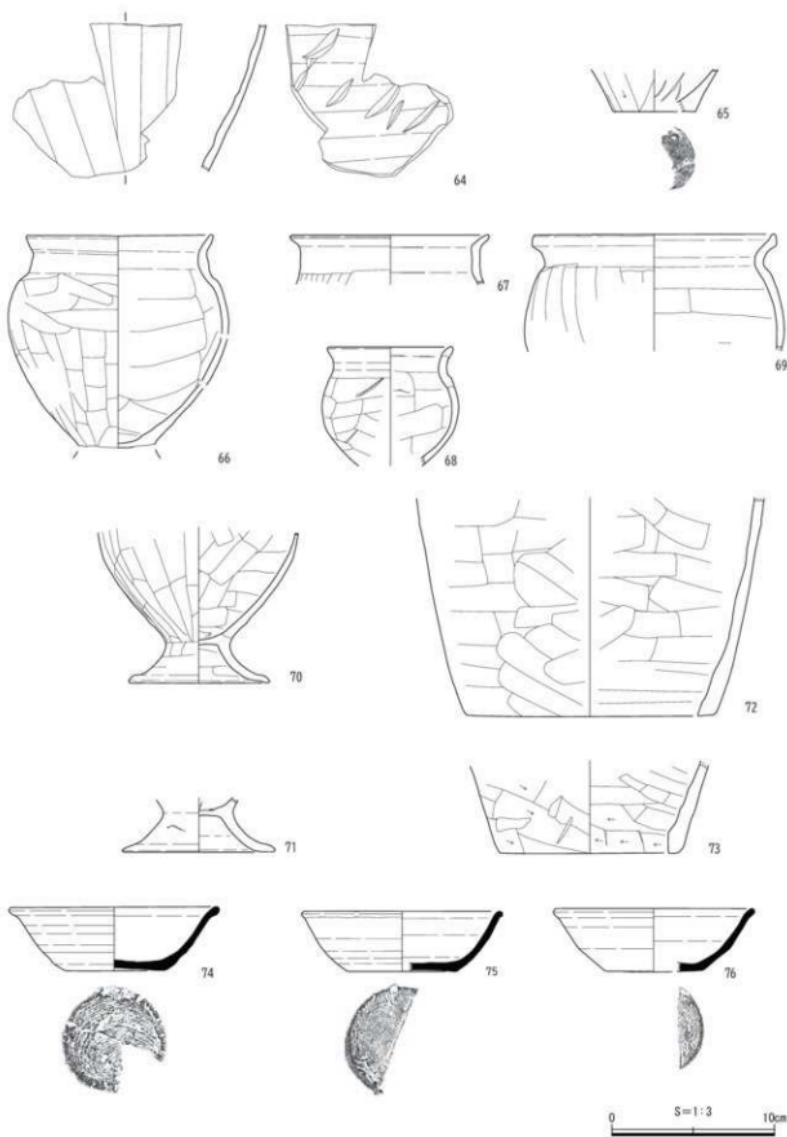
第39図 SK01出土遺物（3）



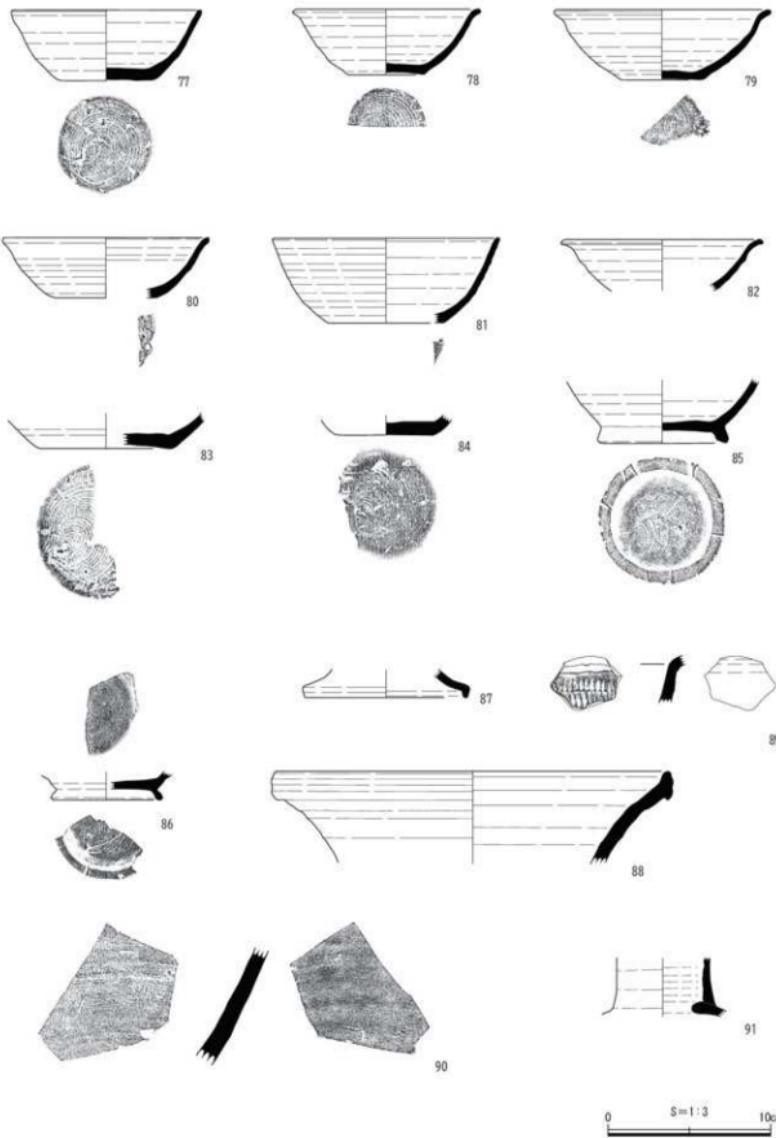
第40図 S I02出土遺物 (1)



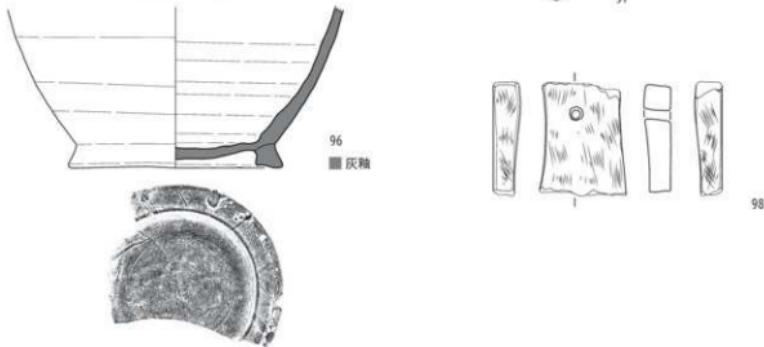
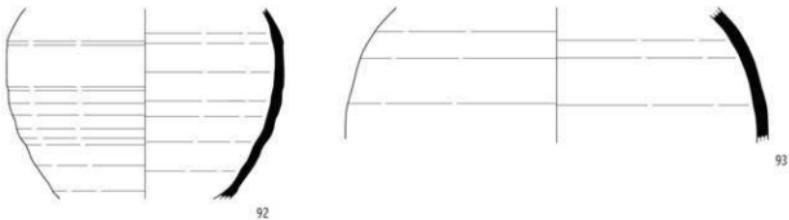
第41図 S I02出土遺物（2）



第42図 S102出土遺物（3）



第43図 S I02出土遺物 (4)



0 $\frac{S=1:3}{10cm}$

第44図 S102出土遺物（5）



99



100



101



102



103

■ 灰釉



104

■ 灰釉



105

■ 绿釉

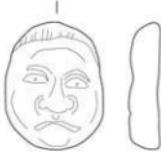


106



107

■ 铁轴



|

108

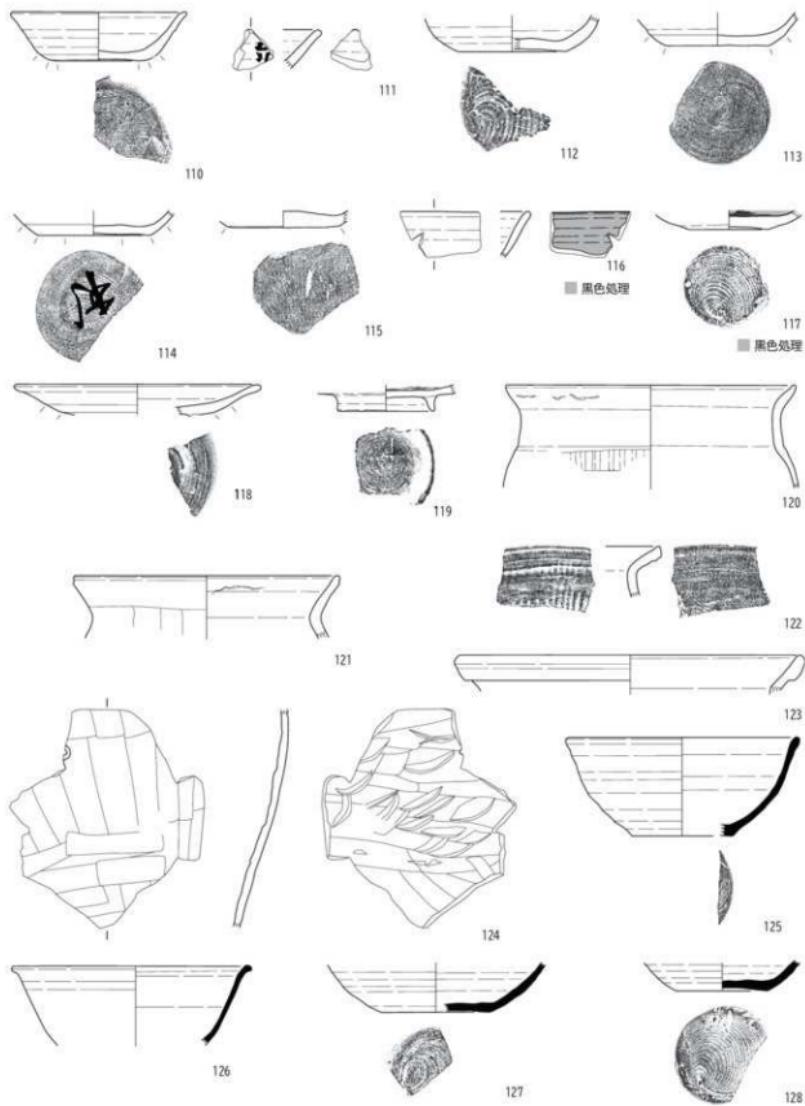


109

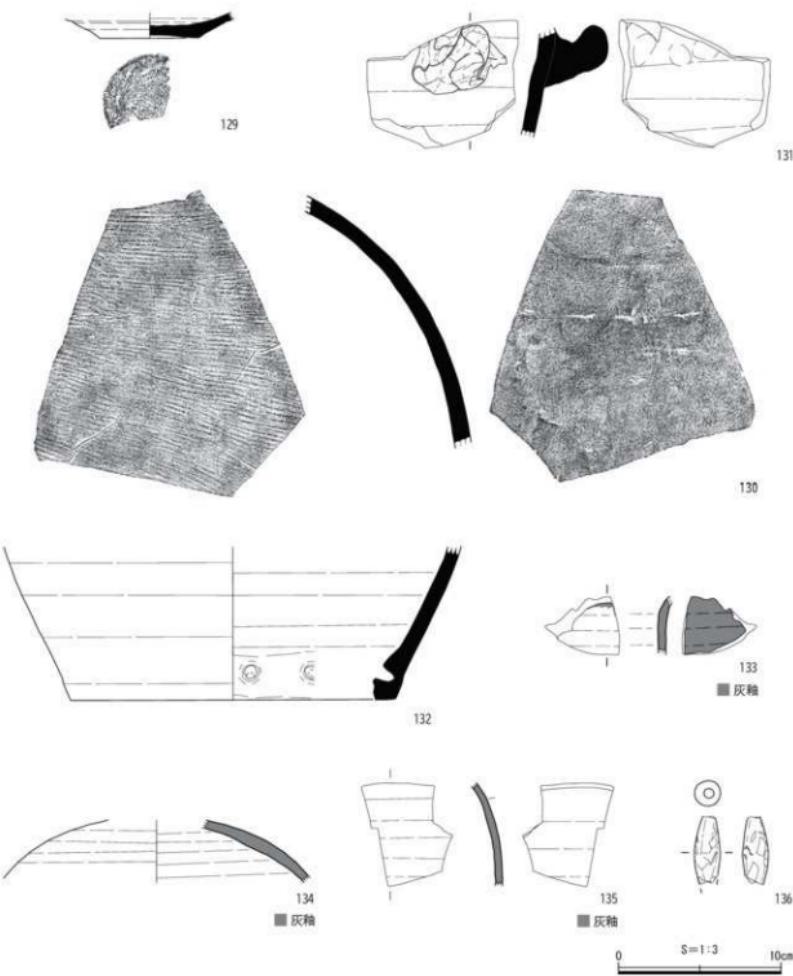
0 S=1:1 2cm (108)

0 S=1:3 10cm

第45図 SK02出土遺物



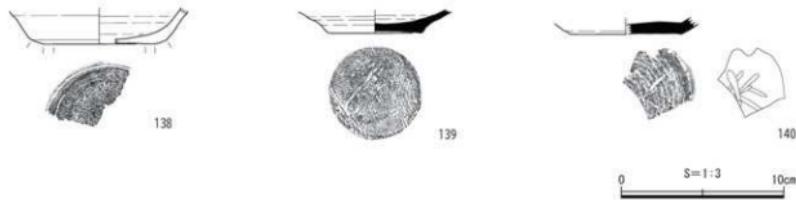
第46図 S K03出土遺物 (1)



第47図 SK03出土遺物（2）



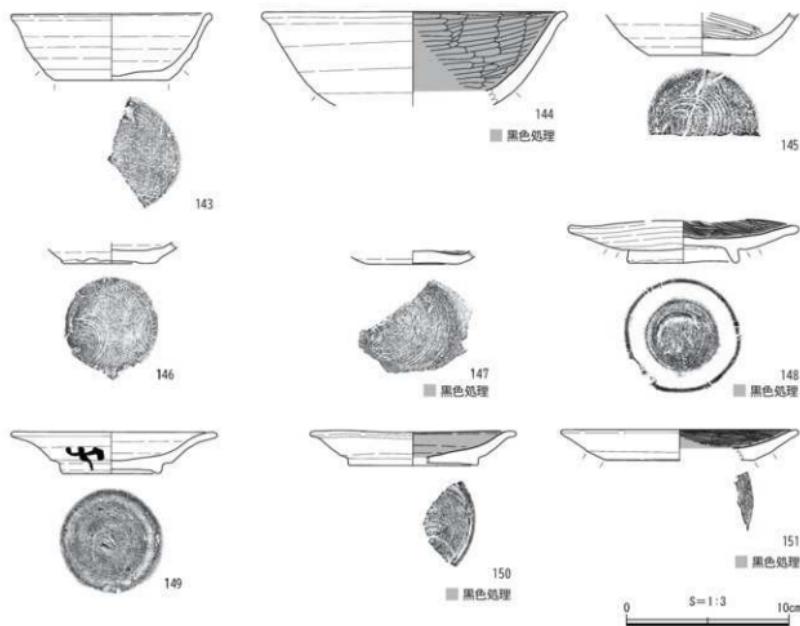
第48図 SK04出土遺物



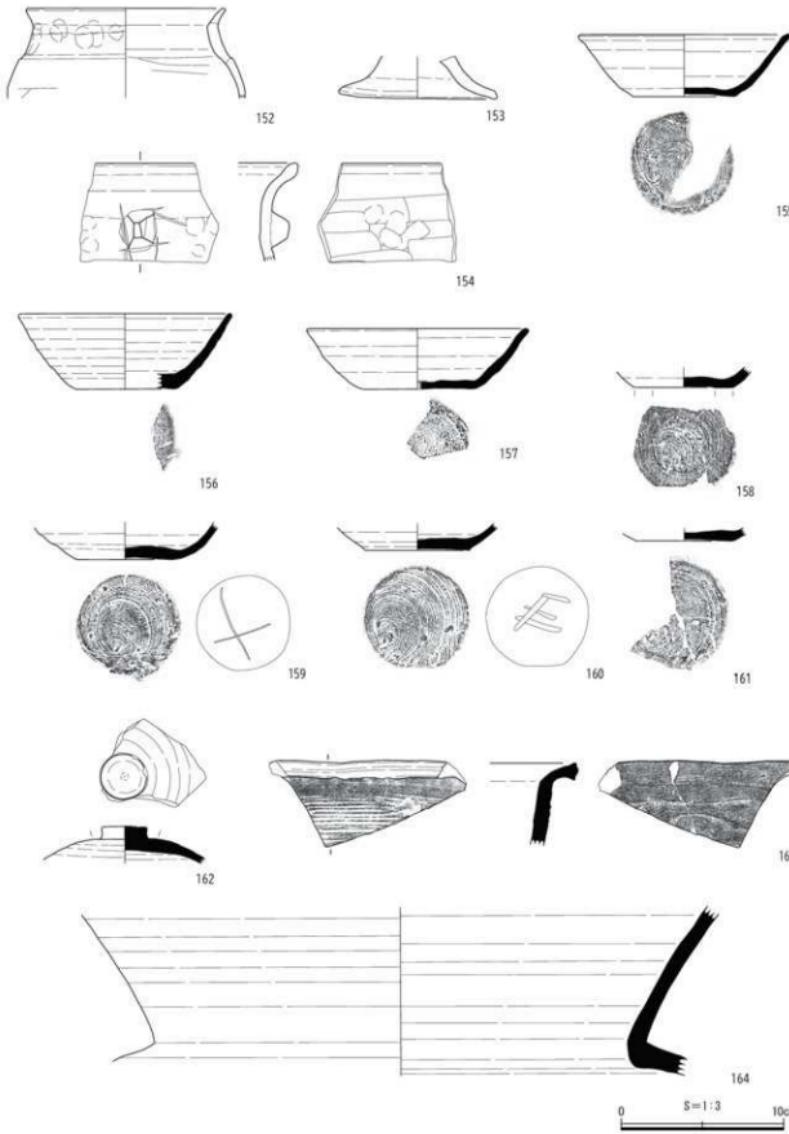
第49図 SK11出土遺物



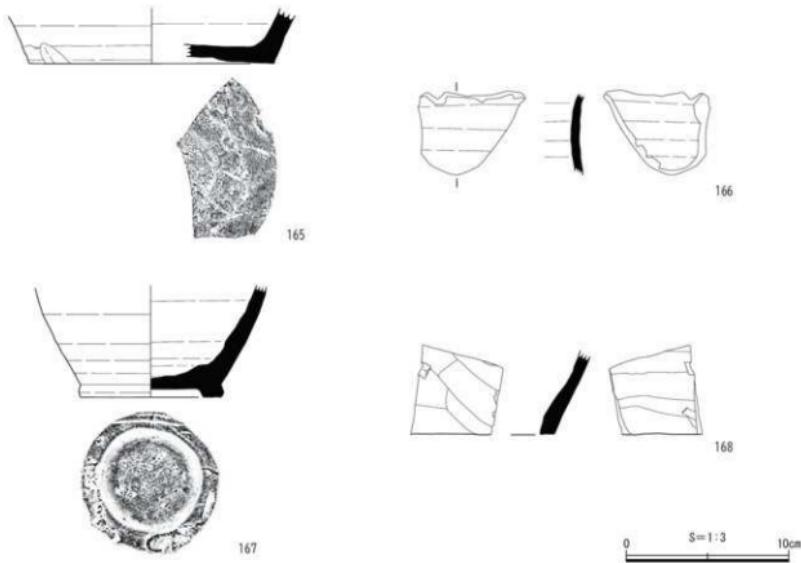
第50図 SK12出土遺物



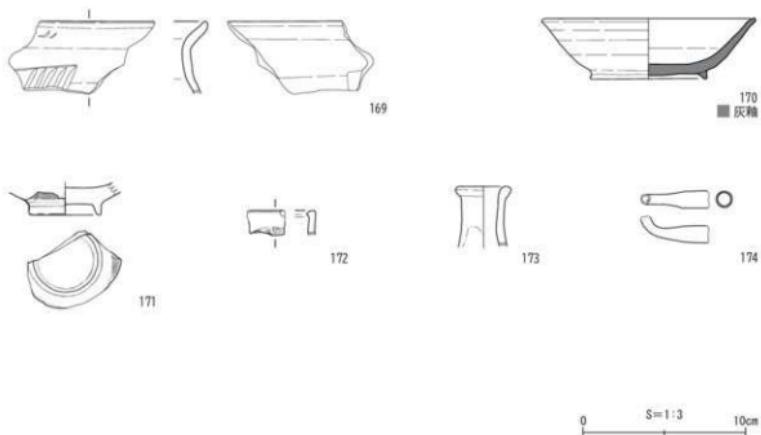
第51図 SK34出土遺物 (1)



第52図 S K34出土遺物（2）



第53図 SK 34出土遺物（3）



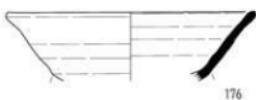
第54図 SD 01出土遺物



175

0 $S=1:3$ 10cm

第55図 P 03出土遺物



176



177



178



179



180



181



182

■ 鉄輪



183



184



185

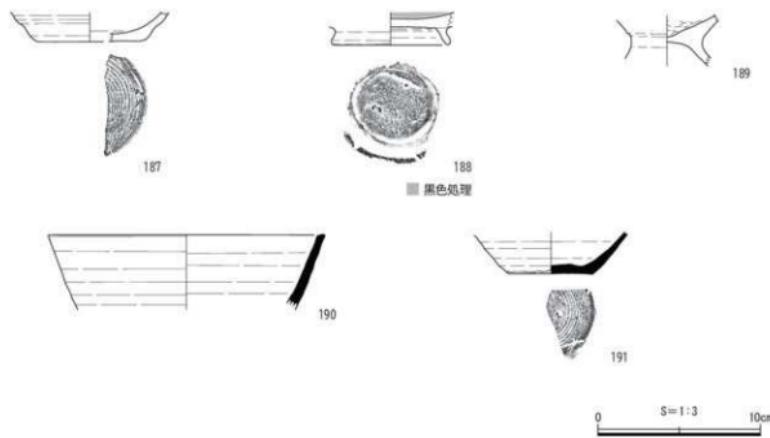


186

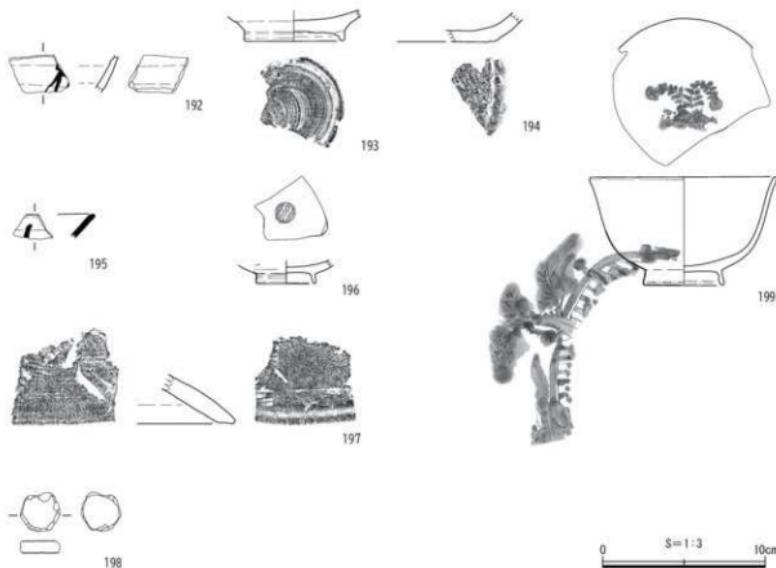
0 $S=1:1$ 2cm (183)

0 $S=1:3$ 10cm

第56図 包含層出土遺物



第57図 畝状遺構出土遺物



第58図 遺構外出土遺物

第3表 遺物観察表(土器・陶磁器等)

測定番号	測定番号	遺物名	種別	寸法 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上表面 下表面	調査・施文 (外観)	調査・施文 (内面)	備考	実測 番号
37 1	SK01	クロコ 土師器	壺	11.0	7.5	4.1	石英・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい黄 褐色	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ			81
37 2	SK01	クロコ 土師器	壺	12.3	4.5	4.1	石英・白色粒 ・黑色粒	にぶい橙	櫛	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部回転系 切り後周辺手持ちヘラ ケズリ	回転ナデ		92
37 3	SK01	クロコ 土師器	壺	(13.2)	(6.6)	4.2	石英・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部回転系 切り後周辺回転ヘラケ ズリ	回転ナデ		73
37 4	SK01	クロコ 土師器	壺	(10.8)	(4.4)	4.4	石英・白色粒 ・黑色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ後、一部ナデ ・底部回転系切り後周 辺ハラケズリ	回転ナデ	摩耗のため不明瞭	87
37 5	SK01	クロコ 土師器	壺	(13.6)	(7.4)	4.6	石英・白色粒 ・小礫	にぶい黃	にぶい橙	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ		86
37 6	SK01	クロコ 土師器	壺	—	5.6	[1, 5]	石英・白色粒 ・黑色粒・薄 色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ		93
37 7	SK01	クロコ 土師器	壺	—	(4.8)	[1, 6]	石英・白色粒 ・黑色粒・薄 色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ		91
37 8	SK01	クロコ 土師器	壺	(14.0)	—	[6.2]	白色粒・黑色 ・薄色粒	にぶい黃	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部切り離 し後全周回転ヘラケズ リ	ミガキ、黒色処理		95	
37 9	SK01	クロコ 土師器	壺	(13.0)	5.8	4.7	白色粒・赤褐色 粒	にぶい黃 褐色	にぶい黃	底面回転系切り後無調 整	ミガキ、黒色処理		78
37 10	SK01	クロコ 土師器	壺	(12.4)	(7.0)	4.4	白色粒・赤褐色 粒	灰褐色	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部回転系 切り後周辺回転ヘラケ ズリ	ミガキ、黒色処理		94	
37 11	SK01	クロコ 土師器	壺	(14.0)	(6.2)	[4.6]	石英・白色粒 ・黑色粒	にぶい黃	にぶい黃	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部回転系 切り後無調整	ミガキ		79
37 12	SK01	クロコ 土師器	高台付 壺	15.4	7.6	6.2	石英・角閃石 ・白色粒・赤 褐色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部回転系 切り後ナデ、高台貼付	ミガキ、黒色処理		83
38 13	SK01	クロコ 土師器	高台付 壺	14.7	7.5	6.4	石英・白色粒 ・黑色粒	にぶい黃	にぶい黃	回転ナデ、底部切り離 し後ナデ、高台貼付	ミガキ、黒色処理		77
38 14	SK01	クロコ 土師器	高台付 壺	(15.4)	7.2	6.2	石英・白色粒 ・黑色粒	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ、底部回転系 切り後ナデ、高台貼付	ミガキ、黒色処理		76
38 15	SK01	クロコ 土師器	高台付 壺	—	—	[1, 1]	石英・チー ト・白色粒・ 赤褐色粒	明褐色	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ、底部回転系 切り後高台貼付	回転ナデ		207	
38 16	SK01	土師器	甕	19.6	—	[20, 9]	石英・角閃石 ・チャート	にぶい黃	口縫部横ナデ、脚部上 位部位の強ハラケズ リ、中位は履歴・脚位 ヘラケズリ	口縫部横ナデ 脚部ナデ	武藏型	99	
38 17	SK01	土師器	甕	(15.0)	—	[5, 9]	角閃石・白色 ・赤褐色粒	櫛	口縫部横ナデ、脚部指 頭部痕痕数・脚部斜位 ヘラケズリ	横ナデ	武藏型	69	
38 18	SK01	土師器	甕	(18.2)	—	[21, 12]	石英・白色粒 ・黑色粒・薄 色粒	にぶい黃	口縫部横ナデ、脚部斜 位ヘラケズリ	口縫部横ナデ	常範型	98	
38 19	SK01	土師器	甕	(18.3)	—	[10, 6]	石英・角閃石 ・チャート・ 雲母	灰褐色	口縫部横ナデ、脚部横 位ラナナデ・粘土痕痕 顯著	口縫部横ナデ		75	
38 20	SK01	土師器	甕	—	—	[7, 8]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい黃	口縫部横ナデ、脚部斜 位ヘラケズリ	口縫部横ナデ 脚部横・斜位ヘラナデ		89	
39 21	SK01	土師器	甕	—	(12.4)	[12, 2]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい黃	横位ヘラケズリ	横位ヘラナデ 下端に指頭圧痕		97	
39 22	SK01	土師器	台付甕	13.4	—	[4, 9]	石英・角閃石 ・白色粒・赤 褐色粒	櫛	口縫部横ナデ、脚部横 位ヘラケズリ	口縫部横ナデ	武藏型	74	
39 23	SK01	土師器	台付甕	12.4	—	[7, 4]	石英・角閃石 ・白色粒・薄 色粒	にぶい黃	口縫部横ナデ、指頭圧 痕・脚部斜位ヘラケズ リ	口縫部横ナデ	外面脚部に厚く煤付 着、武藏型	81	

第4表 遺物觀察表（土器・陶磁器等）

固有番号	遺物名	種別	形態	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上部面 下部面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	実測 番号
39 24	SK01	土師器	台付壺	—	10.0	[3.0]	角閃石・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい橙 梗	回転ナデ	回転ナデ		85	
39 25	SK01	土師器	壺	—	(15.0)	[6.3]	長石・白色粒 ・黒色粒	にぶい黄褐	梗・斜傾ヘラケズリ後 ナデ	横ナデ	周抜け式	72	
39 26	SK01	須恵器	壺	—	(6.0)	[2.8]	長石・白色粒 ・黒色粒	灰黄	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ	深く煤付着	96	
39 27	SK01	須恵器	壺	—	(7.0)	[0.7]	白色・褐色 ・海綿骨付	灰黄	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ	南北企座	99	
39 28	SK01	須恵器	壺	—	(5.0)	[1.0]	長石・白色粒 ・褐色粒・海 綿骨付	灰黄	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ	南北企座	84	
39 29	SK01	須恵器	壺	—	—	[2.0]	長石・白色粒 ・黒色粒	灰白	回転ナデ、自然粒	回転ナデ	東金子壺	80	
39 30	SK01	須恵器	壺	—	—	[4.2]	石英・雲母・ 白色粒	灰黄褐	回転ナデ、躍位のタタ キ	ナデ	新治産	206	
39 31	SK01	須恵器	長頸瓶	—	—	[5.4]	白色粒・黒色 粒	褐灰	回転ナデ、頸部に自然 粒	回転ナデ、自然粒	東金子壺	82	
39 32	SK01	反転 陶器	壺	(16.0)	—	[4.2]	白色粒・黑色 粒	上：オリーブ 灰 下：灰白 灰オリーブ	回転ナデ、口縁部厚め の輪	回転ナデ、褐粒	口縁部ゆがみあり	70	
39 33	SK01	灰釉 陶器	長頸瓶	—	—	[4.2]	白色粒・黑色 粒	灰黄	回転ナデ、施釉	回転ナデ		71	
40 36	SI02	ロクロ 土師器	壺	(12.0)	5.0	4.2	チャート・白 色・赤色粒	明闇灰	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ		7	
40 37	SI02	ロクロ 土師器	壺	(12.4)	(5.8)	3.7	長石・チャー ト・白色粒	にぶい褐	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ		57	
40 38	SI02	ロクロ 土師器	壺	(14.0)	—	[4.0]	長石・白色粒 ・赤褐色粒	梗	回転ナデ、底部下端手 持ちラクケズリ	回転ナデ		42	
40 39	SI02	ロクロ 土師器	壺	(18.6)	—	[4.4]	石英・長石・ 白色粒	梗	回転ナデ	回転ナデ		23	
40 40	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(7.4)	[2.2]	石英・白色粒 ・黒色粒	梗	回転ナデ、体部下端手 持ちラクケズリ・底部 全周輪ヘラケズリ	回転ナデ		2	
40 41	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	—	5.4	白色粒・黑色 粒	明闇灰	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ		6	
40 42	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(6.2)	[1.9]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	明赤褐	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	ミガキ		35	
40 43	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(2.1)	6.6	石英・白色粒 ・赤褐色粒、 黑色粒	にぶい梗 梗	回転ナデ、底部手持ち ヘラケズリ	回転ナデ	体部内外剥ける	8	
40 44	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(6.6)	[1.9]	石英・チャー ト・白色粒・ 赤色粒	にぶい梗	回転ナデ後、体部下端 底端全周手持ちラ ケズリ	回転ナデ		5	
40 45	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	—	6.2	[1.4]	石英・白色粒 ・黒色粒	にぶい梗	斜傾ラクケズリ、体部 下端・底部全周手持ち ヘラケズリ	回転ナデ		43
40 46	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(8.6)	[1.5]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい梗	斜傾ラクケズリ、体部 下端・底部全周手持ち ヘラケズリ	回転ナデ	底面に墨書き (文字不明)	45	
40 47	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	15.4	6.2	5.7	石英・チャー ト・白色粒	赤褐	回転ナデ。体部下端、 底部全周手持ちヘラケ ズリ	回転ナデ、黑色処理	体部のロクロ目墨書き	19
40 48	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	—	[5.9]	石英・白色粒 ・黑色粒	黑褐	回転ナデ	ミガキ。黑色処理	境か	22	
40 49	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	—	[3.0]	石英・角閃石 ・白色粒	灰黄褐	回転ナデ	ミガキ。黑色処理		20	
40 50	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(6.0)	[2.4]	白色粒・黑色 粒・赤褐色粒	梗	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	回転ナデ後、黑色処理	壁際の磨滅調査	12	
40 51	SI02	ロクロ 土師器	壺	—	(6.2)	[1.9]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	明赤褐	回転ナデ、底部回転余 切り後無調整	ミガキ。黑色処理		33	
40 52	SI02	ロクロ 土師器	高台付 壺	—	(6.6)	[1.5]	石英・白色粒 ・白色粒	梗	回転ナデ、底部回転余 切り後高台貼付	ミガキ。黑色処理		14	

第5表 遺物觀察表(土器・陶磁器等)

固形 番号	通番 番号	種別	目標	直径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上表面 下表面	調査・施主 (内面)	調査・施主 (外面)	備考	実測 番号	
41	53	S102	クロ口 土師器	鉢	{26.4}	{12.2}	[8,7]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	灰黃褐	回転ナデ、底部下端ヘ ラケズリ、底部回転糸 引け後無地ヘラケズリ	ミガキ、黒色処理		54	
41	54	S102	土師器	甕	19.8	—	[14,5]	石英・長石・ 赤褐色粒	赤褐褐	口縁部模ナデ、胴部斜 位ヘラケズリ	口縁部模ナデ、胴部模位ヘラナデ	武藏型	59	
41	55	S102	土師器	甕	(20.0)	—	[5,1]	石英・黑色粒 ・赤褐色粒	赤褐褐	口縁部模ナデ、胴部斜 位ヘラケズリ	横ナデ	武藏型	26	
41	56	S102	土師器	甕	(16.0)	—	[4,9]	石英・長石・ チャート	明赤褐	口縁部模ナデ、肩部模 位ヘラケズリ	横ナデ	武藏型	29	
41	57	S102	土師器	甕	(16.0)	—	[5,8]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	明赤褐	口縫上部に洗練がみる る、口縁部模ナデ、頸部 に指留江真、胴部模 位ヘラナデ	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラナデ	武藏型	44	
41	58	S102	土師器	甕	(12.0)	—	[4,4]	石英・角閃石 ・白色粒	[に]赤褐	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラナデ	武藏型	27	
41	59	S102	土師器	甕	—	—	[5,9]	角閃石・白色 粒・黒色粒	赤褐	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ	口縁部模ナデ、箱部 下端・斜位ヘラナデ	武藏型	37	
41	60	S102	土師器	甕	(13.2)	—	[5,7]	石英・白色粒	[に]赤褐	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラナデ	常総型	61	
41	61	S102	土師器	甕	(18.0)	—	[9,7]	長石・白色粒 ・赤褐色粒・ 黑色粒	[に]赤褐	口縫部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ、 口縫部の付着物	口縁部模ナデ、胴部斜 位ヘラナデ	常総型	65	
41	62	S102	土師器	甕	—	—	[2,8]	石英・白色粒 ・黒色粒・赤 褐色粒	赤褐	横ナデ	横ナデ	常総型	28	
41	63	S102	土師器	甕	—	—	[6,0]	石英・長石・ 白色粒・黒色 粒	灰黃	回転ナデ、腹部に浅い タタキ目、 [に]黄褐	回転ナデ	常総型	63	
42	64	S102	土師器	甕	—	—	[9,4]	石英・チャー ト・赤褐色粒 ・白色粒	[に]赤褐	[に]赤褐	縦位ヘラケズリ	縦位ヘラナデ、へラ状 工具先端の圧痕著	21	
42	65	S102	土師器	甕	—	—	(5,0)	[2,6]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	[に]赤褐	縦位ヘラケズリ	縦位ヘラナデ		49
42	66	S102	土師器	台付甕	11.2	—	[13,1]	石英・白色粒 ・白色粒	赤褐	口縁部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ後、横位 ヘラケズリ	口縁部模ナデ、 胴部模位ヘラナデ	脚部欠失、武藏型	60	
42	67	S102	土師器	台付甕	(12.0)	—	[3,1]	石英・白色粒 ・白色粒	赤褐	口縫部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ、 相赤	横ナデ	武藏型	39	
42	68	S102	土師器	台付甕	(7,2)	—	[7,3]	石英・角閃石 ・白色粒・黑 色粒	赤褐	口縫部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ	口縫部模ナデ、 胴部模位ヘラナデ		17	
42	69	S102	土師器	台付甕	(14.8)	—	[7,2]	石英・白色粒	[に]赤褐	口縫部模ナデ、胴部模 位ヘラケズリ	口縫部模ナデ、 胴部模位ヘラナデ		64	
42	70	S102	土師器	台付甕	—	(8,4)	[21,2]	石英・白色粒 ・黒色粒	明赤褐	脚部模位ヘラケズリ、 脚部模ナデ	脚部模位・斜化ヘラナデ ・脚部模ナデ		62	
42	71	S102	土師器	台付甕	—	9.2	[3,3]	石英・青苔 ・白色粒	明赤褐	横ナデ	脚部内面ヘラナデ ・脚部内面横ナデ		11	
42	72	S102	土師器	甕	—	(15,0)	[13,4]	石英・長石・ チャート・黑 色粒	[に]赤褐	横位ヘラケズリ後、斜 位ヘラケズリ	横位ヘラケズリ後 下脚部ヘラナデ	筒抜け式	24	
42	73	S102	土師器	甕	—	(11,0)	[5,7]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	[に]赤褐	斜位ヘラケズリ	斜位ヘラナデ ・下脚部模位ヘラケズリ	筒抜け式	39	
42	74	S102	須恵器	环	(12.0)	6.0	3.9	石英・白色粒 ・黒色粒	灰灰	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	末野産	1	
42	75	S102	須恵器	环	(12.0)	(6,6)	3.7	長石・白色粒 ・海綿骨針	灰	口縫部玉締合、回転ナ デ、底部回転糸切り後 無調整	回転ナデ	南北企産 S102グリッド遺物と SK34点上げ遺物が複 合	58	
42	76	S102	須恵器	环	(12.0)	(6,0)	3.9	白色粒・黄色 粒・海綿骨針 (多量)	黃褐	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	4	
43	77	S102	須恵器	环	11.5	5.6	4.3	長石・白色粒 ・海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	52	
43	78	S102	須恵器	环	(11,0)	(4,6)	4.0	黑色粒・白色 粒	褐灰	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	東金子産か	18	
43	79	S102	須恵器	环	(13,0)	(5,0)	4.3	白色粒・白色 粒・赤褐色粒 (多量)	[に]赤褐	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	内外面薄く煤ける、 三和産か	47	
43	80	S102	須恵器	环	(12,0)	(6,0)	3.7	白色粒・白色 粒・海綿骨針	褐灰	回転ナデ、底部回転糸 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	13	

第6表 遺物觀察表（土器・陶磁器等）

回収番号	遺物名	種類	形態	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調整・施文 (外面)	調整・施文 (内面)	備考	実測 番号
43 81	S102	須恵器	环	(13.8)	(7.2)	5.2	長石・白色粒 ・海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	53	
43 82	S102	須恵器	环	(12.0)	—	[3.2]	石英・黒色粒 ・白色粒	灰	口縁部強く外反、回転 ナデ	回転ナデ	三和産か	41	
43 83	S102	須恵器	环	—	(8.0)	[2.2]	チャート・白 色粒・海綿骨 針	黄灰	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	10	
43 84	S102	須恵器	环	—	5.8	[1.2]	長石・白色粒 ・海綿骨針	灰白	底部回転系切り後周辺 手持りヘラケズリ	回転ナデ	南北企産	16	
43 85	S102	須恵器	高台付 环	—	7.6	[3.9]	長石・チャート ・白色粒・ ・黒色粒	褐灰	回転ナデ、底部回転系 切り後高台貼付	回転ナデ	東金子産	9	
43 86	S102	須恵器	高台付 环	—	(6.6)	[1.7]	長石・白色粒	灰	回転ナデ、底部回転系 切り後高台貼付	回転ナデ、内底面に回 転系切り痕が残る	東金子産	3	
43 87	S102	須恵器	盖	(9.8)	—	[1.7]	石英・青母(多 量)・黒色粒	灰白	回転ナデ	回転ナデ	新治産	48	
43 88	S102	須恵器	壺	(24.0)	—	[5.6]	長石・白色粒 ・黒色粒・海 綿骨針	黄灰	回転ナデ	回転ナデ	南北企産	25	
43 89	S102	須恵器	壺	—	—	[2.9]	石英・青母(多 量)・黒色粒	灰	回転ナデ後、平行タタ キ	回転ナデ	新治産	50	
43 90	S102	須恵器	壺	—	—	[7.2]	石英・長石・ 白色粒	灰	回転ナデ、一部ハケ状 工具によるナド	回転ナデ	東金子産	32	
43 91	S102	須恵器	長颈瓶	—	—	[3.6]	長石・白色粒 ・海綿骨針	黄灰	回転ナデ、頸部貼付	回転ナデ	南北企産	40	
44 92	S102	須恵器	長颈瓶	—	—	[11.7]	白色粒・長石	灰	回転ナデ、肩部に自然 跡	回転ナデ	東金子産	36	
44 93	S102	須恵器	長颈瓶	—	—	[8.1]	長石・白色粒	黑	回転ナデ、全周自然跡	ハケナデ	未野産	38	
44 94	S102	須恵器	長颈瓶	—	(9.2)	[2.5]	長石・白色粒 ・赤褐色粒	灰	回転ナデ、底部静止系 切りか、高台付	回転ナデ 内底面外縁ナデ	未野産	34	
44 95	S102	灰釉 陶器	高台付 环	—	(6.6)	[2.0]	白色粒・黑色 粒	灰白	回転ナデ、底部回転系 切り後高台貼付	回転ナデ、内面施跡、 高台接合部分無	三日月高台、猪股産	56	
44 96	S102	灰釉 陶器	壺	—	(12.6)	[8.9]	白色粒・黑色 粒	灰白	回転ナデ、底部回転系 切り後高台貼付、灰白	回転ナデ 内底面の肩頸圧痕著	猪股産	55	
45 99	SK02	口クロ 土師器	环	—	(5.6)	[2.4]	白色粒・黑色 粒	淡黄	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	—	105	
45 100	SK02	須恵器	环	(13.6)	—	[2.8]	白色粒・赤褐色 粒	にぶい椎	回転ナデ	回転ナデ	产地不明	106	
45 101	SK02	須恵器	环	(12.8)	—	[3.1]	長石・白色粒 ・黒色粒	褐灰	回転ナデ	回転ナデ	产地不明	133	
45 102	SK02	須恵器	壺	(28.0)	—	[8.0]	長石・白色粒 ・海綿骨針	褐灰	回転ナデ、自然頸	回転ナデ	南北企産	101	
45 103	SK02	灰釉 陶器	壺	(15.0)	—	[2.2]	白色粒・黑色 粒	褐灰	回転ナデ、薄い施跡	回転ナデ、施跡	—	102	
45 104	SK02	灰釉 陶器	長颈壺	(6.8)	—	[2.6]	白色粒・黑色 粒	褐灰	回転ナデ、施跡	回転ナデ、施跡	—	132	
45 105	SK02	静神 陶器	皿	—	—	[1.7]	白色粒	淡黄	回転ナデ、縫隙	回転ナデ、縫隙	—	134	
45 106	SK02	磁器	碗	—	(1.6)	[2.2]	鐵赤・灰白	灰白	高台内面縫隙、ケズリ高 台、餘付(被定型陶器)	透明窓	肥前1700~1780年代	104	
45 107	SK02	陶器	埴利	—	(8.0)	[1.7]	白色粒・黑色 粒	褐灰、浅黃褐 にぶい黄褐	回転ナデ、上部に鉢輪	回転ナデ	—	103	
45 110	SK03	口クロ 土師器	环	(10.6)	(6.0)	3.0	白色粒・黑色 粒	にぶい椎	回転ナデ、体部下端へ カケズリ、底部回転系 切り後邊面ヘラケズリ	回転ナデ	—	154	
46 111	SK03	口クロ 土師器	环	—	—	[2.5]	白色粒・黑色 粒	にぶい椎	回転ナデ	回転ナデ	体部外周中位に墨書 (文字不明)	166	
46 112	SK03	口クロ 土師器	环	—	(6.6)	[2.2]	黑色粒・黃褐色 ・赤褐色 粒	椎	回転ナデ、底部回転系 切り後全面回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	—	147	
46 113	SK03	口クロ 土師器	环	—	6.3	[2.0]	石英・白色粒 ・兩色粒	褐灰 にぶい椎	回転ナデ、体部下端ヘ カケズリ、底部回転系 切り後全面回転ヘラケ ズリ	回転ナデ	—	148	

第7表 遺物観察表(土器・陶磁器等)

回復 番号	通鑑番号	種別	回転 環	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	土色	色調 上表面 下表面	調査・施文 (外観)	調査・施文 (内面)	備考	実測 番号	
46	114	SK03	ロクロ 土師器	环	—	6.9	[1, 5]	石墨・白色粒 ・褐色粒	灰褐色	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ。底部回転舟 切り後周辺ハラケズリ	回転ナデ	底面に墨書 (文字不明)	151
46	115	SK03	ロクロ 土師器	环	—	(6, 8)	[1, 0]	石墨・長石・ 白色粒・黑色 粒	にぶい黄褐色	底部下端ハラケズリ。 底部全面手持ちラケ ズリ	回転ナデ		152
46	116	SK03	ロクロ 土師器	环	—	—	[2, 9]	白色粒・黑色 粒・褐色粒	にぶい黄褐色	回転ナデ	ロクロ目調査。ミガキ 状の強い横ナデ。黒色 処理		158
46	117	SK03	ロクロ 土師器	环	—	4.8	[1, 2]	白色粒・黑色 粒	黑褐色	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	ミガキ。黒色処理		143
46	118	SK03	ロクロ 高台付 皿	(14, 6)	—	—	[1, 9]	石墨・白色粒 ・赤褐色粒	褐色	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ。底部切り離 し後高台貼付	回転ナデ		208
46	119	SK03	ロクロ 高台付 皿	—	(5, 8)	[1, 6]	—	白色粒・黑色 粒・褐色粒	褐色	回転ナデ、底部切り離 し後高台貼付	粗いミガキ		139
46	120	SK03	土師器	機	(17, 6)	—	[6, 1]	金雲母・角閃 石・白色粒 ・褐色粒	褐色	口縫部横ナデ、崩部強 い機位ハラケズリ	口縫部横ナデ	武藏型	156
46	121	SK03	土師器	機	(18, 2)	—	[3, 9]	白色粒・黑色 粒・褐色粒	にぶい褐色	口縫部横ナデ、崩部強 い位置ハラケズリ	口縫部横ナデ	常縦型	148
46	122	SK03	土師器	機	—	—	[3, 1]	石墨・白色粒 ・黑色粒	にぶい黄褐色	口縫部横ナデ、口縫一 頭部に腹位のタキ目	横ナデ	常縦型	136
46	123	SK03	土師器	機	(21, 0)	—	[2, 4]	白色粒・黑色 粒・褐色粒	にぶい褐色	横ナデ、折り返し口縫 浅黃褐色	横ナデ	产地不明	155
46	124	SK03	土師器	機	—	—	[13, 5]	石墨・白色粒 ・赤褐色粒	にぶい黄褐色	上部は腹位のヘラナデ ・下部は斜位のヘラナ デ。三日月状の工具痕 がよくみられる	上部は横位のヘラナデ ・下部は斜位のヘラナ デ。三日月状の工具痕 がよくみられる	产地不明 崩部破片上方に穿孔	138
46	125	SK03	須恵器	环	(13, 5)	(6, 2)	6.0	白色粒・黑色 粒・海綿骨針	灰白	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	141
46	126	SK03	須恵器	环	(13, 6)	—	4.9	長石・黑色粒	暗灰黃褐色	回転ナデ、腹面の丸荒 頭著	回転ナデ		175
46	127	SK03	須恵器	环	—	(6, 6)	[3, 0]	長石・白色粒 ・海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	159
46	128	SK03	須恵器	环	—	(5, 6)	[1, 8]	白色粒・黑色 粒	灰黃褐色	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ		142
47	129	SK03	須恵器	环	—	(6, 0)	[1, 6]	チャート・白 色粒・海綿骨 針	灰	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	151
47	130	SK03	須恵器	機	—	—	[14, 7]	飛石・チャー ト・白色粒・黑 色粒・海綿骨 針	灰	平行タキ・自然 形	回転ナデ 円形当て具痕	南北企産	159
47	131	SK03	須恵器	機	—	—	[7, 8]	飛石・白色粒 ・黑色粒	にぶい黃褐色	回転ナデ、ナデは短い、 把手は粗いハラケズリ	回転ナデ 上部に指押圧		153
47	132	SK03	須恵器	機	—	(28, 0)	[9, 4]	白色粒・チャー ト・黑色粒	褐色	回転ナデ、底部強機位 ハラケズリ	回転ナデ、底部強機位 ハラケズリ	回転ナデ、底部強機位 ハラケズリ。2.5時間 に掛けて8mm、深さ1.0 mmの貫孔	149
47	133	SK03	灰釉 陶器	長頸壺	—	—	[3, 6]	白色粒・黑色 粒	にぶい黄褐色	回転ナデ、上端に施跡	回転ナデ、全面に施跡		140
47	134	SK03	灰釉 陶器	長頸壺	—	—	[3, 9]	白色粒・黑色 粒	灰黃褐色	回転ナデ、施跡	回転ナデ		145
47	135	SK03	灰釉 陶器	長頸壺	—	—	[6, 4]	白色粒	灰黃褐色	回転ナデ、底部横幅ハ ラケズリ。施跡	回転ナデ		137
48	137	SK04	ロクロ 土師器	环	—	—	[2, 7]	白色粒・黑色 粒	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ	体部外側に墨書 (文字不明)	162
49	138	SK11	ロクロ 土師器	环	—	(6, 8)	[2, 2]	石墨・白色粒 ・褐色粒	にぶい黄褐色	回転ナデ、底部下端ハ ラケズリ。底部回転舟 切り後周辺ハラケズリ	回転ナデ		165
49	139	SK11	須恵器	环	—	5.6	[1, 4]	飛石・チャー ト・白色粒・ 海綿骨針	明黃褐色	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ	南北企産	163
49	140	SK11	須恵器	环	—	(6, 8)	[1, 5]	飛石・白色粒 ・褐色粒・海 綿骨針	褐色	回転ナデ、底部回転舟 切り後無調整	回転ナデ	南北企産 底部にヘラ記号	164
50	141	SK12	ロクロ 土師器	环	—	(6, 4)	[2, 1]	白色粒・黑色 粒	にぶい黄褐色	回転ナデ、底部下端手 持ハラケズリ、底部 切り離しハラケズリ	回転ナデ		166

第8表 遺物觀察表（土器・陶磁器等）

回収番号	遺物名	種類名	組種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上部面 下部面	調整・施文 (外側)	調整・施文 (内側)	備考	実測 番号
50	142	SK12	口クロ 土師器	高台付 皿	—	(7.0)	[1.1]	白色粒・黑色 粒	にふい槽	回転ナデ、底部回転系 切り後高台胎付	ミガキ	内面磨滅	167
51	143	SK34	口クロ 土師器	坪	(11.8)	(7.0)	[4.1]	石英・長石・ チャート・赤 褐色粒	にふい槽	回転ナデ、底部下端へ ラケズリ、底部回転系 切り後全周面ちば ケズリ	回転ナデ		128
51	144	SK34	口クロ 土師器	坪	(18.4)	—	[5.7]	白色粒・黑色 粒・赤褐色粒	根	回転ナデ、底部下端へ ラケズリ	ミガキ、黒色処理		123
51	145	SK34	口クロ 土師器	坪	—	(6.6)	[2.6]	石英・白色粒 ・黑色粒	根	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	ミガキ		117
51	146	SK34	口クロ 土師器	皿	—	5.6	[1.1]	石英・角閃石・ 白色粒・黑色 粒	にふい槽	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	内外面保付着	138
51	147	SK34	口クロ 土師器	皿	—	5.5	[0.9]	角閃石・長石・ 白色粒・黑色 粒	にふい黄褐色	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	ミガキ、黒色処理		204
51	148	SK34	口クロ 土師器	高台付 皿	(12.6)	6.4	[2.7]	白色粒・黑色 粒・赤褐色粒	明暗窓	回転ナデ、底部下端へ ラケズリ	ミガキ、黒色処理	口縁へ体部大きさ至 心	118
51	149	SK34	口クロ 土師器	高台付 皿	(12.1)	5.8	[2.6]	石英・雪母・ 褐色粒・赤褐色 粒	にふい槽	回転ナデ、底部回転系 切り後高台胎付	回転ナデ	体部裏面から高台に かけ墨書き (文字不明)	131
51	150	SK34	口クロ 土師器	高台付 皿	(12.0)	(7.5)	2.2	石英・チャート・ 白色粒・赤褐色 粒	にふい根	回転ナデ、底部回転系 切り・台状高台 黒褐	黒色処理		129
51	151	SK34	口クロ 土師器	高台付 皿	(14.4)	—	[1.9]	白色粒・赤褐色 粒	撥離鶴 撥離鶴	回転ナデ、底部下端へ ラケズリ	ミガキ、黒色処理	高台欠損	119
52	152	SK34	土師器	台付盤	(12.0)	—	[5.5]	石英・白色粒 ・赤褐色粒	明暗窓	口縁部横ナデ、腹部横 位へラケズリ、颈部に 連続する指印痕	口縁部横ナデ 腹部横位へラナデ	口縁部内面と外縁保 ける。武威型	116
52	153	SK34	土師器	台付盤	—	(9.4)	[2.6]	石英・角閃石・ 白色粒	明暗	横ナデ、下端部は面取 り状	横ナデ		126
52	154	SK34	土師器	盤	—	—	[6.0]	石英・白色粒 ・黑色粒	にふい槽	横ナデ、胸部腹頭圧痕 ・西縁台脚の把手狀 粘土附付、開口を回む よう△形維持施加	口縁部横ナデ、腹部横 位へラナデ、輪頭圧痕		124
52	155	SK34	須恵器	坪	(12.8)	(6.2)	3.8	チャート・長 石・白色粒・ 海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	南北企座	122
52	156	SK34	須恵器	坪	(12.8)	(6.0)	4.6	白色粒・小溝	灰白	回転ナデ、底部下端へ ラケズリ、底部回転系 切り後ラケズリ	回転ナデ	口クロ口顯著 東金子産か	125
52	157	SK34	須恵器	坪	(14.0)	(6.8)	3.7	長石・白色粒・ 海綿骨針	灰黃	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	南北企座	107
52	158	SK34	須恵器	坪	—	(6.0)	[1.2]	チャート・白 色粒・黑色粒・ 海綿骨針	灰黃	回転ナデ、底部回転系 切り後高台へラケズリ	回転ナデ	南北企座	205
52	159	SK34	須恵器	坪	—	6.0	[2.3]	白色粒・黑色 粒・海綿骨針	褐	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	底面にへラ記号 「」、南北企座	112
52	160	SK34	須恵器	坪	—	6.4	[1.6]	長石・白色粒・ 海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	底面にへラ記号(文 字不明)、南北企座	121
52	161	SK34	須恵器	坪	—	6.0	[0.8]	長石・チャート・ 海綿骨針	褐	回転ナデ、底部回転系 切り後無調整	回転ナデ	南北企座	127
52	162	SK34	須恵器	蓋	—	[2.1]	長石・白色粒・ 海綿骨針	灰	回転ナデ、天井部回転 へラケズリ、ボタン状 貼付	回転ナデ	底径2.6mm 南北企座	109	
52	163	SK34	須恵器	鉢	—	—	[5.4]	白色粒・黑色 粒	口縁部横ナデ、体部横 位のタタキ	口縁部横ナデ 体部横位へラナデ		115	
52	164	SK34	須恵器	焼	—	—	[10.7]	白色粒・黑色 粒	灰	回転ナデ、自然糊	回転ナデ、自然糊	東金子産か	113
53	165	SK34	須恵器	焼	—	(15.0)	[3.4]	長石・白色粒・ 黑色粒・海 綿骨針	灰 白	回転ナデ、胸部下端横 ナデ、底面に3cm、5cm の高台状の高まりを持 つ	回転ナデ	南北企座	111
53	166	SK34	須恵器	長頸壺	—	—	[5.2]	白色粒・黑色 粒・褐色粒	褐灰 灰	回転ナデ、自然糊	回転ナデ、自然糊	未野産	128
53	167	SK34	須恵器	壺	—	8.6	[6.8]	白色粒・黑色 粒	オーリーブ青 灰黃褐	回転ナデ、自然糊多量 内底面に自然糊	回転ナデ	東金子産	114
53	168	SK34	須恵器	瓶	—	—	[5.1]	石英・白色粒	灰白	回転ナデ後、斜面へラ ナデ	回転ナデ後下端横ナ デ		108

第9表 遺物観察表(土器・陶器等)

固有 通号	通号	種別	回転	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	色調	上外面 下内面	調査・施主 (当主)	調査・施主 (内蔵)	備考	実測 番号
54	169	S001	土師器	甕	—	—	[4.4]	黒色粒・赤褐色	にぶい黄褐色	口縁部端ナデ、脚部横位ナデケズリ、一部強いヘラケズリ	口縁部横ナデ、脚部横位ハナナデ	武藏型	172
54	170	S001	灰釉 胸腰	塊	(13.0)	(7.0)	3,7	白色粒・黑色粒	灰オリーブ	回転ナデ、底部切欠基部付・高台貼付、薄く施釉	回転ナデ、施釉		169
54	171	S001	磁器	碗	—	(4.4)	[2.0]	緻密・黒色粒	明暎灰	削り夷台、脚部に染付	透明釉	くらわんか手碗、肥前1700~1730年代	170
54	172	S001	磁器	香炉	—	—	[1.5]	緻密・灰白色	灰白	染付(文様不明)、透明白	透明釉	肥前 近世	172
54	173	S001	陶器	移利	2.9	—	[3.7]	緻密・灰白色	灰黄	クロコ形、鉄輪、うのふ輪流しがけ	うのふ輪	棚戸・美濃1690~1700年代	171
55	175	P03	陶器	移利	—	—	[2.0]	黒色粒・灰色粒	褐	ロクロ形、鉄輪	無輪	棚戸・美濃1800~1830年代	176
56	176	包含層	須恵器	环	(15.3)	—	[4.2]	石萬・黑色粒・海綿骨針	にぶい橙	回転ナデ、部体下端へラスリ	回転ナデ	南北企産	179
56	177	包含層	ロクロ 土師器	环	—	—	[1.9]	黑色粒・赤色粒	にぶい黄褐色	回転ナデ	回転ナデ	体部中央に墨書(文字不明)	186
56	178	包含層	ロクロ 土師器	ミニチュア 土器	—	(2.4)	[1.1]	白色粒・褐色粒	橙	横ナデ、底部回転柔切り後無調整	横ナデ	环	203
56	179	包含層	須恵器	环	(11.6)	6.0	3.5	良石・白色粒・黑色粒・海綿骨針	灰	回転ナデ、底部回転柔切り後無調整	回転ナデ	南北企産	181
56	180	包含層	須恵器	环	—	—	0.6	黑色粒・白色粒・海綿骨針	にぶい黄褐色	底部回転柔切り後無調整	回転ナデ	底面にヘラ記号、南北企産	177
56	181	包含層	磁器	碗	—	(4.1)	[4.9]	緻密・黒色粒	灰白色	ロクロ形、削り高台、移付(文様不明)、透明釉、高台無輪	透明釉	肥前1650~1670年代	178
56	182	包含層	陶器	壺	—	—	[3.9]	黑色粒・白色粒	浅黄	ロクロ形、其貼付、脚部内側から外側にかけて鉄輪、口唇部隠抵抗取り	棚戸・美濃1630~1700年代		180
57	187	瓶	ロクロ 土師器	环	—	(6.4)	[1.8]	白色粒・黑色粒・褐色粒	にぶい褐	回転ナデ、底部回転柔切り後無調整	回転ナデ		191
57	188	瓶	ロクロ 土師器	高台付 环	—	(7.0)	[2.0]	白色粒・赤褐色・海綿骨針	にぶい褐	回転ナデ、底部回転柔切り後高台貼付	ミガキ。黒色処理		189
57	189	瓶	土師器	自付壺	—	—	[3.1]	石萬・角閃石・白色粒	にぶい赤褐色	ナデ	ナデ、指編圧痕		188
57	190	瓶	須恵器	壺	(16.0)	—	[4.6]	長石・チャート・白色粒	褐灰	回転ナデ、底部回転柔切り後無調整	回転ナデ	東金子産か	202
57	191	瓶	須恵器	环	—	(5.2)	[2.5]	白色粒・黑色粒・海綿骨針	褐灰	回転ナデ、底部回転柔切り後無調整	回転ナデ	南北企産	190
58	192	E11-21	ロクロ 土師器	环	—	—	[2.3]	白色粒・黑色粒・褐色粒	浅黄褐	回転ナデ	体部外面に墨書(文字不明)		200
58	193	E11-14	ロクロ 土師器	高台付 环	—	(6.0)	[1.9]	石萬・黑色粒・白色粒・褐色粒	にぶい褐	回転ナデ、底部回転柔切り後高台貼付	回転ナデ		187
58	194	S10-10	土師器	甕	—	(16.0)	[1.8]	金雲母・石萬・長石・黑色粒	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	常陸産か	194
58	195	E11-14	須恵器	环	—	—	[1.5]	白色粒・黑色粒・海綿骨針	灰黄	回転ナデ	体部外面に墨書(文字不明)、南北企産、内面煤ける		197
58	196	S10-25	磁器	碗	—	(18.6)	[1.5]	緻密・灰白色	灰白	ロクロ形、ケズリ高台、透明釉、見込み縫隙内丸文、高台脇二重縫隙、外側染付(文様不明)	見込み縫隙内丸文 透明釉	肥前1690~1740年代	195
58	197	S10-10	瓦質 土器	火消し 壺蓋	—	—	[3.0]	白色粒・黑色粒・褐色粒	橙	ハケによるナデ	ナデ		193
58	198	磁器	磁器	碗	(11.4)	(4.6)	[6.6]	緻密・灰白色	灰白色	ケズリ高台、染付、透明釉、松御賀干弧文	見込双縫梗文、透明釉	肥前1810~1820年代	201

第10表 遺物觀察表（土製品等）

固有 番号	遺物 番号	遺物名	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	胎土	色調 上表面 下内面	備考	実測 番号
44	97	S102	支脚	[5.6]	4.2	3.0	50.9	黄褐色粒・黒 色粒	にぶい 橙 にぶい 橙	表面斜面ハラケズリ。底部ヘラナデ、底部破片	46
45	108	SK02	面部	2.6	2.0	0.6	3.1	砂粒	橙色	力士と思われる人面をモチーフとした齐子面	100
47	136	SK03	土雞	[4.2]	1.6	1.6	9.2	白色粒・黒色 粒・褐色粒	にぶい 橙 にぶい 橙	下端部欠損。外側ナデ、中心に幅6mmの穿孔	144
58	198	R11-16	土器片	2.3	2.5	0.7	4.5	角閃石・白色 粒・黒色粒	橙 にぶい 黄橙	焼物の底面を打ち欠き、円形に加工。メンコとして転用か	199

第11表 遺物觀察表（石製品）

固有 番号	遺物 番号	遺物名	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
44	98	S102	砾石	[7.0]	5.4	7.0	94.8	上下端部欠損。上位中央付近に1か所穿孔。表面左右面に擦痕、全面保てる。携帯用砾石か。凝灰岩	31

第12表 遺物觀察表（金属製品）

固有 番号	遺物 番号	遺物名	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
39	34	SK01	釘	5.8	1.1	0.5	3.8	逆三角形、幅約1.0cmの釘頭をもつ。断面方形	67
39	25	SK01	釘	8.0	1.3	1.2	13.6	5mmの棒状、下端に向かってやや細くなる、断面方形	68
45	109	SK02	不明	[4.4]	[0.4]	[1.5]	4.9	両方形で、ほぼ平坦。左側縁と下端部欠損	135
54	174	SK01	煙管	4.2	1.1	1.1	5.8	雁首部破片。火皿欠損。鋼製。小口径径8mm、18c後半	174
56	184	包含層	釘	3.1	0.8	0.5	1.8	頭部、軸断面は方形	183
56	185	包含層	釘	4.1	0.7	4.1	2.3	先端に向かって細くなる、断面方形	184
56	186	包含層	結婚車 の輪	17.6	0.7	0.6	17.8	上端湾曲。以下は弱い弓なり状、断面は円形	185

第13表 遺物觀察表（錢貨）

固有 番号	遺物 番号	遺物名	種類	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
56	183	包含層	錢貨	2.3	2.3	0.1	2.0	聖宋元宝(きおひけんぽう)開鑄1068年～	182

IV 総括

調査の成果

海道西遺跡は元荒川の左岸、大林河畔砂丘上に立地している（第59図）。今回の調査では竪穴住居跡2軒、火葬土坑1基、土坑32基、溝1条、小穴5基を検出した。遺構は住居跡2軒が平安時代のものと比定され、その他は出土遺物等より平安時代、中世、近世、時期不詳のものに分けられる。本章では、主な遺構である2軒の住居跡を中心に出土遺物についてまとめ、周辺の遺跡の調査例を交えながら、古代における海道西遺跡の様相解明についての検討材料としたい。

1. 住居跡出土遺物の産地組成と地域交流

今回の調査では2軒の住居跡が検出された（SK01, S102）。出土した遺物は、須恵器や土器をはじめ、施釉陶器、磁器、陶器、土器（焰烙・支脚）、石製品、鉄製品、礫と多岐にわたるが、ここでは搬入された須恵器の産地組成について検証し、古代における流通や地域交易圏について考察することとする。

武藏国と下総国の国境付近に位置し、また元荒川左岸の河畔砂丘上に営まれた海道西遺跡へと須恵器を供給する窯跡として、第60図に示した東国の大須恵器生産窯跡が挙げられる。今回出土した遺物から生産窯が明らかであるものは、埼玉県の比企郡鳩山町南比企窯跡群、大里郡寄居町末野窯跡群、入間市東金子窯跡群の3か所、茨城県のつくば市新治窯跡群、古河市三和窯跡群の2か所で計5か所である。また、生産窯は明らかではないが下総地域の特徴を有する一群や利根川流域の河川堆積物を原土とした製品も検出されている。

各住居跡について見ると、SK01からは159点の須恵器が出土しており、住居内出土遺物の中で占める須恵器の割合を破片数で算出すると14.9%である。出土須恵器の産地組成は、南比企産が53.4%、末野産が13.8%、東金子産が25.8%、新治産が1.3%、三和産が1.3%、下総地域の特徴を有するものが4.4%となっており、武藏国内の窯跡の中でも南比企窯跡群と東金子窯跡群が供給主体となっていることが分かる。また、第39図27は鳩山編年におけるVI期、9世紀第I～II四半世紀の所産であると思われ、第39図28はVII期、第39図26はIX期と幅広い年代が比定されるが、全体としては9世紀第II～IV四半世紀の遺物が主に出土しているため、本住居跡の帰属年代は9世紀中葉～後半、或いは10世紀初頭までと考えられる。

S102からは255点の須恵器が出土しており、住居内出土遺物の中で占める須恵器の割合を破片数で算出すると15.5%である。出土須恵器の産地組成は、南比企産が62.3%、末野産が13.3%、東金子産が17.3%、新治産が0.8%、三和産が1.6%、下総地域の特徴を有するものが3.9%。利根川流域の製品が0.8%となっており、多少の差があるものの、SK01同様南比企窯跡群と東金子窯跡群を主体とした供給が行われていたことが分かる。また、須恵器壺の器形や、口径と内底径からみた口径／内底径比率から見ると、鳩山編年におけるVII期～IX期、9世紀第II四半世紀～第IV四半世紀の製品が主となっている（第42図74・76、第43図80・83等）が、第43図79のような9世紀末～10世紀初頭と思われる遺物も散見されるため、本住居跡の帰属時期はSK01同様9世紀後半～10世紀初頭であると考えたい。

本遺跡はかつての利根川流路に沿って形成された河畔砂丘の一つである大林河畔砂丘上に位置する遺跡であるが、同様にかつての利根川流路、現在の古利根川流域や古隅田川流域の自然堤防上に立地し、9世紀代に集落が営まれていたとされる遺跡として、春日部市浜川戸遺跡や小渕山下北遺跡、八木崎遺跡が挙げられる。各遺跡の出土須恵器の産地組成についてまとめると、浜川戸遺跡（註1）では、9世紀中葉から南比企、東金子、三和窯跡群からの供給を受けており、9世紀後半になると南比企、東金子窯跡群が供給量を増加させるが、三和窯跡群からも少なからず供給を受けている。小渕山下北遺跡（註2）では、9世紀中葉に南比企窯跡群と新治窯跡群からの供給が主で、三和窯跡群や末野窯跡群の製品

が客的に伴う。八木崎遺跡（註3）では、9世紀後半～末にかけて南比企窯跡群と東金子窯跡群が供給主体となり、その他に下総地域や末野・新治・三和窯跡群の製品が伴っている。

これらの遺跡における出土須恵器の産地組成の特徴に共通する背景として、武藏国と下総国の両国境を流下した古利根川や古隅田川が交錯する交通の要衝に立地しており、陸上交通だけでなく河川交通を用いた多方面からの供給ルートを持っていたため、武藏・常陸・下総地域といった東国各地の窯跡群から須恵器が搬入されたが、武藏国で9世紀に入り活発に操業を展開した窯跡へと供給主体の転換が行われた、ということが挙げられる。本遺跡についても、元荒川左岸に立地し、かつての荒川と利根川の交錯地点からそう遠くない場所に位置している点や、南比企産の製品が出土須恵器における多数の割合を占めつつも、新治窯跡群、三和窯跡群、下総地域の製品が検出される点から、先に述べた春日部市の遺跡群との共通性を見出すことができる。また、浜川戸遺跡において、「近隣における古代の遺跡分布は遺跡規模の大小はあるものの河川の要衝ごとに点在している様相にあり、つまりは、島状に点在した集落が河川によって結びつけられ、1つの郡として体裁が保たれていたという立地景観が復元されている」とされていることから（註4）、浜川戸遺跡同様に、海道西遺跡もこの郡に含まれる1つの集落であったと考えられよう。

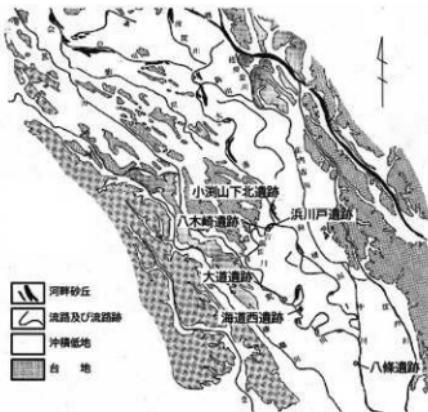
つまり、古代において海道西遺跡は、陸上交通だけでなく河川を利用して武藏国や常陸・下総地域との交流を持った集落であり、かつての荒川や利根川といった河川の要衝に点在する他の集落との交流が積極的に行われていたと推測できる。なお、出土須恵器の産地組成から考えると、本遺跡は南比企窯跡群と東金子窯跡群の製品の割合が多く、新治・三和窯跡群の製品が少ないという特徴があり、同じような特徴を有する遺跡として先述の八木崎遺跡や八潮市八條遺跡（註5）が挙げられる。本遺跡や八木崎遺跡、八條遺跡が9世紀段階において武藏国地域からの供給を主体としているのに対し、浜川戸遺跡や小渕山下北遺跡においては9世紀段階においても常陸・下総地域から安定した供給が行われているという差異が認められる。

このように近隣の遺跡間において産地組成が異なる様相を呈する背景としては、古利根川等河川の氾濫による自然流路の発達及び砂丘の形成といった自然的要因により、集落間における交流の停滞が引き起こされた結果、各集落の立地状況等によりその供給元が大きく異なる様相を呈するようになったと考察されている（註6）。この事を踏まえ本遺跡について考えると、南比企窯跡群や東金子窯跡群の製品が多く搬入され、新治・三和窯跡群からの供給が少ないと、また、本遺跡の南に位置している八條遺跡と出土須恵器の様相を同じくすること、下総地域の特徴を有する須恵器が検出されること等から、武藏国・下総地域との交流を認めることができるが、常陸地域との結びつきは弱かったと考えられる。これを、古利根川等の氾濫により常陸地域との交流が途絶えた結果だというのはあまりにも浅慮な考え方であるが、本遺跡における出土須恵器の様相は、北東側に位置する常陸地域よりも西と南西側に位置する武藏国・下総地域との交流が都合がよかったことを示していると考えられ、そこに何らかの地理的制約の存在を窺わせるものであるといえよう。ただ、本調査で検出された住居跡は僅か2軒であり、出土須恵器についても決して多いとは言えず、あくまでも表層的な考察にすぎない。今後さらに資料を蓄積し、かつての利根川流域における集落、ひいては地域的な差異とそれを取り巻く自然環境との因果関係について検討を進める必要があると考える。

2. 調査区出土土師器について

今回の調査では須恵器、施釉陶器よりも土師器が顕著に出土した。特にロクロ成形の食膳具であるロクロ土師器が多数を占め、その数は須恵器や施釉陶器よりも多い。さらに、ロクロ土師器のバリエーションも多く、その多様性が海道西遺跡の特徴ともいえるのではないかと思わせるほどである。

そこで、2軒の住居跡（SK01・SI02）、及び1基の土坑（SK34）の資料をもとにロクロ土師器の様相を示したい。なお、分析には底部と体部の調整技法を主眼とした。各構造の須恵器壊形土器からの年代



平社・佐藤（1993）、平社ほか（1994）の図に一部加筆修正を加え作成

第59図 河畔砂丘の分布及び周辺地形図

を大まかに示すと、SK01は底部破片のみで時期は難しいが、第39図26が内定径5.0cmで9世紀末から10世紀前半（IX～X期）。S102は第42図75が口径内定径比率57%でVI期（9世紀第I四半世紀）、74、76が47%、第43図77が49%でVII期（9世紀第III四半世紀）であり、個体数の多いVII期が妥当と思われる。SK34は、第52図156、157が50%でVII期（9世紀第II四半世紀後半）と考えられ、須恵器の年代を根拠とするならばSK34→S102→SK01という変遷を示しておきたい。

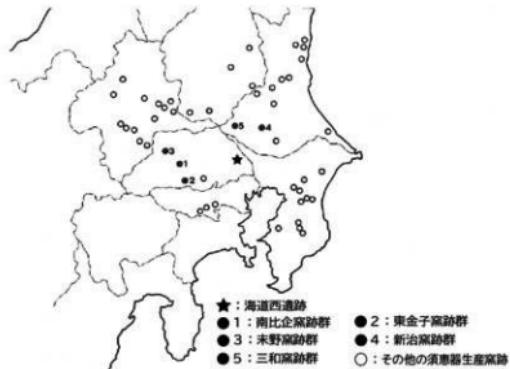
この年代的な推移をロクロ土師器の器種で補うならば、SK34の高台付皿形土器（第51図148）は須恵器の高台付皿形土器を模倣している。須恵器の高台付皿形土器はVII期には確実に存在する器形である。また、SK01の高台付壺形土器（第37図12、第38図13・14）はロクロ土師器の最終末に出現する器形とされていることから、SK01は10世紀前半以降の可能性を示唆しておく。

さて、出土したロクロ土師器であるが、SK01では15点のロクロ土師器を図化し、内6点に黒色処理が施されている。無彩の底部の切り離しは第37図1・5・6・7が回転糸切り無調整、2・4が周辺ヘラケズリ（手持ち・回転）である。3は回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ、及び体部下端ヘラケズリを行っている。黒色処理では、第37図9が回転糸切り無調整、10が回転糸切り後周辺回転ヘラケズリ、及び体部下端ヘラケズリ、8が全面回転ヘラケズリと体部下端ヘラケズリを行っている。

S102は18点を図化した。底部と体部の一部が残存する破片資料が多いが、黒色処理は7点である。無彩では、第40図36・37・41・42は回転糸切り無調整、43は全面手持ちヘラケズリである。40は全面回転ヘラケズリで体部下端手持ちヘラケズリ、44・45は底部全面手持ちヘラケズリで体部下端手持ちヘラケズリ、46は底部回転ヘラケズリで体部下端手持ちヘラケズリを施している。黒色処理では、47が底部全面手持ちヘラケズリで体部下端手持ちヘラケズリである。

SK34では9点を図化している。第51図146は回転糸切り無調整、143は全面手持ちヘラケズリで体部下端ヘラケズリを施している。

このようにロクロ土師器（黒色処理を含む）の底部切り離し後の調整、及び体部の調整には多くの技法が使用されていた。近接する同時期の遺跡として海道西遺跡の北西約2kmに位置する大道遺跡で8棟の竪穴建物跡とともに5基の土師器焼成土坑が調査されている。報告書（註7）では9世紀第III～IV四半世紀であり、SK01、S102と同時期である。では、大道遺跡の土師器焼成土坑から出土したロクロ土師器と海道西遺跡出土土器の底部切り離しと調整、さらに器形について比較検討してみたい。



春日部市教育委員会 2005 『浜川戸遺跡 1、2、3、4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第14集 p223 の図に一部加筆修正を加え作成

第60図 東国須恵器生産窯跡分布図

大道遺跡の土師器焼成土坑出土土器の切り離し技法は糸切り無調整で再調整は1点のみである。器形的には海道西遺跡SK01 第37図1は大道第1遺跡SK01 第38図127に近いが、SK01は口唇部がやや外反するのに対して大道第1遺跡は直線的である。SK01 第37図11と大道第1遺跡SK02 第39図133も同様であろう。黒色処理された高台付壺は、大道第1遺跡では133に高台を貼付けた器形だが、海道西遺跡はSI02 第40図47に高台を貼付けた体部が直線的に広がる器形である。また、高台の形状は大道第2遺跡に近い形状をみると總じて短脚が多い。このような違いから大道遺跡の土師器焼成土坑出土土器とは若干の時期差を示唆させる。ただ、大道遺跡の竪穴建物跡出土土器では底部周辺へラケズリや器形的にも類似するものが出土している。今回は土師器焼成土坑出土土器との比較に留め、今後、資料の増加と詳細な検討によるロクロ土師器の生産と広がりの解明に期待したい。

3. 大林河畔砂丘の形成年代について

海道西遺跡が立地する大林河畔砂丘は市内に存在する5か所の河畔砂丘のうち、北から2か所目に位置する。ちなみに市内の河畔砂丘を北から列記すると、袋山河畔砂丘・大林河畔砂丘・北越谷河畔砂丘・東越谷河畔砂丘・大相模河畔砂丘となる（註8）。大林河畔砂丘は直線状で細長い1列の河畔砂丘（第3図・第59図）であり、中ほどに大林寺をのせ、長さ550m、幅40m、低地との比高は約3mとなっている。

今回の海道西遺跡発掘調査は大林河畔砂丘で初めての調査事例であるのみならず、市内の河畔砂丘上の遺跡としても初めての調査事例である。今回、遺跡の内容解明を目的とすると同時に、大林河畔砂丘の形成年代についても検討を行った。

第61図は第14図d-d'断面を調査終了後に深掘りし、断面を追加したものである（註9）。表土下に18世紀後半以降の堆積土1・2が厚さ約25cm～60cm存在する。SD01は18世紀後半の溝であり（10ページ参照）、SK03を切る。SK03は9世紀後半から10世紀初頭の土坑である（9ページ参照）。

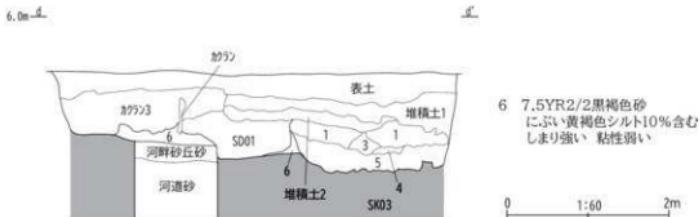
第61図6層はSD01・SK03が掘り込まれる土層であるが、河畔砂丘砂かどうかの判断は困難であり性格不明である。ただし、それよりも下位の層は淘汰の良さなどから河畔砂丘砂であることが確認できた（註9）。確実に河畔砂丘砂と言える層は厚さ約25cmを測る。河畔砂丘砂の下位は河道砂であり、河畔砂丘砂よりも淘汰が悪く、巣穴化石が見られる。標高約3.5mまで掘り下げ、河道砂は少なくとも厚さ約80cm存在することを確認した。

よって、SK03は河畔砂丘砂よりも上位に堆積する6層を掘り込んでいるため、SK03の帰属時期である9世紀後半から10世紀初頭には河畔砂丘砂が堆積していた可能性がある。又はその可能性が高い。なお、その可能性を補強することになる、SK03埋土に河畔砂丘砂が含まれているかどうかについてはSK03埋土が砂主体であることから判断できなかった。

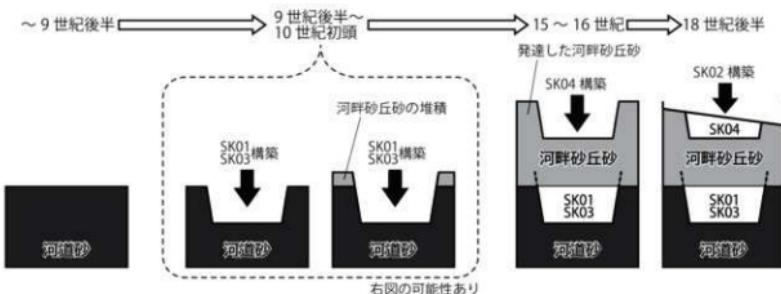
次に河畔砂丘の終了について考えた場合、火葬土坑であるSK04が鍵になると考えられる。SK04は横長の焼成坑の片側に張り出し部があり付くもので、全体でT字形を呈するものであり、築瀬氏分類のB1類に相当する。房総の事例を援用すると15世紀から16世紀に比定されると考えられる（註10）。SK04を含む調査区断面である第15図e-e'断面を見ると、残念ながら近世以降のSK02によりSK04が削平されている。よって、SK04が河畔砂丘砂をどの面から掘り込んでいるかについて確認することができない。他の河畔砂丘上の遺跡の調査例などでは、中世に河畔砂丘の形成が終了している事例があるため、本遺跡において層位的な根拠は示せないが、SK04は河畔砂丘砂を掘り込んで構築されていたと考えたい。つまり、15世紀から16世紀頃には河畔砂丘が完成していたと想定する。

以上の内容をモデル化したものが第62図である（註11）。9世紀後半から10世紀初頭については可能性も含めて2つの場合を提示した。どちらにせよ河畔砂丘砂の下位は河道砂であるため、河畔砂丘が完成する前に、水害の危険のある河道際に住み着いたことになる。この点について疑問が残るが、すでに河畔砂丘砂が堆積し始めていたのであれば、河畔砂丘が堤防の役割を果たしていた可能性がある。

中川水系の河畔砂丘の形成年代については、それぞれの河畔砂丘により形成された時代が違うという指摘がある上で、これまでの河畔砂丘上の発掘調査等事例から、形成の始まりについて新しい年代を示すものは浜川戸河畔砂丘であり、これは砂丘下のシルト層から出土した遺物が9世紀後半であること



第61図 河畔砂丘砂及び河道砂とd-d' 断面の関係



第62図 大林河畔砂丘形成と遺構構築の関係

を根拠とする。終了を示すもので最も古い年代は同じく浜川戸河畔砂丘の鎌倉時代中ごろとされている。

今回の調査において、大林河畔砂丘においては砂丘上でも人々の活動があったこと、河畔砂丘形成時点でも活動が継続していたこと、少なくとも大林河畔砂丘の形成の始まりは浜川戸河畔砂丘の始まりとほぼ同時期であることが実証できたと言える。

- (註1) 春日部市教育委員会 2005『浜川戸遺跡1、2、3、4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第14集
- (註2) 春日部市教育委員会 1999『小測山下北遺跡・八木崎遺跡2次 花積内耕地遺跡5次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第8集
- (註3) 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002『八木崎遺跡・県立春日部高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告書一』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- (註4) 春日部市教育委員会 2005『浜川戸遺跡1、2、3、4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第14集 p.230
- (註5) 國土交通省関東地方整備局・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『八木崎遺跡－中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第407集
- (註6) 春日部市教育委員会 2002『浜川戸遺跡8、10次 花積台耕地遺跡6次 慈恩寺原南遺跡 墳内18号墳』春日部市埋蔵文化財調査報告書第12集
- (註7) 埼玉市教育委員会 2016『大道遺跡発掘調査報告書I－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－』埼玉市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- (註8) 埼玉県 1993『河畔砂丘』『中川水系 総論・自然 中川水系総合調査報告書I』
- (註9) 令和4年5月12日、現地で足立久氏男、小川政之、平社定夫氏の3氏と共に検討を行った。
- (註10) 草原裕一「別裁の中國墓」『日本の中国墓』高吉書院
- (註11) 大林河畔砂丘の形成や遺構の膨り込み面を一部推定してモデル化した因で、各層の厚さや遺構の削除深度を正確に表したものではない。
- ただし、SK01・SK02 底部が同様であることは現地で平社定夫氏からご教示を得た。

引用・参考文献

- 荒原雄大・鬼塚千花 2020『越谷市増林中妻遺跡－市域で初めて確認された古墳時代前期の遺跡－』『埼玉考古』第55号
- 春日部市遺跡調査会 1998『小測山下北遺跡2次』春日部市遺跡調査会報告書第5集
- 春日部市遺跡調査会 2001『浜川戸遺跡17、19、20次－都市計画道路武里内牧線造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』春日部市遺跡調査会報告書第12集
- 春日部市遺跡調査会 2004『小測山下北遺跡7次調査地点』春日部市遺跡調査会報告書第15集
- 春日部市遺跡調査会 2006『小測山下北遺跡2次調査地点－共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』春日部市遺跡調査会報告書第18集
- 春日部市教育委員会 1999『小測山下北遺跡 八木崎遺跡2次 花積内耕地遺跡5次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第8集
- 春日部市教育委員会 2002『浜川戸遺跡8、10次 花積台耕地遺跡6次 慈恩寺原南遺跡 墳内18号墳』春日部市埋蔵文化財調査報告書第12集
- 春日部市教育委員会 2004『八木崎遺跡3次・浜川戸遺跡27、28次・小測山下北遺跡6次・慈恩寺原南遺跡2次』春日部市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 春日部市教育委員会 2005『浜川戸遺跡1、2、3、4次調査地点』春日部市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 加藤恭朗・根本 靖・富元久真子・坂野千登勢・平野寛之 2015『南比企窓と東金子(Ⅱ)－東金子窓の開窓と9世紀の編年－』古代の入間を考える会
- 国土交通省関東地方整備局・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2013『八條遺跡－中川右岸改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第407集
- 越谷市 1975『越谷市史一 通史上』越谷市役所
- 越谷市教育委員会 2016『大道遺跡発掘調査報告書I－西大袋土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
- 越谷市教育委員会 2017『越ヶ谷御殿跡発掘調査報告書I－サンリットタウン越谷A・サンリットタウン越谷B新築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 埼玉県 1993『河畔砂丘』『中川水系 総論・自然 中川水系総合調査報告書I』
- 埼玉県・財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002『八木崎遺跡－県立春日部高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第281集
- 埼玉県・公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022『越谷警察署前遺跡－越谷警察署仮設庁舎建設工事（越谷警察署前遺跡 No.78-016）埋蔵文化財発掘調査業務委託』埋蔵文化財発掘調査報告書『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第478集』
- 平社定夫・佐藤和平・堀口萬吉 1994『埼玉平野の河畔砂丘』埼玉大学紀要（自然科学篇）第29巻（p.121～143）別刷
埼玉大学教養部

写真図版

写真図版1



写真1 調査区全景（合成写真）

写真図版2



写真2 1区東西トレンチ 土層断面① (南から)



写真3 1区東西トレンチ 土層断面② (南東から)



写真4 1区南北トレンチ 土層断面① (西から)



写真5 1区南北トレンチ 土層断面② (西から)

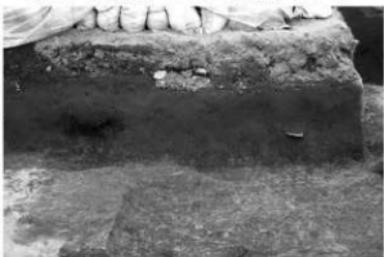


写真6 1区南壁 土層断面① (北から)



写真7 1区南壁 土層断面② (北から)



写真8 1区東壁 土層断面 (西から)



写真9 2区南壁 土層断面① (北から)

写真図版3



写真10 2区南壁 土層断面②（北から）



写真11 SK01 カマド土層断面（北東から）



写真12 SK01 遺物出土状況（北から）



写真13 SK01 遺物（2）出土状況（北から）



写真14 SK01 遺物（16）出土状況（南から）



写真15 SI02 土層断面①（東から）



写真16 SI02 土層断面②（東から）



写真17 SI02 遺物（36）出土状況（東から）

写真図版4



写真18 S I 02 遺物出土・完掘状況（東から）



写真19 S I 02カマド 土層断面（南から）



写真20 2区北壁・S I 02カマド 土層断面（南から）



写真21 S I 02カマド 遺物出土状況（南から）



写真22 S I 02 掘方土層断面・炭範囲（東から）



写真23 S K 03 土層断面・完掘状況（北西から）

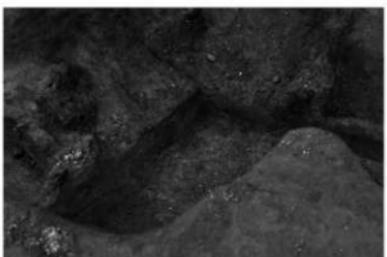


写真24 S K 04 炭化物断ち割り断面（北西から）

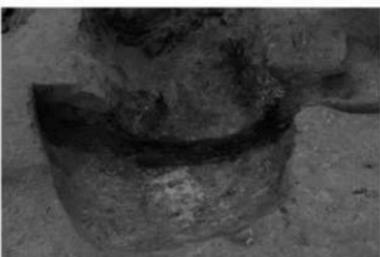


写真25 S K 04 土層断面（北から）

写真図版5



写真26 SK04 張り出し部土層断面 (北から)



写真27 SK04 炭化物出土状況 (東から)



写真28 SK04 完掘状況 (東から)



写真29 SK13 土層断面・完掘状況 (東から)



写真30 SK14 土層断面 (北から)



写真31 SD01 土層断面 (南から)

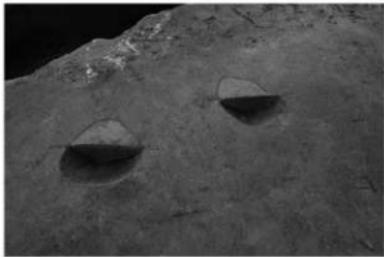


写真32 P01・P02 土層断面 (南から)

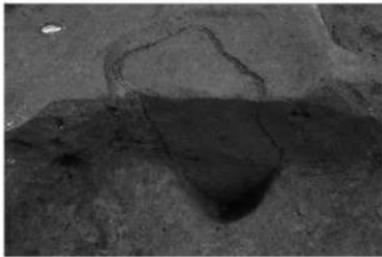
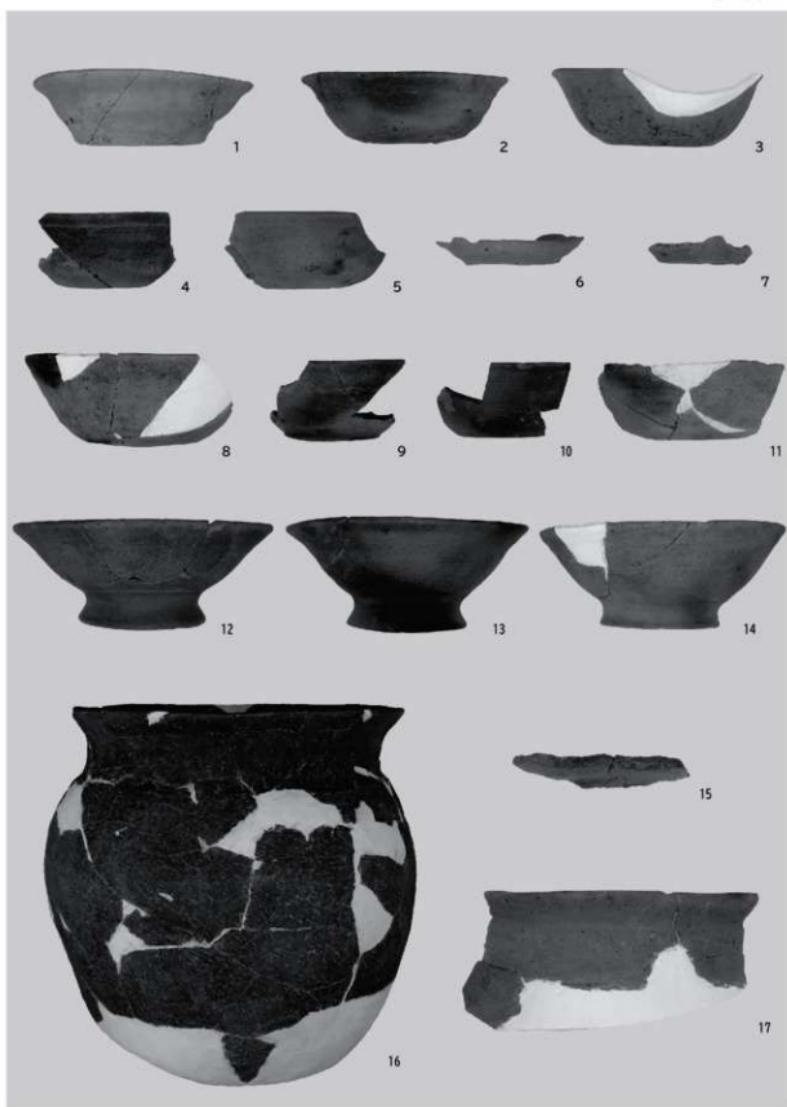
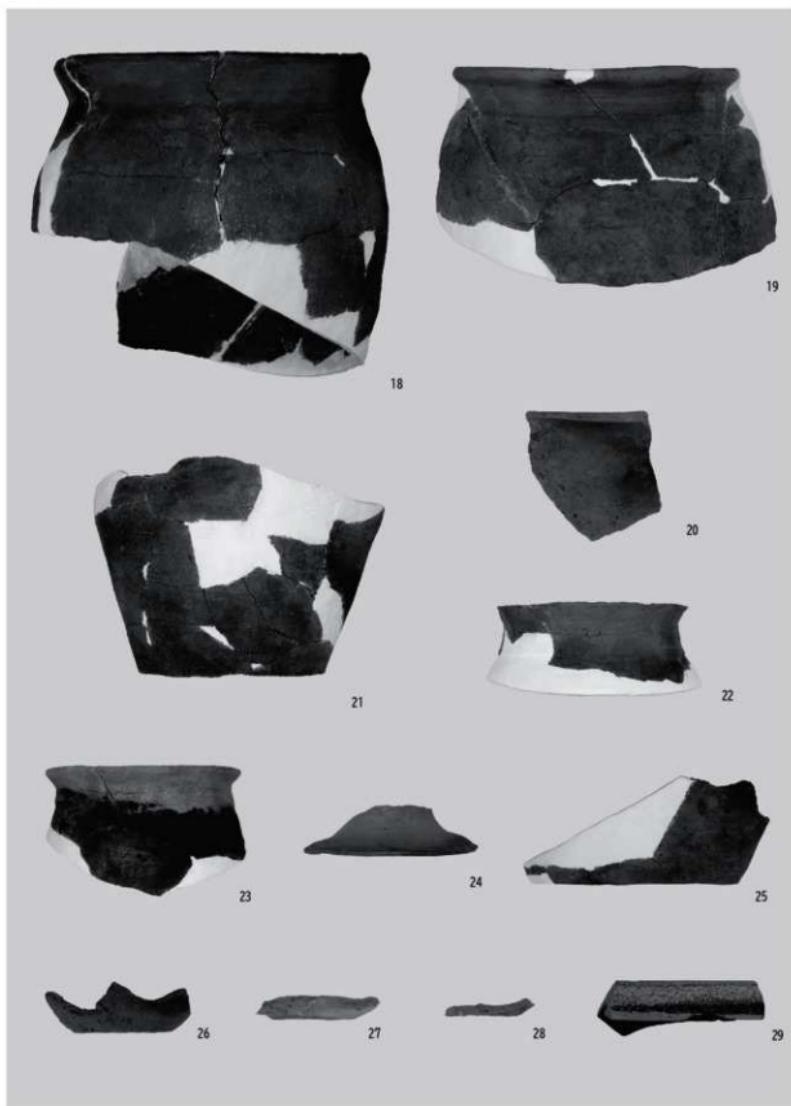


写真33 P05 土層断面 (北から)



SK01出土遺物（1）

写真図版 7

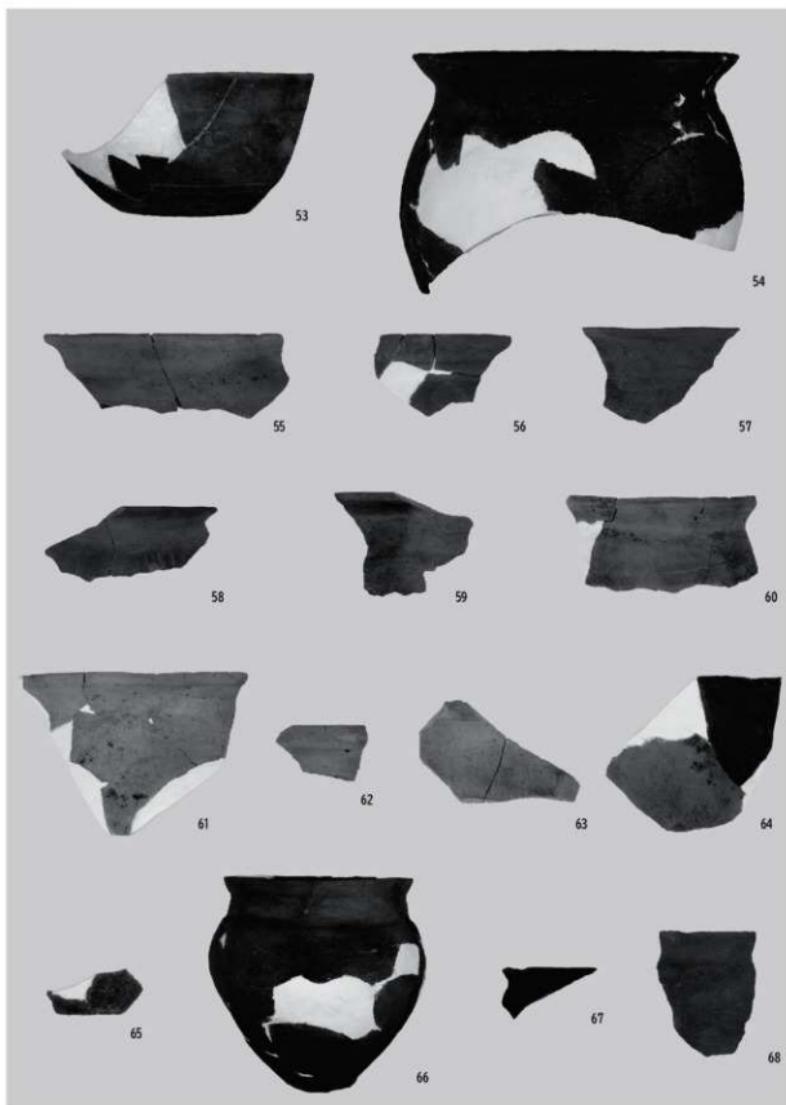


SK01出土遺物 (2)

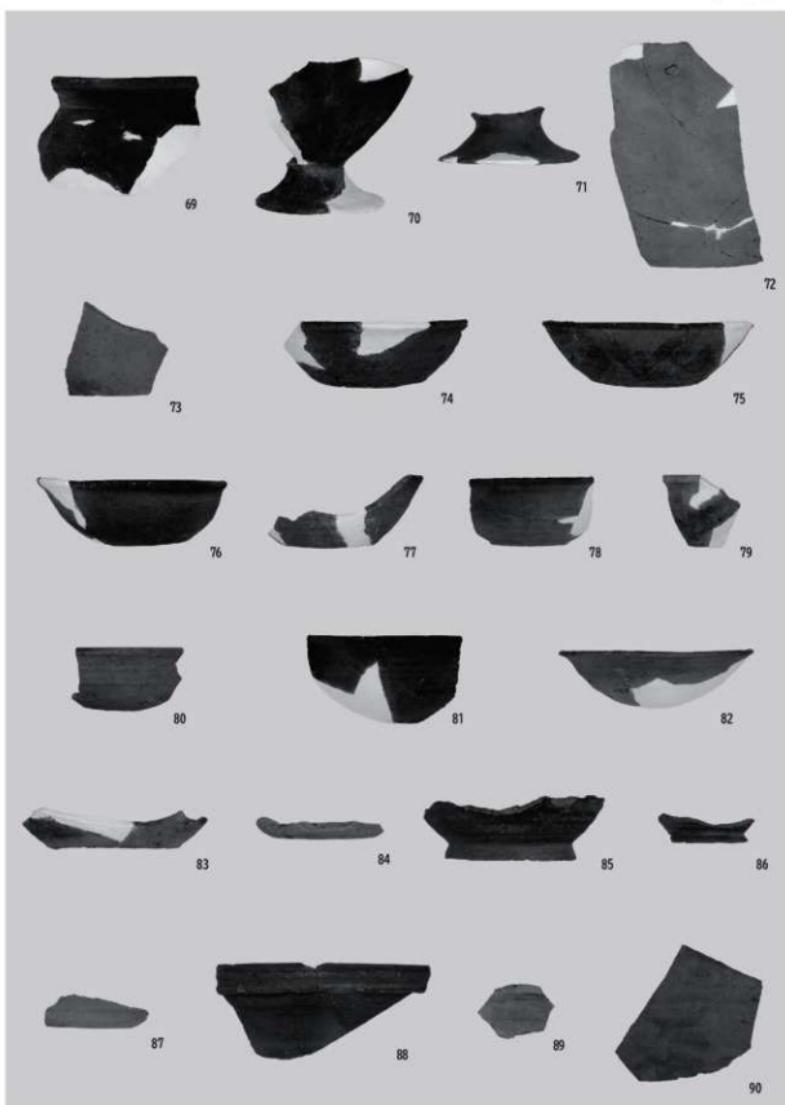


SK01出土遺物（3）・SI02出土遺物（1）

写真図版9

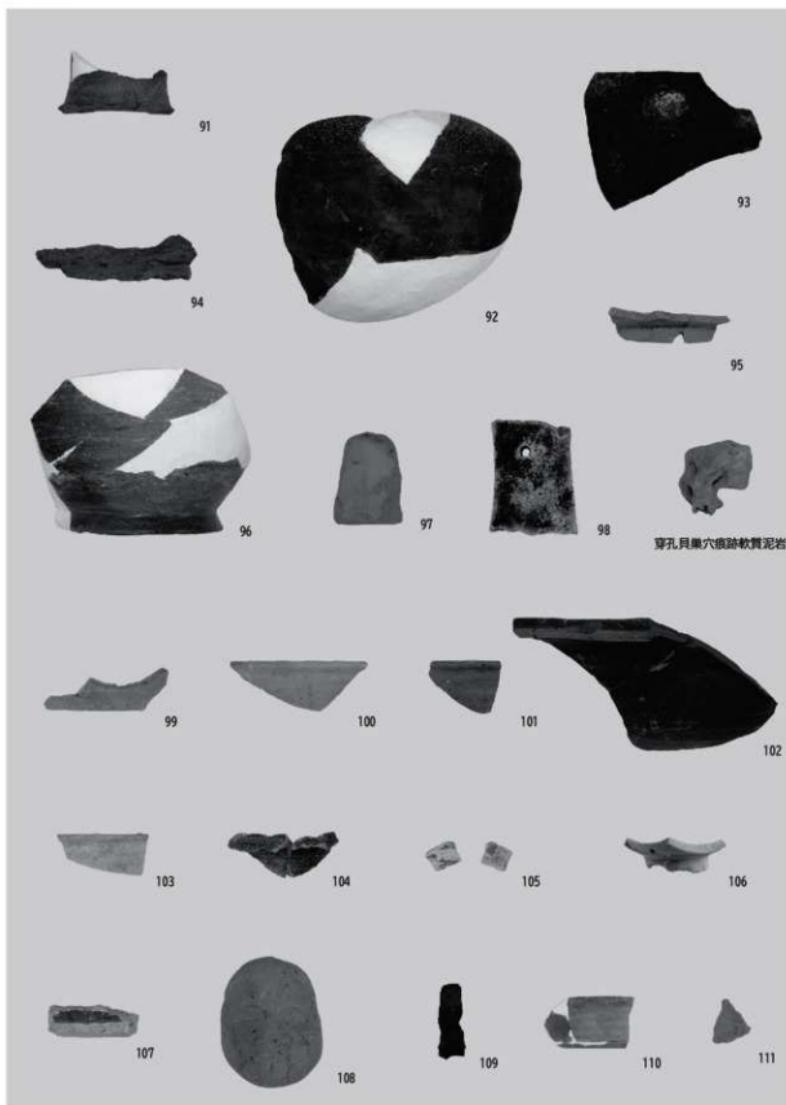


S I 02出土遺物（2）

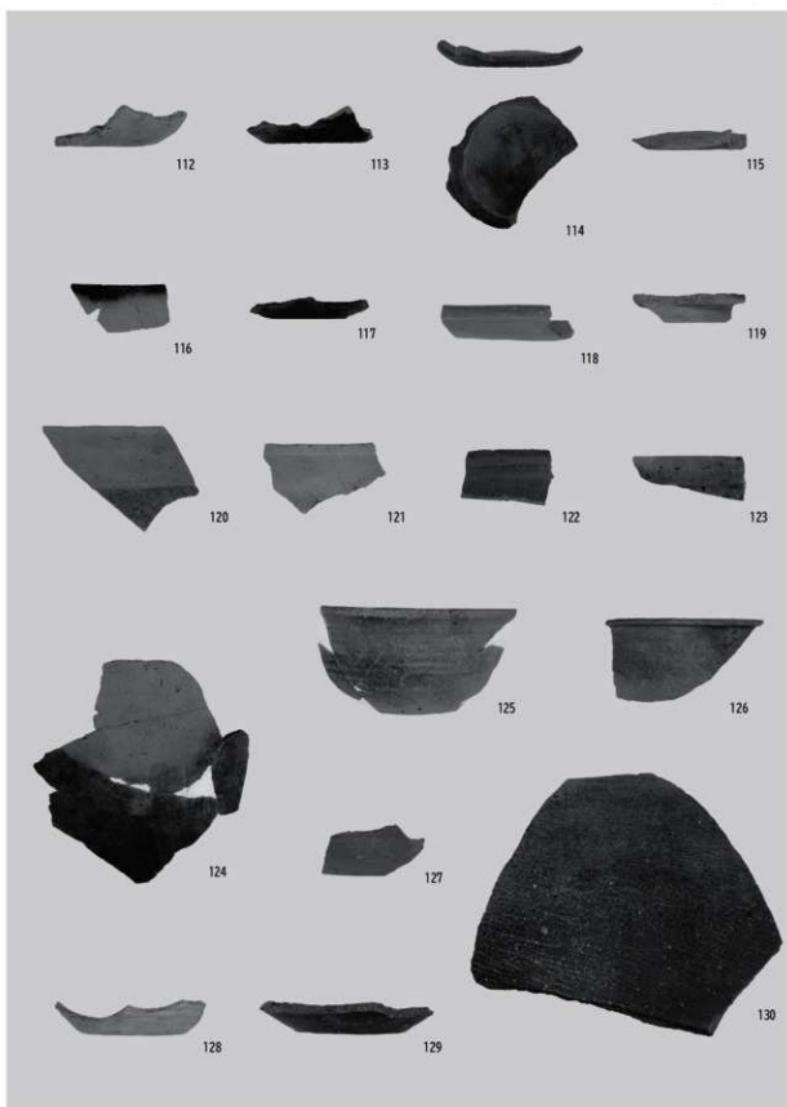


S I 02出土遺物 (3)

写真図版11

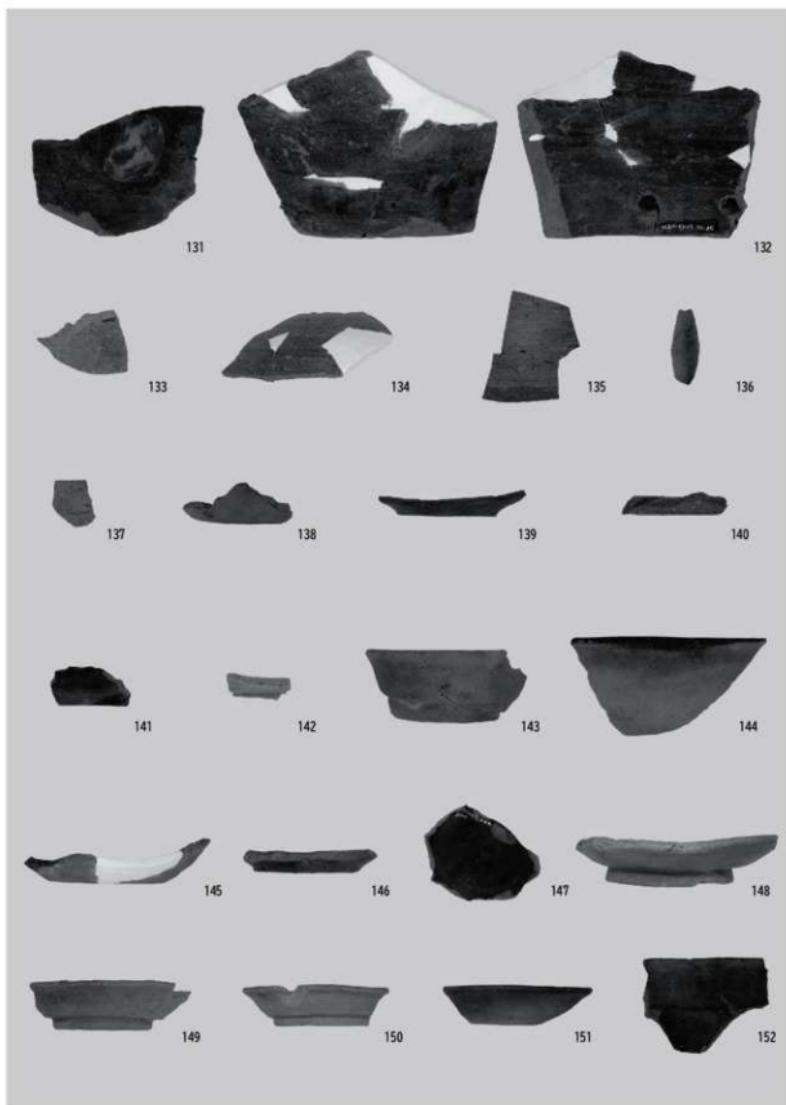


S I 02出土遺物（4）・S K 02出土遺物・S K 03出土遺物（1）

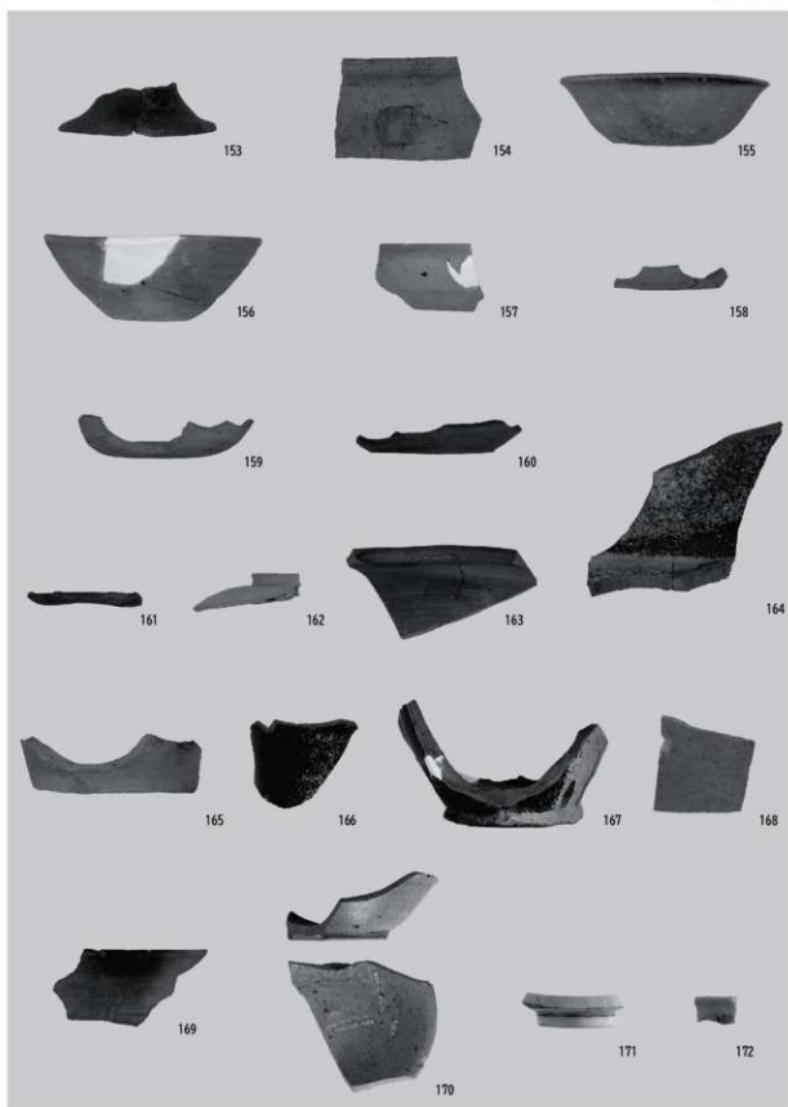


S K03出土遺物（2）

写真図版13

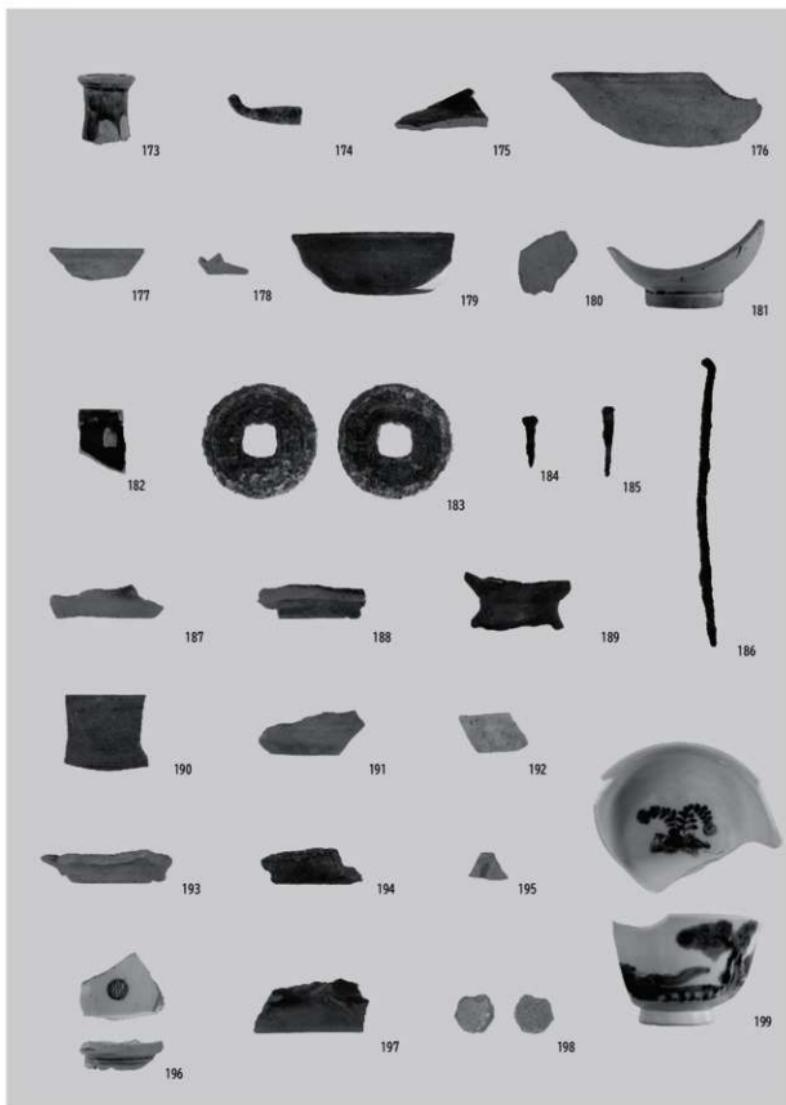


S K03出土遺物（3）・S K04・S K11・S K12出土遺物・S K34出土遺物（1）



S K34出土遺物（2）・S D01出土遺物（1）

写真図版15



S D01出土遺物（2）・P 03・包含層・鉗状構造・構造外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かいどうにしいせきはぐくつちょうさほうこくしょ
書名	海道西遺跡発掘調査報告書1
副書名	分譲住宅建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	一
シリーズ名	越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	菟原雄大・小林陽子・下岡孝明・根本 靖
編集機関	越谷市教育委員会
所在地	〒343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号 TEL 048(964)2111
発行年月日	西暦2022(令和4)年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 °'."	東経 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
海道西遺跡	埼玉県越谷市大字 大林字海道西 9-1の一部	11222	78-017	35°54'37"	139°46'40"	20220411 ～ 20220513	136.54	記録保存 調査 (住宅新築工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
海道西遺跡	集落跡	平安時代 中世 江戸時代	竪穴住居跡 2軒 火葬土坑 1基 土坑 32基 溝 1条 ピット 5基	須恵器、土師器 施釉陶器、陶磁器 土器、土製品、鉄製品 銅製品、石製品、錢貨 炭化物、骨片	河畔砂丘上の遺跡であり カマドや遺物を伴う平安 時代の住居跡が2軒確認 された。

要約	海道西遺跡は元荒川の左岸、大林河畔砂丘上に立地している。市内で初となる河畔砂丘上の遺跡の調査事例である。 今回の調査では、主な遺構として竪穴住居跡2軒、火葬土坑1基、土坑32基が検出された。住居跡はカマドを伴い、時期は出土遺物等から9世紀後半から10世紀初頭、平安時代のものと考えられる。出土遺物は口クロ成形の土師器を中心に、武藏型の壺や県内の南比企窯、東金子窯、末野窯産の須恵器が出土している。また、茨城、千葉系の須恵器・土師器も出土しており、当時の利根川水系を利用した河川流通及び地域交流の一端をうかがい知ることができる。
	大林河畔砂丘の形成年代については、9世紀後半から10世紀初頭には河畔砂丘が堆積していた可能性がある。又はその可能性が高い。河畔砂丘の完成は15世紀から16世紀頃であると想定できる。 さらに大林河畔砂丘においては砂丘上でも人々の活動があったこと、河畔砂丘形成時点でも活動が継続していたこと、少なくとも大林河畔砂丘の形成の始まりは上流の浜川戸河畔砂丘の始まりとほぼ同時期であることが実証できた。

越谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

海道西遺跡発掘調査報告書 1

編 集 越谷市教育委員会

埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号

電話 048(964)2111

株式会社中野技術

埼玉県新座市東北一丁目14番1号SEASONビル3階

電話 048(486)0271

発 行 越谷市教育委員会

発行日 令和4年12月28日

印 刷 望月印刷株式会社